ファンタジア・フロンティア！

獅子竹　鋸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタジア・フロンティア！

【Ｎコード】
Ｎ２２７４Ｏ

【作者名】
獅子竹　鋸

【あらすじ】
ドイツ軍独立対戦車猟隊隊長であった主人公リィーゲルト・フォン・ハインリッヒは、部下と共にベルリン防衛戦にて生涯を終えた。――はずだった。「魂の選定」よって、リィーゲルトは異能の力を得、戦乙女と共に異世界へと舞い降りた――――。初投稿ですが、とても未熟な私ですが、リィーゲルトと一緒に成長して行けたらなあなんて思ってます。若干設定というか世界観にモンスターハンターを取り入れているのでちょっと不安です。と言ってもモンスターの名前と見た目ぐらいしか使わない予定なので、たぶん大丈

夫かな？

「死地」（前書き）

はじめまして、獅子竹　鋸です^^　初投稿で自信ないのですが、なにとぞ！　なにとぞ！！　はい、わたしうっとうしいですね、自重しますw

「死地」

＞i１６４５０－１９５３＜

――――――ズドーン、ズーン、……ズドドーーン――――

鳴り止まない砲声、などとありふれた表現しか思いつけなかない。耳に入ってくるのは砲声だけ。銃声、悲鳴、怒号のいずれもない。そこにあるのはただ一方的な攻撃――――――――虐殺――――――。

降り注ぐ砲弾の雨、大小様々な殺意は鉄槌となって我々を裁く……

土は穿たれ、砲片は舞い、業火は吹き、人は狩られる。

この場において、死とは救済であり、慈悲であり、甘美なる誘いだ。

生きている限り、我々はこの「死の雨」に晒され、いずれ潰える。

――――望むらくは、死の救済を。願わくば、戦乙女の選定を――――

――――来るべき最終戦争（ラグナロク）に赴く神の一兵卒とならんことを――――

リィゲル「……みんな、聞いてくれ……」

俯いて祈りを捧げていた部下たちが顔を上げる。皆生気がなく、ひたすらに虚無感に打ちひしがれていた。恐怖はずいぶん前に通り越し、諦めと無情感が地下塹壕に蔓延していた。

リィゲル「今さらだと思うが、私は諸君らに謝りたい。すまなかった。私は、諸君らの命を預かる指揮官でありながら、結局は諸君らを死地へと追いやることになってしまった。まもなくここ、ベルリンは陥落する。この砲撃がやめば、ソ連軍は大挙して進撃を開始することだろう。急降下（ヤーボ）爆撃機は我々を嬲り、戦車は我々を踏みつぶし、歩兵は我々を血肉へと変え、なおも収まることをしらない矛先は、我々が守るべき市民を屠らんとするだろう。私は、一ドイツ軍人として、彼らを守らねばならない。しかし、できることならば、諸君らをも守りたかった。諸君らを本来の日常へと導きたかった。諸君らには、未来の担い手になってもらいたかった！……私とともに、この地獄にとどまってくれたことを心より感謝する。私は、諸君らの知っている通り未熟で、浅はかだ。だがしかし、一つだけ。図々しい願いではあるが、私は諸君らに望みたい。共に立ち、共に戦い、最後の一兵になろうとも、敵の前に立ち塞がり、未来のための――未来が輝ける栄光のもとにあらんための礎とならんことを！私は諸君らに死を望む。地に伏し、骸を晒すことを望む。爆炎に身を焦がし、敵弾に倒れることを望む。ゆえに、私は諸君らの死神となろう。諸君らの命をもって、敵を冥界へと誘おう。そして――」

私はそこで語をとめ、部下たちを見た。北アフリカより常に共に

あった、自慢の戦友たちの顔を一人ずつ目に焼き付けていく。ハインツ、ホートマン、ディミトリ、プレーニー、ハンス、ベーケ、ザイドリッツ――――――一人ずつ、その名とともに心に刻みつける。

リィゲル「――そして、私は諸君らに今一度問いたい。私と共にここにあり、ここで戦い、ここで死に、天に召されることを良しとするのか？」

砲撃の音が止んだ。間を置かず、突撃の笛の音と鬨の声が響く。ソ連軍の進撃が開始された。

リィゲル「……それでもなお異存なき者は、ただ一言をもって答えよ！」

軍靴の音が木霊する。何千、何万という殺意の軍勢が大地を揺らす。

――されど、生を諦めた我々にその音は届かない。一人の部下が、右手に持つモーゼルｋａｒ９８ｋ（ライフル）を高く掲げた。するとまた別の部下がパンツァーシュレック（対戦車ロケット砲）を頭の上に掲げた。そうして、全員が各々の武器を天に向かって突き出し、こう叫んだ。

兵士一同「「「「「「「「おおおおおお！！！！！」」」」」」」」

と。

リィゲル「……諸君、ヴァルハラで会おう……」

――――１９４５年五月７日、独立対戦車猟隊の生き残り約３０名はこの日、ベルリン市から逃げ遅れた市民たちを逃すため、殿（しんがり）を――決して撤退することのできない盾としての役目を、果たした。

その隊長と思われる遺体の傍らに、一枚の純白の羽が落ちていたのは、誰も知らない。

「死地」（後書き）

プロローグ短っw　次話　戦乙女登場　注：レナス様ではありません！

第一話　「魂の選定者」（前書き）

ふう、やっとかけました＾＾第一話です！

第一話　「魂の選定者」

＞ｉ１６４５０―１９５３＜

爽やかな眩しさに、閉じていた瞼を少し開く。ぼんやりと見えたのは空を揺蕩う綿雲と、清々しくも朗らかな春の日差し。

眩い光にも馴れてきた私の目は、さらなる情報を求めて開かれる。

綿雲は次第にはっきりとした輪郭を現し、陽光によって光と影のコントラストを纏う。

私は上半身を起こし、ゆっくりと見渡した。

どこまでも続く緩やかな草原に、ポツンとたたずむ一本の大木。胴囲十数メートルはあろうかという大木である。

不意に、むせ返るような、それでいて心地よい緑の香りが鼻孔をくすぐった。幼少時代養父と過ごしたシュヴァルツヴァルトの想い出が鮮明に蘇る。湖畔で釣りをしたり、鹿狩りを手伝ったり、乗馬もしていたと思う。

そっと、懐かしさに瞼を閉じる。そして――

――戦場に散って行った部下、いや、戦友たちに静かに黙祷を捧げた――

鬨の声を上げ、市街地にどっと押し寄せるソ連軍に対し、私たちの士気は衰えることを知らなかった。皆よく動き、私の指示を的確にこなしていく。押しては引き、引いては押す。市街地特有の限られた視界という、敵にとっての弱点を存分に利用し、リアルタイムで罠を構築しつつ、狩り場に迷い込んだ獲物をひたすらに喰らい尽した。途中から加勢してくれた予備戦車中隊との連携も上手くいっていたと思う。あれだけの戦車が今の、わが軍によく残っていたものだ。流石は、東部戦線で活躍していただけはある。生き残ることを最優先にした、よい指揮官に恵まれたのだろう。私は恥を覚えずにはいられなかった。

――約束された勝利に酔いしれた軍団程、頑なで、脆いものはない――

今は亡き我が養父が残した言葉の一つである。

疑いようもない勝利というものは、言うまでもなく将兵たちの士気を極限まで引き立て、強靭な戦闘集団へと変えていく。しかし、戦さにおいて強さとは全ての要素足りえない。このとき養父は「戦とは、これすなわち生き物である」と付け加えて教えてくれたものだった。つまり、有り程に言うと、戦では何が起きるか分からないということである。

例えば、鎌倉時代中期。日本を支配せんと送られた十数万の圧倒的な元寇軍は、戦いによってではなく、台風によって壊滅した。

例えば、百年戦争末期。フランスのオルレアンを包囲、制圧せん

と陣取っていたイングランド軍は、平民の出の一人の乙女（ピュセル）の登場によって最終的には敗れた。

例えば、古代ギリシャ。ギリシャの地を征服せんと押し寄せてきたペルシャの数十万の大軍を、レオニダス王は地形を利用し、たった３００人で二日間も足止めすることに成功した。

これらの事象は、誰にも予期することなどできなかったはずである。

そして現在、ソ連軍の慢心というものが私たちに少なくとも味方してくれている。数を考慮しなければ。

人海戦術とはよく言ったものである。

倒しても倒しても、彼らは後から後から湧いて出た。歩兵は自軍の屍を踏み越え、戦車は自軍の生存者など気にせずに雪崩込んだ。

もとより敗戦以外考えようもない首都防衛線である。残存する武器弾薬、燃料、兵力などは正直言って申し訳程度しかない。いくら優れた用兵家であったとしても、物資不足には打ち勝てない。わずかな時間だけでも、稼ぐことができたのならいい方である。

潮時を感じた。

私は予備戦車中隊に市民の誘導と護衛に向かうように打診した。

返信にはただ一言、「ヴァルハラで会おう」とあった。

私の意を汲み取って、すぐに撤退を決意してくれたかの部隊長には感謝してもしきれない。

そして、予備戦車中隊の撤退を確認してからしばらくして、私は敵狙撃兵の放った一発の弾丸に肝臓を撃ち抜かれ、部下たちの私を呼ぶ声を聞きながら世を去った。

リィゲル「――――――さしずめここは、冥界へと落ちる私に与えられた、最後の幻想か……」

ここまで冷静でいられる自分が、内心不思議で堪らなかった。死後の世界にいるという実感はないが、自分が死んでいるという事実はごく自然に受け入れられた。だからだろうか、私は少年の頃に帰った気持ちで、あの大木に登って見ようと思い至った。

リィゲル「あそこから見た景色は、さぞ雄大だろう」

そう独りごち、起き上がって遥か前方にそびえる大木に向かって歩を進めた。

ふと私は、大木の根元に人らしきものを認めた。遠くからでは見えなかったが、あれは確かに人に見える。近付くに連れ、その者が女性で、しかも青を基調とした立派な甲冑を着ていることなどが分かった。

さらに近付く私。甲冑の女性は妙齢で、それでいて大変、美しい。その身に纏う甲冑の意匠もうなるものがあったが、それさえも彼女

を引き立てる材料にしかなりえなかった。少なからず私はそう思った。

（――――三対の羽をあしらった髪飾り。天の川のごとく流れる銀の髪。金で縁取られた美しい胸甲。女神を思わせる可憐さと神々しさ……）

もしや、と思う。

（――――天駆ける白馬にまたがり、手に持つ槍は、常に勇者の魂を求めて彷徨う――――）

まさか、と思いたい。

リィゲル「――――最高神オーディンに仕える魂の選定者、戦乙女ヴァルキュリア――――」

彼女は静かに、微笑んだ。そう、私の呟きは、肯定されたのである。

私はあまりの衝撃に、膝を屈した。

――――何故、如何して私なのか、と――――

私は、部下たちの命を救うことすらできなかった。あまつさえ、私は彼らを死地に追いやった。私は、彼らの命をもって敵を防いだ、「死神」なのだ。私のような咎人が、選ばれるはずなど無い！

彼女は、微笑んだまま私を見つめ、こちらへと歩き始めた。私は、動くことができなかった。衝撃から立ち直れなかったこともあった

が、なにより、私は彼女の笑顔にあてられていた。

およそ人類のもてる全ての美辞麗句をもってしても筆舌し難く、吟遊詩人は自らの喉をかき切り、絶世の美女と謳われる女どもは己の醜さを呪うだろう。

到底、人の枠に当てはめて考えることなど、それ自体おこがましく、罪深く感じられた。それほどに、美しかったのである。

ついに、彼女は私の目の前までやってきた。すると、彼女は自分から膝を折り、私と目線を合わせたのである。

そして、彼女の右手がそっと、私の左頬を撫でる。

ヒルダ「初めまして、リィーゲルト・フォン・ハインリッヒ。貴方のお考えの通り、私は、戦乙女ヴァルキュリアとして、貴方の魂をここヴァルハラへと導きました」

リィゲル「何故、如何して私のような人間を選んだのです？」

戦乙女「貴方の魂はいと貴く、清廉で、勇にあふれています。これほどの魂を持った勇者を、どうして導かずにいられましょうか」

リィゲル「そのようなこと、大変恐れ多いことです。私は貴女が仰るような高貴な人間ではありません」

戦乙女「その謙虚さも、素晴らしいところです」

リィゲル「滅相もありません。私など、本来は冥界に堕ちるべき身。とても、神に仕える者としてふさわしくありません」

そこまで私が言うと、彼女はさっと立ち上がり、たしなめるように告げた。

戦乙女「貴方は二つ、勘違いをしているようです」

リィゲル「勘違い？」

戦乙女「ええ、一つに、貴方は素晴らしい事を成す可能性を十分に持った者であり、今それを放棄しようとしていること」

リィゲル「どういうことですか？」

戦乙女「あの大木を御覧なさい。あれは、無数に存在する世界を支える世界樹ユグドラシルなのです。その枝の数だけ、葉の数だけ、世界が存在しています」

リィゲル「並行宇宙（パラレルワールド）、か」

戦乙女「はい。貴方にはその内一つの世界に転生し、自らに託された使命を果たさなければなりません」

リィゲル「その使命とは何なのです？」

戦乙女「残念ながら、私の口からお教えすることはできません。なによりも、その使命とは、本人にしか気付けないものなのです」

リィゲル「――――もう一度、生きよというのですか？」

戦乙女「はい」

リィゲル「――――それが、私のたどるべき道なのですか？」

戦乙女「道とは、自ら見つけるもの。たどるものではありません」

道……。

――――人の道とは、最も険しく、暗く、息苦しいものだ――――

そう言えば、養父がいつも口癖のように言っていた。

――――だが、その頂きにあるものは何よりも素晴らしい――――

こうも言っていた。

――――私は、未だにその頂きに臨んだ事はない。これからもないだろう。だから――――

リィゲル「――――だから、どうかお前には登りつめてもらいたい」

戦乙女「貴方の、お父様のお言葉ですね」

リィゲル「父を知っているのですか？」

戦乙女「彼もまた、ここに呼ばれ、旅立って行きました。もっとも、選定者は私ではありませんでしたから、そこまでは知りません」

リィゲル「そうですか……」

日本人であった養父は、私の両親の友人だったらしい。らしい、と言うのも、私は両親の顔を知らない。聞くところによると、私が生まれてすぐ、交通事故で死んだそうだ。息を引き取る間際、病院に駆け付けた養父に私のことを頼み、逝ったと言う。養父は大変厳格であった。ドイツ語はもちろん日本語や英語、フランス語などの多数の言語、読み書きそろばん、歴史、科学、武道、道徳などなど。養父は己の持つ全てを私に授けてくれた。一時は反発もしたが、彼は私にとって養父などではなく真の父であり、越えるべき壁であり続けた。それがよもや――――

リィゲル「――――よもや、死んでもなお私の壁であり続けていてくれていたとは……」

戦乙女「良いお父様をお持ちになられましたね」

リィゲル「ええ、偉大な父でした。いえ、父です」

戦乙女「道は見つかりましたか？」

リィゲル「はい。もう迷いません」

戦乙女「では、盟約を。私に名前をお与えください」

リィゲル「名前を？」

人が神に名前を与えるなど聞いたことがなかったし、そもそも考えもしなかった私は、オウム返しに尋ねる。

戦乙女「私たち戦乙女は、元来名前を持ちません。それは、いつの日かきたる勇者との盟約に、命名という戒めを与えるためなので

す」

リィゲル「私は使命から逃れることができなくなり、貴女も、私とたもとをわかつことができなくなる。と、いうことですね」

戦乙女「その通りです。その代わり、戦乙女に名前を与えることで、与えたものは使命を果たすまでの命と、異能の力を手にします」

リィゲル「異能の力とは？」

戦乙女「それは、実際に開花するまで分かりません。盟約を交わした瞬間開花する者もあれば、晩年に開花した者もいるのです」

リィゲル「分かりました。では」

戦乙女「もうお決まりになられたのですか？」

リィゲル「ええ、これ以外はあり得ません」

戦乙女「短絡的ではないようですね」

リィゲル「当然ですよ。ところで、二つ目の勘違いとは何なのです？」

戦乙女「……いずれ、お教えする日が来ると思いますが、今はそのときではありません」

リィゲル「貴女がそうおっしゃるのなら、そうなのでしょう」

戦乙女「はい。それでは、盟約の儀を――――」

途端、光の奔流が、彼女からあふれ出た。光はやがて無数の粒となって私と彼女の周りを舞い始めた。

私たちは向き合う。彼女の両の手が、私の両の手を包んだ。

戦乙女「――――汝、『リィーゲルト・フォン・ハインリッヒ』よ。優しく、賢明で、勇なる心を持ちし者よ――――」

光の舞う速度が速くなった。

戦乙女「――――我、戦乙女の命をもって問う。使命に生き、全てをもってそれを果たすか？」

リィゲル「我、『リィーゲルト・フォン・ハインリッヒ』は、我が名と、誇りにかけて誓う――――」

光の速度がさらに上がり、輝きを増す。

戦乙女「――――なれば汝、その誓いによって我に名を与えたまえ。汝が心に秘めたるその名を与えたまえ」

リィゲル「我、盟約の誓いによって汝に名を与える。その名は何人たりとも冒すことあたわず。何人たりとも、堕とすこと叶わず。その名は――――」

決して、短絡的ではない。この名しか考えられなかった。

リィゲル「――――その名は、ブリュンヒルデ」

ブリュンヒルデ「盟約に従い、我、ブリュンヒルデは、汝に力を授けん。願わくば、その使命が果たされんことを」

リィゲル「ここに誓う。共に手をとり、共に歩むことを」

ブリュンヒルデ「いざ行かん。まだ見ぬ地へ。約束の地へ。ユグドラシルの導きのもとに――――」

第一話　「魂の選定者」（後書き）

ああ、ブリュンヒルデ使っちゃったw
ちなみに見た目イメージはレナス・ヴァルキュリア様
性格はベルダンディー様を参考にしちゃいました。
（二次に引っかかる気がしてハラハラw）

第二話　「宵闇、抜刀」（前書き）

つ、疲れた〜〜w　徹夜の執筆はマジ死にます；；

あ、あと、モンスターハンターファンのみなさん、怒らないでね？

第二話　「宵闇、抜刀」

＞i１６４５０｜１９５３＜

私とブリュンヒルデを包んでいた光の渦が消えると、周囲の様相は随分と変化していて、私たちは小高い山の、高台のような場所にいた。眼下に広がるのは鬱蒼と茂る数多の樹木、蒼穹にはさんさんたる陽光が全てを睥睨していた。それと、どこか蒸し暑い気もする。

「――――熱帯雨林ですか。中々暑いですね」

「リィーゲルト、身体の調子はどうですか？」

「ええ、どこも悪くないですよ」

「転生は、上手くいったようですね」

「降りた場所は少々面倒ですが、まあ経験がないわけではありません。ヨーロッパ戦線の前は北アフリカ戦線にいましたからね。勝手は多少違いますが、何とかなるでしょう。ところで、いいでしょうか？」

「何をです？」

リィゲル「近しいかった者たちには、私は、リィゲル、と呼ばせていました。ですので、貴女にもそう呼んでいただきたい」

「分かりました。リィゲル、でいいのですね」

「はい、その方が堅苦しくなくて楽なんです」

「オリオン座。白色に輝く最輝星の一つ。巨人の左足。強く、そして綺麗な響きですね。でしたら私のことも、ヒルダと呼んでください」

「いいのですか？」

「貴方は我が命名者、絶対にブリュンヒルデと呼びたいのなら強制はしません」

「いいえ、ぜひヒルダと呼ばせて下さい。そして――――」

私は、右手をヒルダに向けて差しのべた。

「改めて、よろしくお願いします。ヒルダ」

ヒルダも右手をこちらに向け、私の手をしっかりと握る。

「こちらこそ、よろしくお願いします。リィゲル」

こうして私たちは、これから待ち受ける運命を共に背負う事を誓った。

（やはり握手はコミュニケーションの基本ですね）

「さて、これからどうしたものでしょうか。恐らくですが、ここはまだ未開拓の地。かと言って何処にも原住民などの集落がある気配はない。早速、遭難ですね」

高台から下を見下ろした私は、言ってどうにかなるというわけでもないと分かっていながらも、やはり言ってしまった方が楽だなと、尋ねるべくもなく尋ねた。しかし、ヒルダから帰ってきたのは違う意味で私の予想しえない返事だった。

「それについては、恐らく心配ないと思われます」

左手の甲を見せながらヒルダは続ける。

「この中指にはめられている指輪――ニーベルンゲンの指環――には、私とヴァルハラを繋ぐ能力が付与されています。これも一種の戒めですから、どのような理由があろうとも、はずした場合は何らかの災厄に見舞われることになるのです。しかしながら、私たち戦乙女に選ばれた勇者――エインフェリアに試される最初の試練が、その災厄に打ち勝つことなのです」

「何故、その指輪をはずさなければならないのですか？」

「ヴァルハラとの繋がりを断つ。それはつまり、私がヴァルキュリアではなくなり、人の子へと変わることを意味しているのです」

「なんと」

「異世界に、その世界とは別の存在を召喚することは、理を無視し、因果律を乱します。その上、いくら低級の女神である戦乙女も

その世界に居続けるとなると、次元を歪め、世界そのものを破壊してしまう事にもなりかねないのです。ですから、エインフェリアと共に異世界へと降りた戦乙女は皆、指環をはずし、神であることを捨て、その力を、その世界に異なる存在を割り込ませる代償として支払う。そしてエインフェリアは訪れた災厄から戦乙女を守る。情けない話ですが、人の子となった私たちは、それでも一般人よりは様々な力を有しますが、基本、ただの人間の乙女です。見事、私たちを守りきったエインフェリアには未来への道が示され、失敗した者は新たな指輪へと姿を変え私たちをヴァルハラへと戻します。これが、私たちをこの世界に認めさせる唯一の方法なのです」

説明を終わり、俯くヒルダ。その表情からは容易に深い哀しみがうかがわれた。つまり、私よりも前に、ヒルダの目の前で散って行った者がいるという事。世界樹ユグドラシルの根元で、ヒルダは一体どれだけ待ち続けていたのだろう。悠久なる時の中、ヒルダは一体何人のエインフェリアを見てきたのだろう。聞くべき事ではない。そう分かっていても、私は己の口を止める術を持たなかった。

「――――私は、何人目ですか？」

はっ、と顔をを上げるヒルダ。

「すまない。本来ならばこのようなことは聞くべきではないでしょう。私は、貴女の哀しみを見ました。そして、それを知ろうと――貴女の心に入ろうとしています。ですが、私はそれでも、私の前に逝った者たちをも背負って、貴女を守りたい。そう切望してやみません。どうか、教えて下さい。私の前に、何人いたのですか？」

ヒルダは、私の申し出に逡巡したが、諦めたように微笑み、口を開いた。

「貴方は優しい人。私だけでなく、彼らのことまで思ってくれるなんて……」

「ただのお人好しにすぎませんよ」

「――――三人、いました。いずれも屈強で、心清く、優しかった。この指輪には、彼らの魂が眠っています。そして、彼らは次に貴方を導いた」

「――――彼らの分まで、私は貴女を守って見せます。どうか、躊躇わず、その指輪を――」

私は跪き、頭を垂れる。騎士であり、武士でもある私が出会った守るべき女性（ヒト）。ヒルダを守るためならば憂いはない。ただ一心にそう思った。愛情とは違った何かが、私の心を渦巻く。されどそれはとても心地よい何かだった。

「――その指輪を、はずして下さい」

「……貴方ならば、きっと切り抜けられる。そう、信じてもよいのですね？」

首肯。それだけでよかった。私は、左の腰に差している刀の鯉口を切った。

「貴方に、戦神の加護があらんことを――――」

ヒルダの左手から、金に輝く指環が解き放たれる。

「────『宵闇』、抜刀────」

父から授かった、黒く煌くひと振りの刃が、指環を空中で断ち切る。

妖刀『宵闇』────決して抜いてはならないと父から託された闇を、私は抜いた。未来の前を遮る闇を振り払うために……。

カラン…………──────────。

かつて、何人もの手に渡り、数数多（かずあまた）の魂を吸い、黒く変化したと伝わる妖刀『宵闇』。生半可な心では、その刃を見ただけで狂い、人としてのモノを失うとされる禁忌のひとふり。

咎人の刀──。

私は宵闇を鞘に戻すことなく、素早く背後を振り返った。

間を置かず、私は大気の轟きを聞いた。

ギャオオオオオオォォォォォォォォ！！！…………──────────────。

本能的な恐怖が我が身をを襲う。

現れたのは「桜」を纏った一匹の竜だった。

「他の種族を圧倒し、その身に宿した火は一国を滅ぼす。伝説の

種族、ワイバーン。この世界には、彼らがいるのですね。相手にとって不足はありません」

私は宵闇を正眼に構え、全長２０メートルの竜を――桜火竜を見据えた。

「ヒルダ、貴女は安全な場所に。あの竜は、今は私しか見ていません。早く！」

「どうか、どうか無事でいて下さい！」

そうして私と桜火竜との対角線から離れるヒルダ。あれだけ距離があれば大丈夫だろう。あの桜火竜も、私との対決のみを求めているようだ。父から学び取った『気読み』が、桜火竜の、私への純粋な殺気を教えてくれる。再び武者震いする私が、そこにはいた。

大地へと舞い降りた桜火竜は、私と相対すべく構える。腰を落とし、翼を中ほどまで開く。先端に棘の付いた尾は水平に伸び、牙の間からは炎がちらついていた。

どちらも、自ら打って出ようとはせず、ひたすら睨み合う。それは互いの力量を認め、警戒しているから。それは互いに隙をうかがっているから。たったの一秒が、一分にも一時間にも感じられた。

額を汗がつぅっと流れる。桜火竜は、殺気をさらに増し、こちらを圧倒せしめんと低く唸った。

完全な拮抗状態。終わりの見えぬ対峙。殺気のぶつけ合い。

私は桜火竜の放つ異様なまでの殺気を受けつつ、あることに気付

く。

（宵闇が、疼いている……）

宵闇を妖刀たらしめる深い闇。何千何万という怨恨によって黒光りする刀身。安易に抜いてはならないとされる闇が、純粋な殺気を当てられ、歓喜のうちに震えていた。

（妖刀『宵闇』よ、お前はやはり咎人の刀なのか？）

宵闇は応えない。

（なれば我は、お前を使いこなしている我もまた、咎人なのだな）

無機物である宵闇に、応える術はない。

（私は、この身に刻まれた咎を背負うことを甘んじて受ける。そして私は、お前の咎をも背負おう）

宵闇はただただ、闇の内に震えていた。

（宵闇よ。我に応えよ。その闇を持って闇を払い、その咎をもって咎を払え。我が生あらん限り、我の矛となり、仇名す者を撃ち果たさん！）

ギャオオオオオオオオォォォォォォォォォォ！！！！！！！

咆哮によってその均衡は破られた。

桜火竜はその持てる最大の力をもって私に突進してくる。大瀑布

のごとき存在が迫りくる。

私はしかしながら目を瞑り、彼の者を待ち構えた。

すれ違う一瞬。ただ一閃に全てを賭ける！！！

桜火竜はなおも私に近付いてくる。

私は動かない。ただ静かに時を待つ。

チャンスは一度。私が私に新たに課した誓約。

「ただ一刀のもとに、敵を討たん！！！」

双眸が身開かれる。時は満ちた。この間合い。このタイミング。

私は素早く左足を斜め左に大きく踏み込み、すり抜けざまに宵闇を振りぬいた。

巨体が、私の後ろへと流れていく。

その刹那、尾の棘が私の右肩をかすめ、肉をえぐった。

「グッ、ウォおぉぉぉ……！」

血飛沫が吹きあがる。

全身が焼けるような苦痛を噛み殺し、私は――――

その時ヒルダは目撃していた。リィゲルの右肩から溢れ出る血潮

と、桜火竜から一枚の見事な竜鱗が宙を舞ったのを……。

――――私は宵闇を鞘に収め、

「猛き、美しき竜よ。我が名はリィゲル、リィーゲルト・フォン・ハイリンッヒ。戦乙女、ブリュンヒルデに選ばれしエインフェリアなり。勝敗は既に決した。牙を収めよ！」

負傷した肩を押さえ、あらん限りの声をもって叫んだ。

沈黙の間――――。桜火竜からは既に殺気は感じられず。沈黙をもって私を捉えていた。

不意に声が聞こえる。

桜火竜『――――我を凌ぐ力を示し者よ――――』

それは聴覚からではなく、心に直接聞こえてきた。

「これは、念話というものか」

桜火竜『左様、我ら誇り高き竜族のみに継がれた力の一つだ』

「改めて名乗ろう。私の名はリィーゲルト・フォン・ハインリッヒ。我が戦乙女、ブリュンヒルデに導かれ、この地へと舞い降りたエインフェリアだ。貴女の名をお聞かせ願おう」

桜火竜『我が名か？　我が名は「乱れ桜のレイア」。我が一族を束ねるものだ』

「乱れ桜のレイアか。ではレイア殿、まずはここに、貴女に刃を向け、その身に傷をつけたことを謝る。すまなかった」

私は頭を下げ、誠意を込めて謝った。すかさずレイアと名乗った桜火竜が言う。

『レイアと呼び捨ててもらって構わんよ。それにしても、リィーゲルトよ。そなたはおかしな奴だ。初めに襲いかかったのは我であろう？』

「貴女は、礼をもって接するべき者であると、私の中の何かが告げるのです」

『命を奪おうとした者であるのにか？』

「もし、貴女が本当に私の命を喰らおうとしたのなら、私が宵闇を収めた瞬間に攻撃をしたでしょう。けれどもそうしなかった。違いますか？」

『解せん奴だ。剛の者でありながら、なぜそれほどまでに自らの力に溺れずにいられる。今まで見てきた人間とは、お前は違うのだな』

「いえ、私はただのお人好しの咎人にすぎませんよ」

『お人好しの咎人だと……？　ハッハッハッハッハッハ！！　愉快！　おぬし、気に入ったぞ！　ハッハッハッハ！』

レイアはしきりに笑った後、翼をたたみ、ゆっくりと歩み寄って

きた。

『我は決めた。やはりおぬしにしよう。先ほど鱗の一枚を持って行かれた時から既に考えていたが、やはりおぬししかあり得ない』

「何を決めたのです？」

「リィゲル！」

ようやく緊張から解き放たれたリィゲルとレイアのもとに、ヒルダが駆け寄る。

「リィゲル！」

私の胸に飛び込んだヒルダの目には、うっすらと涙が映っていた。

「ヒルダ、信じてくれてありがとう。私は貴女を守るに足る者だったよ……」

「良かった。本当に……」

私をひしと抱きしめるヒルダからは、以前のような神々しさは感じられなかったが、代わりに、乙女としての可憐さが前にも増して一層輝きを放っていた。

私はヒルダの涙を手で拭いてやり、レイアに向き直った。

「話の途中にすまない。続きを聞かせてくれ」

『気にするでない。私は決してそこらの未熟者のように短期では

ないし、空気ぐらい読める』

その一言に、私とヒルダは慌てて離れ、赤面した。

『続きを話そう。我はおぬしに我が心臓を授けることに決めたのだ』

「心臓を、ですと！？」

私はその突拍子もない申し出に、呆気に取られた。心臓とは生命の源であり、いかなる生物も心臓なくしては生きられない。なのにレイアは自分の心臓を差し出すと言っている。これを驚かずにいられようか？

「正気か？」

私の問いに、しかしながらレイアはふんっと笑ってこう続けた。

『先入観や短絡的思考でものごとを計るな。なにも命を捨てようなどとはいっておらん。まあ、当たらずとも遠からずといったところか。これは竜族に伝わる特別な儀式でな。竜同士で行われることはない。実例も伝説の中にしかないと聞く。内容は簡単だ。竜族の、しかも私のように自我を持ち、人語を解する者だけがその儀式を成すことができるもので、その者が心から認めた者に心臓を授ける。心臓を授かったものは竜の力と膨大な精神力をその身に宿し、念話も使用可能になる。心臓を授けた竜はその者が死なぬ限り、実質不死となり、守護竜として守り続けるというものだ。なあに、悪い話ではなかろうて』

「そんな、私にそのような資格はありません。貴女こそ短絡的で

はありませんか。ご自愛を」

『ほざけ、我はもう決めたのだ。おぬしに拒否権は認めん。あくまで拒むというのなら、我は海に没し、自ら命を断つ』

「きょ、脅迫じゃないですか！」

ふっふっふと、レイアは不敵に笑う。

『さあどうするリィゲルよ。我の心臓を受け入れるか？　それとも我を見捨てるか？』

「……っく、分かりました。謹んでお受けします」

この人にはどうやっても敵わないと、軽く心が折れた気がしたリィゲルだった。

『初めから素直に受け入れていればよかった者を……。よし、では早速始めるぞ』

「ああ、よろしく頼む」

レイアはさらに身を低くして、頭を私に押しつけた。途端に、すさまじい生命の躍動が流れ込む。

『――――我は乱れ桜のレイア。竜族を統べる王なり――――』

熱い熱い熱い熱い熱い――――――。

『――――ここに誓うは守護の誓い。其の者の名はリィゲル。エ

インフェリア、リィーゲルト・フォン・ハインリッヒ。我は誓う。其の命あらん限り仕え、これをを護ると――――』

痛い痛い痛い痛い痛い――――――。

『――――誓いの証として、我が心臓を彼の者に捧げる。ここに、守護の契約を結ばん！』

「ぐっっっっっ、のあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

私の中に何かとてつもないものが流れ込んできた。と同時に、肩の傷が急速にふさがっていく。

「力」の奔流。「魔力」の源泉。その二つが、私の中に割り込み、無理やり居場所を作る。生物が持つ拒絶反応が、その身自身をむしばんでいった。

（これが……、守護の契約っっ！！！――――――――）

意識が途絶える間際、ヒルダに抱きとめられた気がした。

「なんて、膨大で、底なしな力！」

私はリィゲルがレイアの心臓を受け止めるのを、ただ見ているし

かできませんでした。リィゲルは身を内側から焼き尽くすような苦痛に悶え、必死に抑え込もうとしているのに、私には成す術がありません。神であることを捨てた私には、ただ祈り、待つことしか許されなかったのです。

（もどかしい！　こんなにも、もどかしいなんて！）

私は両手を強く握りました。とても、悔しかったから。

どうして？

分からない。自分の気持ちが分からない。

（この感情は何？　悔しさだけじゃないの！？）

分からない分からない分からない分からない。

初めての感情――――。

私はその初めての感情に戸惑うことに気が散り、危うく儀式が終わって地面に倒れそうになるリィゲルを受け止め損なうところでした。

「リィゲル！　リィゲル！」

呼吸が荒く、ものすごい高熱です。

『落ち着かんか。今はもう違うとはいえ、戦乙女ともあろう者が、それほどに心乱してどうする？』

「リィゲルは、大丈夫なのですか！？」

『ああ、今に呼吸も落ち着く。肩の傷も完治させたし、熱も二日と経たんうちに収まるよ』

「……良かった」

『それよりも、気付かぬか？』

「え？　はっっ！」」

私はリィゲルを抱きとめたまま背後に向かって声をかけました。

「そこの者よ。隠れてないで出てきなさい！」

茂みから、若干の驚きの念が感じられます。ですが、不思議と敵意は感じられませんでした。

やがて、その者はあっけらかんとして茂みの中から姿を現したのでした。

第二話　「宵闇、抜刀」（後書き）

出し切った。未練はないと思う。というわけで、次回もよろしくです＞＜

リオレイア希少種？　ナニソレ、おいしいの？

幕間その壱　「ラブストーリーは突然に？」（前書き）

本当は第三話の予定でしたが、幕間ということで短く区切りました
><
<追信>お気に入り登録の方々に深い感謝を^^

幕間その壱　「ラブストーリーは突然に？」

＞i16450｜1953＜

『桜火竜の討伐、もしくは撃退』

それが、今回アタイが受けることになったハンターズギルドからの依頼だった。聞く話によると実質的な被害はないらしいけど、いつ襲われるか分からないし、家畜が怯えて仕方がないからと、早々にアタイに回ってきたってわけさ。恨みはないけど、こっちも仕事だからね、ゴメンよ。

なんて思ってたのがついさっきまで。

一体どうなってんだい？　確かこのエリア一帯はクエストのために人払いがされてるんじゃなかったっけ。ギルドの奴ら、こんなとこまで職務怠慢かよ。ったく、世も末さね。

女ハンター「――――けど、なんでよりによって貴族サマがいらっしゃるのかね……」

アタイは好奇と侮蔑をもって呟いた。見た感じあの黒い礼服は軍服のようだけど、遠目でもあの繊維の精緻さを見れば嫌でもあの男が貴族だってわかる。よく梳(す)かれた金髪に、碧眼。それによく整っ

た顔立ち。ああ、だめだね。イライラしてきた。

そしてなによりむかつくことが二つ！

まず一つ目に武装した女を侍らせていること。これだから貴族ってのは腹に据えかねるんだよ。あんな美人さんにいかにも高級そうな鎧なんか着せちゃってさ。さぞ優越感に浸ってご満悦ってとこかい？　男の風上にも置けないね。

次に二つ目。持ってる剣が業物ってこと。これは、なんつーか惜しいっていうか武器が可哀そうっていうか……。なんであんな見事な業物を貴族なんかが持ってるんだい？　あれを作った職人が見たら泣くよ？

と、色々なことを考え、出るタイミングを計る。だって、ねぇ。普通貴族でも男と女が仲良くお話なんてしてたら茂みに隠れちゃうじゃない。え、そんなことないって？　うっさいわね。文句ある？

で、観察。ややあって甲冑の女が指輪みたいなのを放り上げる。何やって――――

女ハンター「――――っっっ！」

自分の目を疑うようなことって、いつ以来だっけ。貴族の男が剣を抜刀しようとしたとこまでは確かに見えたのにそれから後。

剣閃が全ッ然見えなかった！

しかも放り上げられた指輪は綺麗に真っ二つに切れてる。あえて言うけど、割れたんじゃなくて、切れたんだよ、あれは。なんて綺

麗で、禍々しい剣だろうね。浅い反りに黒く光る刀身。波紋のない片刃の真剣。アタイが知る限りでは、形からして多分『倭国』のカタナって武器だ。鋳物の武器と違ってすごく切れ味がいいんだけど、扱いが難しいもんだから持ち手を選ぶって話さ。なのにあの貴族の男は指輪っつう小さい的を正確にいとも簡単に断ち切ってみせた。一朝一夕でできるもんじゃないよ。

茂みの先の貴族の男に対するアタイの評価が一気に跳ね上がった。と同時にある考えが頭をよぎる。

（まさか、あんなペラッペラの服で桜火竜に挑もうってかい？）

だとしたら余程の者かただのバカだよ。少なくともアタイはそんな向こう見ずな奴は知らないし聞いたこともない。火竜族の牙は平気で鎧を噛み切るし、ブレスなんて喰らおうもんならあっという間に黒こげだ。それでも鎧があるのとないのとでは幾分違う。アタイだって大枚はたいてこの防具を買いそろえたってのに……。

（もしかして、桜火竜のことをしらないのか？）

よくよく考えてみりゃそっちの方が分かる話だ。はんぱ者ならともかく、あれほどの腕の持ち主なら相手に奢ることはないはず。歴戦のハンターや戦士を何人も見てきたアタイが言うんだか間違いない。そうと決まれば今すぐにでも桜火竜のことを教えてやらなきゃ

――――

ギャオオオオオオォォォォォォォォ！！！…………――――――――――――――――――。

背筋が、凍った。体中が、心が得も言われぬ感覚に縛られる。純粋な殺意の塊にアタイの本能と理性が悲鳴を上げた。

（――――っっっっ……）

声が出ない。足も手も動かない。ただただ圧倒的な存在に身も心も竦む。

（あれは、そこいらの火竜種じゃない！！！）

たかが希少種などと、侮っていたのはアタイの方だった。今までの経験が、知らず知らず己を傲慢にしていた。桜火竜が発する殺意が自分に向けられたものではないと悟った瞬間、己が未熟さに歯噛みし、悶えた。そんなアタイに比べてあの男はどうだろう。アイツの顔には恐れも酔狂もなく、決意があるのみだった。静かにカタナを正眼に構え、蒼穹より舞い降りた『存在』と対峙する男。

アタイは、見ていることしか出来なかった。静寂と衝動の境界線のただなかに相対する様は、いかなる手出しも許されないような気がしたのだ。だからアタイは金縛りから解けてからも静観を決めた。おとぎ話だけにある、神聖な決闘をアタイは目にしていた。

しかし、両者はなかなか動かない。いや、違う。桜火竜が動かないのだと気付いた。

（男の気迫が、桜火竜の殺気を受け止めきってなお圧倒しているのか！？）

そう、動けないのは桜火竜の方だったのだ。今、この場を制して

いるのは男だったのだ。血沸き肉躍る。果たしてこのようなべらぼうな男が二人といようか、いやいるはずがない。紛れもなく、疑いようもない最強の存在。アタイの目の前にいる男こそ、アタイが探し続けてきた男に違いない。

ギャオオオオオオオオォォォォォォォォォ！！！！！！

痺れを切らした桜火竜の咆声が、拮抗状態を破って轟く。桜火竜は先ほどとは比べ物にならないくらいの殺気をまき散らしながら男に殺到する。それでもなお動かず、まるで水のように殺気を受け流し、目を瞑り心を解き放つ。かつて出会った『倭国』の戦士が語った、明鏡止水の心をアタイは男に見た。

両者が交錯する瞬間、わずかに見えた剣筋は、優美で、滑らかで、しなやかで、かつ……、アタイを一撃で惚れさせるだけの威力があった。

幕間その壱　「ラブストーリーは突然に？」（後書き）

この女ハンターの名前は次話で明らかに！？　小田和正さん、すいません＞（｜　｜）＜

第三話　「契約と決意」（前書き）

なんというか、やっちゃった感がぬぐえません＞＜　どうか、見捨てないでね……。
と言う事で、どうぞご賞味あれw

第三話　「契約と決意」

＞i１６４５０－１９５３＜

ヒルダ「そこの者よ！　隠れてないで出てきなさい！」

茂みの中の者にそう呼びかけ、私はしかしながら、レイアに忠告を受けるまで気付かなかったという事実に、いかに自分が冷静さを欠いていたかを思い知らされました。リィゲルと運命を共にすると誓ったのに、このようなことでは私は自分が情けなくなります。決意を新たに、気を引き締め直した私はきっと茂みの方を見つめ、相手の応答を待ちます。が、相手が応答するよりも前に、私は緊張を解いてしまいました。なぜなら茂みの中にいるものから感じられたのは敵意などではなく、むしろ好意だったからです。

女ハンター「ははっ。あんた、面食らったって顔してるね。気付いてると思うけど、アタイは敵じゃないよ。まだ味方でもないけどね」

赤い、燃えるような竜の甲冑を纏った、若い快活な女性でした。快活というよりは豪胆なのかもしれません。彼女は私の傍らのレイアに臆することなくこちらに近付いてきました。

ヒルダ「何者ですか？」

ごく当たり前な質問が、思わず口をついて出てしまいました。けれども女性は気にすることなく答えます。

ジャンヌ「隠れて覗いたりして悪かったね。アタイの名前はジャンヌ。ジャンヌ・アントホープ。ハンター兼傭兵みたいなことをやってる、しがない女戦士さね。あんたたちは？」

ヒルダ「申し遅れました。私の名前はブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。こちらがリィーゲルト・フォン・ハインリッヒで、この火竜はレイアと申します。いきなりのこととは言え、無粋にも怒鳴ったりして申し訳ありませんでした」

ジャンヌ「気にしないでおくれよ。怪しいのはお互い様だったろ？　ところでさ、あんた、素人かと思ってたけど違うみたいだね。よくアタイの気配に気付いたね。っま、よろしく」

ヒルダ「はい、こちらこそよろしくお願いします」

ジャンヌ「そっちのデカイのもよろしくな、レイア」

レイア『気安く我が名を呼ぶな』

ジャンヌ「まあまあそうかっかしなさんな。さっきは怯んじまったけど、馴れちまえばあんたの殺気なんて大したことないよ。それに、今のは全然本気じゃなかったじゃないか」

レイア『ハッハッハ、口の達者な小娘だな。気に入った』

ジャンヌ「ありがと、よく言われるよ。で、あんたたちこれから

どうするんだい？　アタイの見立て通りだと、わけありなんだろ？」

ヒルダ「わけありと言えばわけありですが、確かに今の私たちに行く当てはありませんし、ここが何処なのかもわかりません」

ジャンヌ「驚いた。迷い込んできたってのかい？　にしては服が綺麗だけど。まあいいや、ついてきな。ベースキャンプに案内してやるよ」

この申し出は現在の私たちにとっては願ってもない事でしたが、やはり戸惑いました。

「よろしいのですか？　会って間もないというのに……」

ジャンヌ「いいんだよ。自分で言うのもなんだけど、アタイは困ってるやつがいると見て見ぬ振りなんてできない性分でね。それに、アタイは一度認めた奴らはなにがあっても見捨てない。困った時はお互い様、なんてね」

ヒルダ「……あなたのお心づかい、感謝しますね、ジャンヌ。ここはお言葉に甘えさせていただきます」

ジャンヌ「素直なのはいい事さ。じゃあ行くよ。ああそれと、リィーゲルトって言ったけ？　そいつはレイアに担がせな。テントまではそう遠くないけど、大の男を担いでいける距離じゃないからね」

ヒルダ「分かりました。レイア、お願いできますか？」

レイア『無論だ。このものは我が主となった男だ。むしろ我から望む』

ヒルダ「ありがとう。お任せしますね」

そうして私はリィゲルをレイアの背中に乗せ、先を行くジャンヌの後に続きました。希望の道しるべは、彼女のことだったんですね。

二時間ほど歩いたでしょうか。ほどなくして私たちはジャンヌの言うベースキャンプに無事辿り着きました。個人が持ち運べるような小さいテントではなく、どうやら固定式の大型テントのようです。なかにはベッドや簡易キッチンなどが配してありました。そして早速リィゲルをレイアの背中から降ろし、運びいれます。息は整っていましたが、依然として熱は引いていませんでした。

ジャンヌ「そっちのベッドに寝かせるといいよ。上着を脱がせて仰向けにね。タオルはあそこの棚で、テントの外に町から運んできた水の樽があるから適当に使っておくれ」

ヒルダ「何から何までありがとうございます、ジャンヌ」

ジャンヌ「もともとここに一週間くらい滞在する予定だったからね。でも、桜火竜の討伐に来たのに逆に仲間になっちまうなんて、どういう風の吹きまわしかねえ？」

ヒルダ「レイアを殺すつもりだったんですか？」

ジャンヌ「そんな目で見ないでおくれよ。だったって言っただろうだったって。過去形だよ。それに出来れば殺さずに撃退で留めようと思ってたんだよ？」

ヒルダ「す、すみません。つい早計になってしまいました」

ジャンヌ「気にしてないよ。むしろ、あんたたちに出会えてよかったさ。でなきゃアタイは危うくレイアに挑んで何もできずにおっ死ぬとこだったんだから。アタイは知らないうちに傲慢になってた。そのことに気付けただけ、今回は儲けもんさ」

そう言って屈託なく笑うジャンヌ。私もつられてくすっと笑ってしまいました。本当に素晴らしい出会いをしました。

リィゲル「――――んんッ、ヒ、ヒルダ……」

うれしいことに、リィゲルが意識を取り戻しました。私はベッドの端へ駆け寄り、リィゲルの手をそっと握ります。

ヒルダ「っ！　リィゲル、気付いたのですね。具合はどうですか？」

リィゲル「……ヒルダ、ここはどこですか？　レイアは？　それにこの方はどなたです？」

ヒルダ「レイアは今このテントの外にいます。あの方は私たちをここに案内して下さった方です」

ジャンヌ「ジャンヌ・アントホープだよ、よろしく。ジャンヌって呼び捨てにして構わないからね」

リィゲル「これは大変ご苦労をかけたようです。私の名は――――」

ジャンヌ「ああ、それならヒルダから聞いてるよ」

リィゲル「そうでしたか、では私のことはリィゲルと呼んでください」

ジャンヌ「分かった。リィゲルでいいんだね」

リィゲル「はい、よろしくお願いします。ジャンヌ」

握手を交わす二人。打ち解けられてよかったです。

ジャンヌ「リィゲル、あんた起きてて大丈夫なのかい？」

リィゲル「正直きついですが、話をするくらいなら問題ありません。それに、素性も明かさずにお世話になることはできません」

ジャンヌ「なるほど、律儀なんだね、あんた。思った通りだよ。ますます気に入った」

ジャンヌは笑顔を崩さず続けます。

ジャンヌ「ますます気に入ったから、アタイはあんたの素性を聞かない」

ヒルダ「どういうことですか？」

呆気にとられるリィゲル。私も首をかしげました。

ジャンヌ「アタイらハンターや傭兵には共通してることがあって

ね、それはみんなわけありってことさ。例外もいないわけじゃないけど、好きでこんな仕事を始めた奴なんてほとんどいない。私だってそうさ。だからね、アタイらはお互いの過去は詮索しない、関わらないってのが暗黙の了解なのさ。それに、聞いたからって過去は変えられるもんじゃないだろ？　アタイらが見てるのはいつも未来なのさ」

リィゲル「なるほど、そういう事でしたか」

ジャンヌ「ああ。だから聞かない。あんたはあんただろ？」

リィゲル「そうですね、ではいつか十分時が満ちてからお話しいたしましょう」

ジャンヌ「ゆっくり休むといいよ」

リィゲル「では、お言葉に甘えて……」

再び横になったリィゲルは、すぐに寝息を立てて眠り始めました。熱も若干下がり、非常に穏やかな表情をしています。私も、転生初日から色々ありすぎたので眠気が移ってしまったようです。疲れを感じた最初の日でした。お休みとジャンヌが言った気がします。

翌日になると、リィゲルの熱はだいぶ下がり、食事が喉を通るようになりました。流石に運動は出来ないらしく、面目ないと苦笑していました。レイアの話によると、今日中には契約が完了して、心臓とリィゲルが完全に融合するそうです。ひとまずは安心というところでしょう。

リィゲル「ジャンヌ、一つお願いされてもいいですか？」

朝食のあと、おもむろにリィゲルがそのように切り出しました。愛剣の手入れをしていたジャンヌは、「なんだい、改まって」と顔をあげました。

リィゲル「私たちにこの世界の事を教えてくれないだろうか。わけあって、私たちはこの世界のことを何から何まで、子供でも知っているようなことさえ知らないんだ。だから、簡単にでも教えてくれないだろうか？」

ジャンヌ「なるほど、わけあって、ね。いいよ、どうせすることもないから教えてやるよ。何から聞きたい？」

ジャンヌ「そうだな、じゃ、まずは――――」

こうして、ジャンヌの講義が始まりました。

この世界には主に西と東の大陸があって、西の大陸には「レーヴェンノヴァ帝国」、「ノイシュバンシュタイン王国」、「倭国」が。東の大陸には「アルヴィダ連邦」、「マリアタ群集国連合」などが広く知れ渡っている国々で、それ以外にも小国がいくつもあるそうです。現在地はノイシュバンシュタイン王国のカレドニア地方の、テレネ半島にある密林地帯らしいです。そして、レーヴェンノヴァ帝国とアルヴィダ連邦は今現在休戦状態で、いつ再び戦端が開かれるか分からず、戦々恐々とした生活をしているそうです。大陸間の移動もままならないのは言わずもがなですね。

ですが、ギルドなどの職業斡旋施設や、商人たちを束ねる商会などは国境を越え、全世界に幅広く展開しているらしく、各国の情勢を知りたいならそいつらに聞けと言わしめるほどだとか。
国力ではレーヴェンノヴァ帝国と、アルヴィダ連邦がずば抜けて高く、他の追随を許さないらしいです。ですが最近ではマリアタ群集国連合あたりが若干きな臭いとか。
そしてこの世界には魔法や竜、魔物、魔族、亜人種などのリィゲルのいた世界では物語の中のものが存在しているのです。

ジャンヌ「特に知っとくべきことはこのくらいかな。あとは追々説明するよ」

リィゲル「ありがとう、ジャンヌ。助かりました。これで路頭に迷う事はなくなるでしょう」

ヒルダ「私からもお礼を申し上げます。ありがとうございました」

ジャンヌ「やめとくれよ、二人して。大したこともしてないのに恥ずかしいじゃないか」

頭を下げるリィゲルと私に、ジャンヌは本当に恥ずかしいのか珍しく慌てていました。すると、ちょうど見計らったかのようにリィゲルの体に変化が起きました。首の後ろに、竜をかたどった紋章が浮き上がってきたのです。

ジャンヌ「こりゃ驚いた！　もしかして、守護の契約かい！」

リィゲル「知っているのですか？」

ジャンヌ「子供だって知ってるよ！　ほとんど伝説だけど、おと

ぎ話によく出てきてたからね。アタイもガキの頃はあこがれたもんさね」

リィゲル「レイアの話は本当だったのですね。改めて事の重大さが身に染みて分かりましたよ」

ヒルダ「どこか異常なところはありませんか、リィゲル」

リィゲル「ええ、ついさっきまであった身体の疲れもありません。むしろ、身体が以前よりだいぶ軽く感じます」

レイア『それが守護の契約によってもたらされる恩恵だ。改めてよろしく頼むぞ、我が主よ』

リィゲル「未熟者ですが、こちらこそ」

ジャンヌ「寝たきりだったのが嘘みたいだね、まったく……。ま、アタイとしては早い方が良かったからね」

リィゲル「？」

ジャンヌはそう言うと、リィゲルに「宵闇」を投げ渡しました。

ジャンヌ「ちょっくらアタイに付き合っておくれよ。確かめたいことがあるんだ」

リィゲル「……わかりました。付き合いましょう」

外に出ると、ジャンヌは自らの愛剣である双剣を構えていました。纏う雰囲気は戦士のそれであり、隙がまったく見当たりません。

リィゲル「これはつまり、そういうことですか？」

と、苦笑するリィゲル。

ジャンヌ「ああ、そうだ。アタイはあんたとひと勝負したい。あんたの剣を見た瞬間からずっと思ってた。さあ、抜け！」

ジャンヌの言葉に裏はなく、真剣そのものでした。リィゲルはそれをすぐに悟り、こう告げます。

リィゲル「この『宵闇』は、俗にいう妖刀――呪われた刀です。心の弱い者や、邪な者がこの宵闇の刃をひと目でも見れば、たちまちに惹き付けられ、狂わせてしまう悪しき存在。そして、武器として何千何万という魂を喰らったこれは、間違いなく生きた災いです。ジャンヌ、貴女はそれに屈しない覚悟がありますか？」

ジャンヌ「もちろんだよ。だからこそ、リィゲル――アタイはあんたと戦ってみたいんだ」

リィゲル「分かりました。では、参りましょう」

リィゲルの周囲の気温が下がったように感じました。黒い災いが、静かに鞘から解き放たれます。リィゲルは宵闇を下段に構え、瞑目しました。

ジャンヌ「いつでもいいんだね。じゃあ、行くよ！」

深い踏み込みと共に前に突き出された双剣を、リィゲルは受けることなく身体を右に滑らせてよけました。そこへ追撃の横薙ぎの一

閃。これもまた紙一重で身体をのけ反って交わします。続く右手の縦斬り、左手の返し手、そこからの左右挟み込み、剣戟と見せかけたハイキック……。全て、洗練された完璧な連撃。しかしながらどれもリィゲルにはかすりもしません。

ジャンヌ「避けてばかりかい！」

両手振り下ろし、からの回転斬り。連続突き。それら全てを一度も受けることなく避け、流していくリィゲル。ついに、ジャンヌは痺れを切らしました。剣を交差させ、鋏のように構えます。

ジャンヌ「奥義！　鎌鼬（かまいたち）！！！」

リィゲルの目が、開かれました。

リィゲル「秘奥、峰返し」

カキィィィィィンンンン！！！！！！！！！――――――

ジャンヌの双剣が、彼女の手を離れ、宙を舞いました。

――――ザシュッッッ！！！

同時に聞こえる着地音。ジャンヌの喉元に突き付けられた宵闇。勝負は、一刀のもとに決しました。

リィゲル「――――――――勝負、ありですね」

ジャンヌ「だな、見事だったよ」

リィゲルは宵闇をさっと払い、漆塗りの鞘に収めました。そして、ジャンヌを助け起こします。

ジャンヌ「ありがとう、リィゲル。すまなかったな無理させて」

リィゲル「いえ、いいですよ。私も鍛錬になりました」

ジャンヌ「本当にありがとう」

リィゲル「迷いは晴れましたか？」

ジャンヌ「ああ、決めた。リィゲル、アタイは――――――」

ブラウンのジャンヌの瞳が、リィゲルを見据えます。彼女の眼もまた、リィゲルのように決意にあふれたものへと変貌を遂げていました。言葉の続きを待つリィゲル。しかし、その言葉とはまったく予想だにしないものだったのです。

ジャンヌ「――――アタイは、リィーゲルト・フォン・ハインリッヒに、正式に結婚を申し出る！」

異世界に来てからというもの、毎日が驚きの連続でしたが、今日ほど唖然とするような出来事はありませんでした。

第三話　「契約と決意」（後書き）

なんとか出来た二話連続投稿、もう死にそうです；；
あ、やめて、さげすんだ目で私を見ないで！！

次回も、よろしく……バタッ

第四話　「飛翔の竜騎士」（前書き）

大感謝　＼＾ｏ＾／　ＰＶ２，８００突破！！　読者のみなさん、本当にありがとう！！！　これだけの人に読んでいただけてるなんて；；；　というわけで第四話遅れてさーせんでした　＞（｜　｜）＜　！！！　では、ご堪能くださいまし＾＾

第四話　「飛翔の竜騎士」

＞i１６４５０｜１９５３＜

ジャンヌ「とりあえず、今日中にはソロンに出発するよ」

とジャンヌ。

リィゲル「……それは街の名前か何かですか？」

と私である。不意打ちとも襲撃ともとれる電撃的求婚宣言を受けた私は、もちろん断った。

……断ったんだが。

ジャンヌ『いいや、受けてもらう！』

リィゲル『いきなり過ぎます！』

ジャンヌ『恋にいきなりもクソもあるか！　大人しく受け取れ！』

リィゲル『そうはいきません！　そもそも結婚というのは――――』

ジャンヌ『御託はいらん！　結婚しろ！』

リィゲル『ですから、受けるわけにはいけません！』

ジャンヌ『ええい、往生際の悪い男だ。私の何処が不服なんだ！』

リィゲル『そういう問題ではありません！』

ジャンヌ『胸か！？　胸ならあるぞ！』

リィゲル『人の話はちゃんと聞いてください！　そういう問題ではないと言ってるんです！』

ジャンヌ『ほう、じゃあどんな問題なのか聞こうじゃないか』

リィゲル『いいですか、結婚とはそもそも誠実な交際を重ね、互いに真に理解しあってからするものなのです。決して安易にしていいものではありません』

ジャンヌ『時間が必要と、そう言いたいのかい？』

リィゲル『そうです』

ジャンヌ『その言葉、偽りないね？』

リィゲル『無論です』

忘れもしない。あのジャンヌの不敵な笑顔を。あの勝利を確信した笑顔を。

ジャンヌ『リィゲル、あんたの負けだよ』

リィゲル『どういう意味です？』

ジャンヌ『あんたは確かにこう言った。結婚するなら時間を掛けろとね』

リィゲル『はい、確かに私はそう言いましたが、それがどうしたと言うのです』

ジャンヌ『つまりこういうわけだ。時間を掛けて交際するならあんたは私と結婚してもいいんだろ？』

（やられた。不覚をとった。人生で最大の不覚だ）

リィゲル『き、詭弁です！』

ジャンヌ『おや、嘘だったのかい？　確か、倭国の言葉には男に二言はないって言葉があるんだけどね』

（ああ、うれしいけど日本のような国がこの世界にもあるとは）

リィゲル『くっ！』

ジャンヌ『と、いうわけで。詰み、だね、リィゲル』

こんなときに限って、父のとある言葉が頭をよぎった。

父『据え膳食わぬは男の恥』

（ち、父上！　なぜそのような言葉を！）

リィゲル『……分かりました。私の負けですよ』

ジャンヌ『よッしゃあ！』

もう諦めるしか、方法はなかった。まあ、ジャンヌが相手ならやぶさかではない気もするが。

リィゲル『ただし、あくまで結婚を前提とした”交際”からですよ』

ジャンヌ『ああ、上等さ！　いくらでも待つよ。もうあんた以上の男なんてそうそういないんだからさ！』

うれしいのかうれしくないのかはっきりしない瞬間だったと思う。ああ、悔しさに思わず心の中で涙を流す。

そのようなやり取りを経て、私たちはテントの中で次の行動について話し合っているのであった。

ジャンヌ「ん、ああそっか。リィゲルたちは何も知らないんだったねぇ。ソロンってのは、ここから南に馬車で五日ぐらい行ったとこにあるまあまあデカイ街さ。今んとこはアタイのねぐらだね」

リィゲル「馬車を使うんですか？」

ジャンヌ「そのつもりだけど、馬車は初めてかい、リィゲル」

リィゲル「何度かありますよ。乗馬もしてましたし。ヒルダはどうですか？」

ヒルダ「私はありません。ですが、戦車（チャリオット）を馬車と考えてもいいのなら初めてではありませんね」

ジャンヌ「ヒルダ、あんたなかなか興味深い経歴の持ち主だね。別にいいけどさ」

リィゲル「ははは、私も戦車は（ティーガー？なら乗ったことあるけど）経験がありませんね」

ヒルダ「ふふっ、確かに軍人でなければ扱う機会のない代物でしたね」

くすりと微笑むヒルダを見ながら、やはりヴァルハラでは乗り回していたのだろうと自分なりに想像してみた。軍団の先頭を駆け抜ける、戦車を操る戦乙女――――。

（――――ティーガー？の砲塔の上でも、やはりそのように見えるだろうな）

今は懐かしき東部戦線。と言っても撤退か防衛戦しかしなかったが、その途中何度か機甲部隊と行動を共にしたことがあった。戦車の上に部隊を搭乗させ、やはり敗走だったが、何より装甲板の上に座り続けたせいで、部下ともども腰を痛めた珍事は今でも鮮明に覚えている。まあ、馬車でも同じことになりそうだが――――。

レイア『おぬしたち、よもや本当に馬車に乗っていくつもりか？』

ふと、今まで干し肉をついばんでいたレイアが念話で呼びかけてきた。

リィゲル「そのつもりですが、何かあるんですか？　レイア」

レイア『何かも何もあるまい。我の背に乗ればソロンまでは一日とかからんよ』

とてつもなく恐ろしい予感がしたのは恐らく私とジャンヌの二人だった。

ジャンヌ「……レイア、それ本気かい？」

レイア『何の問題がある』

リィゲル「人を三人も乗せるのは流石に重いでしょう」

レイア『お主たちまでならさほど不自由なく飛べるぞ』

ヒルダ「よろしいのですか、レイア。私もこの通り甲冑を着ていますが」

レイア『大丈夫だと言っておる。さっさと乗れ』

ジャンヌ「ちょっと待ちなよ。もう出発するのかい！？」

私も同感である。出発の準備などまだしていないのだ。

レイア『何を言っておる。ジャンヌは多少手荷物があるだろうがリィゲルとヒルダは着の身着のままであろうが』

リィゲル「……そう言えばそうですが……」

ジャンヌ「本当ですね。私もこれしかありません」

納得せざる負えないと言うか、まあそのままだろう。このテントも公用らしいし、ジャンヌの荷物も大したことはなさそうである。安全性に疑問はあるが、考えてみれば竜の背中に乗れるなど普通は叶わない夢みたいなもので――――。

ジャンヌ「ア、アタイは乗らないからね！」

おや、予想外の反応である。

レイア『怖いか？』

ジャンヌ「そ、そんなんじゃないよ！」

……。いたずら心というか、意地悪というか。これはもうジャンヌを無理やりレイアに乗せると言うのはこの私に課せられた使命であるようだ。体のいい先ほどの意趣返しと思ってもらって差異はない。

リィゲル「――――私は乗らせてもらいますよ、ジャンヌ。では行きましょうか――――」

ジャンヌ「ま、まま、まっておくれよ！　あんた本当に乗る気かい！？　空を飛ぶ気かい！？」

リィゲル「ええそうですよ。ヒルダも乗りますよね？」

ヒルダ「はい。レイアがよろしいのなら私も」

ジャンヌ「え、ちょ、まっ。あんたたち、アタイを裏切るんだね！！」

リィゲル「人聞きが悪いですね。そんなつもりはありませんよ」

我ながら少々からかい過ぎだとは思ったが、ジャンヌの反応があまりにも素直すぎてやめようにも止められなかった。本人にはとても言えはしないが、ほほえましかったのだ。

レイア『ふ、ふはは、はーはっはっはっはっは！　これは愉快だ！　先ほどリィゲルを言い負かしたつけが早速戻ってくるとは！　ジャンヌ、もう諦めろ。お前は特に慎重に運んでやるからな』

そう言ってレイアはジャンヌを一重に口ではさんで捕まえてしまった。

ジャンヌ「は、離せっ、馬鹿。離せって！」

レイア『リィゲル、ヒルダ、早く乗れ』

ヒルダ「分かりました。ジャンヌ、貴女の荷物はこの革袋だけですね？」

ジャンヌ「離――って、あ、うんそうだけど――――じゃなくて！　離せぇぇぇ！」

リィゲル「ではレイア、失礼します――――」

そう言って私は左の翼の付け根に手を掛け、よじ登るようにレイアの背中に――――首の後ろ辺りにまたがった。そして続いて登ってくるヒルダに手を取り、一気に引っ張り上げる。

ヒルダ「ありがとうございます、リィゲル」

リィゲル「多分、というより絶対に危ないですから、しっかりとつかまって下さい」

ヒルダ「そのようですね。では――――」

ジャンヌ「コラー！　そこ何腰につかまっていちゃついてやがる！！　いい加減アタイを助けろぉぉ！」

首の後ろは、多少堅かったが毛が生えていたので座り心地は悪くなかった。私は鱗と甲羅の隙間を掴み、いつでも離陸できるように前屈みになった。まるでバイクの二人乗りのような姿勢である。

レイア『それでは、飛ぶぞ！！』

バサッッッッ――――――――――――――――！！！！！！

ジャンヌ「降ろせえええええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！……――」

遥か高く、天空へと登りつめるさなか、柄にもなく、少年時代にあこがれていた竜騎士の物語を思い出しつつ、怖いというよりもむしろ、新たな未来への希望と共に、私たちはソロンの街へと飛翔し

ていくのだった。

ジャンヌ「――――リ、リィゲル。この借りはいつかきっちり返してやるからね……」

ソロン近郊の、人気のない森の中に私たちはいた。レイアの発見を逃れるため、夜を待ってわざと少し離れたところに降り立ったのである。ヒルダにはさっき結界を張りに行ってもらった。

リィゲル「ああ、ちゃんと覚えておくよ」

そしていま私は現在、真っ青のジャンヌの背中をさすっている最中である。彼女は気絶どころか吐くこともなかったのだが、やはりこの世界の人間は空を飛ぶということ自体あり得ないことのようで、いわゆる乗り物酔いに陥っていた。私は一度だけ急降下爆撃機の後部席に乗ったことがあったので、急旋回やアクロバットには耐性ができていた。さすがにあの時ばかりは胃の中身を地上でぶちまけてしまったが。

ジャンヌ「……まあいいさ。とりあえず夜は城門が閉まってるから、街入りは明日になってからだよ……。おえっ」

リィゲル「これは重症ですね。吐かないだけすごいですが……」

レイア『ふ、情けないな（笑）』

ジャンヌ「レイア、……てめぇ。覚えてろよ」

レイア『威勢だけは良し。ハッハッハッハ』

さも愉快そうに声を上げて（あくまで念話だが）笑うレイアをじとーっと睨むジャンヌ。

ジャンヌ「……おえっ」

まあ、吐き気を前にしては何もできないというのは常である。

（――――あ、そういえば肝心なことを忘れていた）

リィゲル「レイア、私たちが街にいる間、貴女はどうしましょうか」

そう、レイアはあくまで討伐の対象になるほどの強大な火竜である。おいそれと街に連れて行こうものなら間違いなく国家レベルで排除しにかかるだろう。だから、レイアは街の外の人目につかないところで待機してもらわなければならないのである。

ところがすぐにその懸案は取り下げとなった。

レイア『その必要はない。我はお主と契約したことによってかりそめではあるが人の姿をとれるようになったのだからな』

そういうことは早く言って欲しいものである。

レイア『聞かなかっただろうが』

思いもよらないことをどうすれば聞けようか、いや聞けない。

レイア『よし、物は試しだ。人の姿に変わってみようではないか』

リィゲル「ちょっと待って下さい」

また新たな懸案に思い至った私は即座に止める。

レイア『どうしたというのだ？』

どうしたもこうもない。

リィゲル「変身の際は衣服を着た状態で変わるのですか？」

つまるところそういうことだった。下手すると裸で出てくることもありうる。むしろその可能性の方が高く思えた。だからこその質問であったのだ。

しかし、またも杞憂に終わる。

レイア『見くびってくれるな、我が主よ。裸で出てくるわけがなかろう。相応の格好はするつもりだ。だが、リィゲルが望むというのなら一糸纏わぬ生まれたままの裸体で出てくるがな』

リィゲル「それは遠慮しておきます。どうぞ服を着た状態でお願いしますよ」

レイア『ハッハッハッハ！　臆病者め、まあよい。無駄にリィゲルを困らすこともあるまい。ではやるぞ――――』

ふっと、頬を風がなぞる。刹那――――。

ビュオオオオォォォォォォ！！！！――――――――――――――――――――。

突風――――いや、竜巻が、桜吹雪の竜巻が月明かりのもとに出現した。

レイア『――――舞踊、千本桜――――』

短い言の葉が紡がれた。呟きともとれるその言葉は、やがて桜吹雪と共にいずこへと消える。

代わりにそこにいたのは、桃色の髪をした一人の女性。紺のロングコート。カーターベルトと連結されたグレーのロングブーツ。エメラルドをはめ込んだ黒のチョーカー。そのどれをとっても全てがその女性を引き立てる要因足りえた。麗人の旅人とでも言おうか、とにかく、竜の姿も美しかったが、それとはまた違った魅力があった。

レイア「――――ふぅ、人の姿と言うのも悪くはないな。むしろ癖になるかもしれん。どうだリィゲル。これでよいか？」

リィゲル「ええ、案ずるより産むがやすしでしたよ。さすがは竜族を束ねる者です」

ヒルダ「リィゲル？　この方は……。まあ、レイアなのですね」

するとそこへ丁度ヒルダが戻ってきた。どうやら結界は問題なく張れたようだ。

ヒルダ「人の子になったとはいえ、魔法などは人並み以上に使えますからね。このくらいはさほど大変でもありません。それよりも、どうしてレイアが人の姿に？」

リィゲル「ああ、それは――――」

一通り説明。ジャンヌは明日起きてからでいいと思う。

ヒルダ「なるほど、そういう事でしたか」

リィゲル「これでひとまずは安心です。明日は難なく街に入れますよ。今日はのにもないところでの野宿となってしまいますが、我慢しましょう」

ヒルダ「そうですね。本当なら五日はかかったのですからこのくらいは。レイア、ありがとうございました」

レイア「礼には及ばんよ。我が命はもはやリィゲルのためにある。あいつの命とあらばどんなことでも甘んじてさせてもらう。まあ、だが、ヒルダ。おぬしもジャンヌも、リィゲルとは絆で結ばれているようだから、多少のことはきいてやるぞ」

ヒルダ「はい、その時がきたときはお世話になります」

リィゲル「二人とも、もう寝よう。もう随分と遅い」

ヒルダ「そうした方がよさそうです。では」

レイア「ああ、そうだな。眠りに就くとしよう」

リィゲル「おやすみなさい」

ヒルダ「ええ、おやすみなさい。よい眠りを――――」

こうして、一匹――――いや、一人と三人は身体を寄せ合い、互いに冷えぬようにしながら意識の中に沈んだ。

――――実は、ジャンヌの夜這いは図らずもレイアのアクロバット飛行によって、未然に防がれていたのだった――――

第四話　「飛翔の竜騎士」（後書き）

あとがきです。今回は祝ＰＶ２，８００ということでちょっと長めに書きます。まずは改めてご愛読ありがとうございます。私といたしましてはうれしい反面、いつ「このパクリ野郎！」と言われるかと冷や冷やしております。うん、だってねえ。レナス様とかリオレイア希少種様とか……。二次創作ぎりぎりですよねぇ。はい、人ごとですね、コレ。自重します。あ、ちょっやめっ。やめて、白い目で凝視しないで！マジ怖いから＞＜　あ、それと、何ゆえ初心者なものでもしかしたら誤字とか脱字とかが暴れまわってる危険性があるんで見かけたら獅子竹所まで通報してください。善処します！
あと、挿絵もできればほしいかなあなんて思ってたりします。感想、お叱りなども募集中なので、どしどしお願いします。では次回の「ファンタジア・フロンティア！」もよろしくです^^
＜追伸＞　近々この世界の地図でもＵＰしようかな♪

第五話　「ソロンにて、一歩」（前書き）

投稿が遅れがちだと申すか。ふっ、しかしそれは私の責任ではない。怨むなら模擬試験を怨むんだな。ＯＴＬ　すいません、ふざけましたね。というわけでようやく第五話。そしてＰＶ６０００突破ヤッッッッッッッッッホイ！！！！！！！！！！！大感謝ッス！感激ッス！獅子竹はあと三年は戦えるッス！　それと、初めて感想いただきました！ありがとう！それではご賞味あれ＾＾

第五話　「ソロンにて、一歩」

＞i164450｜1953＜

――――城塞都市「ソロン」――――

ノイシュバンシュタイン王国南端部、テレネ半島の中心に位置するこの街は、建国当初より北部との中間地点にあり、以来要衝として栄えてきた。半島の港町で降ろされた荷の多くはここに集められ、適正な税をかけられた後、北部へと送り出される。また、他国との戦争が勃発した際には最前戦基地となるために、軍需物資の補給も頻繁である。そのような背景か街全体が商人気質で、したたかな者が多いらしい。ジャンヌはそこを特に強調して説明してくれた。

ジャンヌ「いいかい、十分気を付けるんだよ。全員が全員ずるい奴ってわけじゃないけど、よそ者には手加減しないからね。骨までしゃぶられちまうよ」

リィゲル「ありがとう、ジャンヌ。ですがこの通り私たちはお金なんて持っていませんし、だれかれ構わず信用したりはしません」

ジャンヌ「そう言うけどね、リィゲル。あんたが一番心配なんだよ。アタイは」

石畳の整備された大通りを行く人ゴミを避けつつ、ジャンヌは一

つため息。無事ソロン入りを果たした私たちは、ジャンヌの好意で彼女の借家へと向かっているところである。さすがは栄えている都市なだけあり、市は活気にあふれ、通行人の数も多かった。生活水準は思ったより高く、白い石造りの建物が多く見られる。が、元の世界で言う西洋なデザインと南国のものが合わさっていささか珍妙でもあった。

リィゲル「工芸品も目立ちますね」

ジャンヌ「ああ、ここにはハンターズギルドがあるからハンターたちに素材の収集を依頼する職人も集まるんだ。それに、よその国から珍しいものが流れてきたりするからね」

リィゲル「他国の文化に触れるのならば港町に行くのではないですか？」

ジャンヌ「商人の街でやっていける奴はそう多くはないんだよ。ここも大概商人ばっかだけど、それでもまだ幾分やっていき易いんだ。安全だしね」

リィゲル「なるほど、確かに職人は総じて金勘定は得意ではありませんからね」

ジャンヌ「そういうこった。お、あれは――――」

と、左の屋台に目を止めるジャンヌ。

リィゲル「何かあったのですか？」

ジャンヌ「歩いてたら小腹がすいてきただろ。だからちょいと軽

食でも買ってこようかと思ってね」

リィゲル「なるほど、そうですね。お願いします」

ジャンヌ「あいよ」

勇んで屋台に向かうジャンヌを見届け、改めて周囲を見渡す。

リィゲル「それにしても、本当に私は異世界に来たんですね。いまさら実感が湧いてきましたよ」

こちらに来てからというもの、わずか三日と経っていないにも関わらずいろいろなことが立て続けにあった。

ヒルダ「私もそんな気がします。今はちょうど小休止と言ったところでしょうか」

レイア「退屈はしなかったであろう？」

リィゲル「ははっ、そう言われてみればそうですね」

あの日――――地獄と化したベルリンで死んだはずなのだが、まさに言葉通り、死んでも死にきれなかった私であった。気が付けば私は魂の選定によってヴァルハラに導かれ、ヒルダと出会った後、共にこの世界へと舞い降りた。自らに課せられた使命というものが一体何なのか？　それはまだ分からないが、このまま安穏と生きるつもりはない。ヒルダのあの指輪を斬った時、改めてそう誓ったのである。そう言えばレイアを初めて目の当たりにした時、これは私自身不可解なのだが、恐怖や畏れといった感情は全くなく、かえって憧憬の念をもって彼女を見据えていた気がする。けれどもそれは

少年時代のおとぎ話への憧れからではなく、純粋に空への――――まだ見ぬ明日への希望を重ねていたからなのかもしれない。少なくとも、レイアとあいまみえたその瞬間から、彼女は「敵」ではなかった。守護の契約の際、実は私はレイアから流れてくる力にあと少しで押し潰されるところだったりする。ヒルダの加護がなければどうなっていたことか……。彼女にはしかるべき時に何かしらの礼をしようと思う。（決してタイミングを逃してしまったからではない。決して……）それから、ジャンヌと出会えたのは幸運だった。おかげで出発の日まで、テントとは言え雨風が防げる場所で夜を過ごすことが出来たし、何よりこの世界の人物が進んで仲間になってくれたのはとてもありがたかった。レイアに驚くこともなく（もとはと言えばジャンヌはレイアを討伐にきていた）、我々の素性も聞かなかったこともある。別に私は話しても構わないのだが、話さなくていいと言われてしまっては話すわけにもいかない。それから守護の契約が完了してからのジャンヌとの手合わせ。余談ではあるが、日本刀を用いる戦闘で注意しなければならないのは、刃を合わせてはならないという点である。相手の剣筋を読み、紙一重でかわす。そう、紙一重で。間合いは近すぎてもいけないが遠すぎても話にならない。全ての手を寸前で避け、相手の隙を窺う。そして、ただ一刀のもとに斬り捨てる一撃必殺の戦法。これが私の流派である。されどそれ故に、相手の隙を見つけても確信がなければ容易には攻めに出られない。だからこそ、ジャンヌの剣は手強かった。元いた世界が世界なだけに、私はそうそう武術に秀でた者とめぐり会う機会がなかったため、二刀流と剣を交えたのは初めてのことだった。今でこそ言えるが、あの手数の多さには正直舌を巻いた。普通攻撃と攻撃の間に生まれるはずの隙が全くと言っていいほどなかったし、攻撃そのものも無駄がなかった。あくまで私見だが、ジャンヌの剣は流派として確立したものではなく、己の思うまま、流れのまま自由に動く我流ではないかと推測する。繊細でありながら強引に。優美でありながら狡猾に。そういった両極端さ、言いかえれば奔放さが

ジャンヌの剣の強みなのではないだろうか。ただし、私が言うのも大変厚かましいものがあるのだが、ジャンヌはまだ未熟である。絶対的集中力と客観的冷静さである。戦闘において、常に意識をフィールドの上に、俯瞰的に状況を処理するだけの力量が、ジャンヌには足りないのである。彼女はまだ伸びる。むしろ今がスタートだと言ってもいい。わずかではあるが、いずれは私をも凌駕するだけの才能の一端を確かに垣間見た。とにかく、私自身も学ぶことの多かった手合わせだったと思う。その後のジャンヌの電撃的求婚はあぜんとしたと言うか予想だにもしなかったことで――――。

（――――ん？　全部女性絡みじゃないか……）

レイア「ふっ、このすき者め（笑」

とレイア。

リィゲル「人聞きが悪いことを口にしないでください（汗」

と私。そうは言ってもやはり、誰が見ても十中八九美人と答えるような彼女たちと出会い、行動を共にする運びになったことに対し、やぶさかではない自分もいるのである。私とて、一介の男なのだ。

レイア「まあいい。からかってみただけだ。それより、聞きたいことがあるんだろう？」

唐突な質問である。いきなり前触れもなく聞きたいことなどと言われても色々とありすぎて何から聞けばいいのか分からない。だが、強いて聞くならば――――。

レイア「スリーサイズか？」

リィゲル「聞いてどうするんですか」

ジャンヌ「上から順に――――」

リィゲル「魔法について教えて下さい」

レイア「ククク、反応が、素直な奴だな。ハハハハハハハ」

リィゲル「……」

ため息も出ない。

レイア「――ハハハ、ハァハァ……。で、魔法についてだったな」

ひとしきり笑って満足したのか、レイアは目の端の涙をぬぐいながらこちらに向き直った。

リィゲル「ええ。何しろ私はこちらの世界のことを何一つ知りません。ですが、見聞を広めようにも何かあったときに私にあるのはわずかばかりの前世の知識とこの剣術。そしてヒルダ、レイア、ジャンヌ。貴女たちだけです。ですが、私は貴女たちに頼り続けるわけにはいきません――――」

ヒルダ「リィゲル……」

レイア「あるじよ……」

リィゲル「――――だから、私には力がいる。貴女たちを守るため、これから出会うべく人をも守れるだけの力がいる。傲慢かもし

れません。欲張りかもしれません。ですが、それでも私は欲しい。それだけの力が――――」

ベルリン市民や負傷兵たちが無事脱出できたのかどうか、私は知らない。あの日部下たちが――戦友たちがどうなったのか、またはどのように散っていったのか、私は知らない。けれども、これだけは分かる。私は、守るべき者たちを前にして、共に戦おうと誓った戦友たちを置き去りにして、たった一発の弾丸に倒れた。先に、逝ってしまった。私はその最後の誓いを全うすることなく死んでしまったのである。だからこそ、今度こそは守り通したい。そう、ただ守るだけでなく、守り通したいのである。そのためならば私はどんな苦労も苦痛も甘んじて受ける。剣折れ矢尽きようとも、守るべきものがあるかぎり、私はどのような災厄をも退いてみせる。

リィゲル「――――もしそれを業だと言うのならそれでもいい。どこまでも、貪欲であろうと思う。だから、まずはその第一歩として魔法を教えてほしい。聞きたいこと、というよりはお願いです。そして、改めてこれから共に歩む者として、よろしくお願いします。後ろにいるジャンヌもですよ」

ジャンヌ「おっと、気付いてたのかい？　気配は消したんだけどね」

リィゲル「その両手に携えているものはとても香ばしい匂いがしていたものですから」

ジャンヌ「ありゃ、これは一本取られたね。確かに、分かりやすかったね」

リィゲル「まあ、冗談はさておき、レイア。教えてくれますか？」

レイア「ああ、構わない。だが、一つだけ条件がある。その条件を呑むのなら、我も改めてこの身を捧げる決意を誓う」

条件、と。

レイア「よいか？」

リィゲル「もとより承知の上です。なんなりと」

レイア「分かった。まあ、そう構えずともよい。何も無理難題を押し付けようなどとは考えておらん。我の出す条件、それはただおぬしのしゃべり方を普通にしてほしい。と言うだけなのだからな」

はて、普通とは？

ヒルダ「そうですね。確かに私もずっと気になっていました。名案ですね」

ヒルダは手を合わせて微笑む。

ジャンヌ「言われてみりゃなんか不自然だったんだよな。丁寧語なんて使うもんじゃないよ。堅苦しいじゃないさ」

ジャンヌはニッカと笑う。

リィゲル「ええと、そう言われても、癖と言いますか」

レイア「だから、それだけが条件だ」

そしてレイアはニヒルに笑う。

現状：賛成　3票　反対？　1票

リィゲル「私としてはこれがノーマルなのですが……」

ヒルダ「いきなりはさすがに無理でも、少しずつ変えていけばいいんですよ。私は、リィゲルに変に気を遣わせるわけのは、なんだか嫌ですから」

ジャンヌ「そうさ、否定するようで悪いけど、やっぱりなれなれしくしてほしいんだよアタイたちはさ」

レイア「その通りだ、我があるじよ。あるじにはやはりびしっとしてもらわなければ、我も同胞たちに申し訳がたたん」

気を使って欲しくない。なれなれしくしてほしい。びしっとしてほしい。

なるほど、確かに私はどこか彼女たちに気を使っていたかもしれない。仲間のつもりで一歩引いていたかもしれない。しゃんとして見えなかったのかもしれない。

リィゲル「――――わかりまし、いえ、分かった。これでいいか？」

彼女たちは再び微笑んだ。半分は苦笑いかもしれないが。

リィゲル「これからはなるべく気をつけるようにし――――しよう。改めてよろしく」

ヒルダ「ええ」

レイア「ああ」

ジャンヌ「アタイもね」

そして私は自分の右手を――――握りこぶしを突き出した。

リィゲル「戦友に――――」

その意図にいち早く気付いたジャンヌも、買ってきていた食べ物をポーチにしまってこぶしを突き出す。

ジャンヌ「戦友に――――」

続いてヒルダとレイアもこぶしをまっすぐ突き出した。

ヒルダ&レイア「「戦友に――」」

四人のこぶしが繋がる。

リィゲル「いつの日も、いつまでも」

ジャンヌ「何処にいても、何処までも」

ヒルダ「何があっても、変わることなく」

レイア「慈しみ、助け合う」

出発点。ここが私たちのスタートとなる。

終着点。それはまだ見えない。けれど――――。

一同「「「「事切れんその時まで」」」」

――――けれど、必ず辿り着いてみせる。

第五話　「ソロンにて、一歩」（後書き）

ふっふっふ、これでやっとリィゲルの口調を普通に書けるぜ。グエッヘッヘッヘw

次回も乞うご期待！！

第六話　「衝動買い」（前書き）

どもども～、呼ばれて飛び出でじゃじゃじゃじゃ～ん＞＜　獅子竹鋸で～っすw
キラッ☆　ゴメンね、でももう大丈夫。だから、俺の小説を読めっ！
……。
……。
すいません、私が悪いんです。徹夜明けでテンションが無駄に高い私が悪いんです。なのでどうか石打の刑だけはやめて！あれだけはいやっ！

というわけで、「ファンタジア・フロンティア！」第６話です＾＾
今回は以前よりも早く更新出来ただけでなく、友人からの提案でないようを厚くしました。ちょっと読み応え有りすぎるかも……ブルブルッ。
とまあこんな感じで不定期更新ぐだぐだ作品ですが、どうかご賞味あれ＾＾

第六話　「衝動買い」

＞i164450｜1953＜

ジャンヌ「何はともあれ、まずはハンターズギルドで登録することだね。本当ならアタイが案内するべきなんだけど、どうしても外せない用があってさ。すまないね」

大通りの3ブロック奥にあるこの貸家は、2階建ての、石造りのアパートみたいなものだった。他にも同じものが何棟かあったので、恐らく公団のようなものなのだろうと推測する。それはともかく貸家で一息ついた私たちは、ジャンヌの提案によりハンターズギルドへ行くことになったのだが……。ちなみにハンターズギルドとは、ある程度予測はしていたが、やはり同業者、特にこの場合は冒険者、賞金稼ぎ、傭兵などの職業斡旋所のことらしい。ちなみに登録は誰でも無料で、そのほかにも商会ギルドなどが実在しているとのこと。とにかく、そこへはジャンヌ抜きで行かねばならなかった。

リィゲル「構わない。地図さえあれば難儀はしないし、それに、私はフィールドワークは好きだ」

ヒルダ「ええ、ですから気にしないでください」

ジャンヌ「そう言ってもらえると助かるよ。じゃあ、これを渡しておくから、気をつけるんだよ」

地図といくらか入った財布を投げてよこされた。

リィゲル「登録は無料じゃないのか？」

私は小首を傾げて尋ねる。

ジャンヌ「んや、無料さ。ただ、一文無しで行かせるのはしなびないからね。あと、意外とアタイには貯えがあるから、これくらい痛くもかゆくもないのさ。遠慮せず持ってきな」

なるほど、ジャンヌの気配りには頭が上がらない。

リィゲル「すまないな、何から何まで……。なるべく使わないでおこう」

私はそう言って地図と財布を上着の内ポケットにしまい、ドアを開けかけた。すると、

ヒルダ「そう言えば、と言ってもいまさらなのですが、私とリィゲルの服装は、少々周りから浮いているように感じられます。その点で何か気をつけなければならないことなどありますか？」

と、ヒルダがジャンヌに問いかける。確かに、ヒルダの言うとおりだった。文明の発展度からかんがみて、いくら軍服とは言え私の服は見ようによっては高級な礼装に見えるし、ヒルダに至っては騎士のような鎧である。何かトラブルに巻き込まれないとも限らなかった。

ジャンヌ「浮いてると言うか、リィゲル。あんたたち貴族かなん

かじゃないのかい？」

リィゲル「確かに私は貴族（フォン）の称号を冠しているが、一軍人に過ぎない」

レイア「竜族の私を誑かしておいて一般人とは白々しいな」

リィゲル「いつ何処で誑かされたんだ」

レイア「求めるなら、拒みはしないぞ？」

リィゲル「何をとは聞かないから、話の続きをさせてくれ」

レイア「ふっ、よかろう（笑）」

心臓を受け取った代わりに精神力を日々削られている気がしないでもない。

ジャンヌ「アタイはてっきりどっかの貴族のボンボンかとばかり思ってたよ」

リィゲル「これは私の国の軍服なんだ。まあ、士官だったからそれなりには上等だろうけどな」

ジャンヌ「なるほど、随分と贅沢な国だね。ま、いいさ。それより、まあ、そんなに気をつけなくてもいいんだけど、まあ、貴族を嫌ってる奴なんてどこにでもいるからね。その格好じゃ勘違いされるだろうね。だけど、面と向かって突っ掛かってくることはないと思うから、服装はまた後で考えようじゃないか」

リィゲル「ならいいんだ。じゃあ、行ってくる」

ヒルダ「行ってきます」

ジャンヌ「ああ、お詫びと言っちゃなんだけど、上手い飯でも用意してるよ」

こうして私たち三人は、ハンターズギルドへといくため、ジャンヌの貸家を後にした。

リィゲル「――――一度大通りに出て左側に見えてくる。……盾を掴んだ鷹の看板……。ん、あれか」

そうしておよそ三十分ほど、ハンターズギルドは難なく見つかった。

木造三階建ての割と大きめなその建物はなんというか、入り口からして斡旋所というよりはむしろ酒場のようだった。実際一階フロアは受付と酒場だった。昼間だと言うのにどのテーブルにも客がいて、そこかしこを店員と思われる女性たちがせわしなく行きかっていた。客の方はと言うと、全員が全員そうであるとは言わないまでも、どことなく粗暴な輩が多く、下品な会話も目立つ。

喧騒に包まれるフロアを受付へと進む私であったが、全くもって、うるさいなどとは感じなかった。

ヒルダ「嬉しそうですね、リィゲル」

ふと横にいたヒルダが微笑みながら言う。

リィゲル「ああ、以前は部下たちとよくこうして酒を酌み交わしていたからな」

一度だけ敵に見つかりかけたこともあったが。

リィゲル「私がいた戦線は東部だったから、特に美味く感じたものさ」

レイア「五臓六腑に沁みわたる、か。そう言えば我はしばらく口にしていなかったな」

氷点下の酒盛りを懐かしく思っていると、意外にもレイアが乗ってきた。

リィゲル&ヒルダ「「レイアも飲むのか？（飲まれるのですか？）」」

レイア「おかしいか？　何も人間だけの嗜みと言うわけでもあるまい。まあ、滅多に口にすることはないから私が変わっているのかも知れんが……。少なくともある程度はいける口だぞ？」

リィゲル「意外だな。じゃあ今度、飲み比べでもするか」

レイア「ああいいぞ。だがただでは負けてやらん」

ヒルダ「それでは、私もいいですか？」

レイアを誘ったつもりが、今度はもっと意外な人物が参戦してきた。

リィゲル＆レイア「「ヒルダも飲むのか！？（飲むとは！？）」」

ヒルダ「意外ですか？　私だって好きですよ。まあまずは登録の方をしませんか？　いつまでもお店の真ん中で立ち話と言うのも無粋ですから」

確かにそうである。そこまでではないが店員の視線もあったので、私たちは当初の目的に取りかかった。

リィゲル＆「すまない。ハンターの登録をしたいんだが、ここ受付であってるか？」

カウンター越しに声をかけられた職員の女性がこちらを振り向き、笑顔で応える。

受付嬢「はい。新規登録はこちらで承っております。身分証はお持ちですか？」

リィゲル＆「いや、あいにくと持っていない。ここで作れるって話を聞いたんだが」

受付嬢「出来ますよ。それでしたらこちらの書類に必要事項を明記して下さい」

リィゲル「後ろの二人も新規だから、三枚くれないか？」

受付嬢「かしこまりました。ではこちらを。ペンは隣のカウンターにありますので」

リィゲル「ありがとう」

そうして三人で隣へと移動し、ペンをとって書類の空欄を埋めていった。そして、今頃ではあるが、あることに気が付く。

リィゲル「そう言えば、私の言葉はどうして通じるのだろう。それに文字まで……」

そう、私は何を隠そうこの世界にとっては異世界人である。言葉はもとより文字など書けるわけがないのだ。にもかかわらず、言葉は通じるし文字も難なく書くことができた。若干の違和感がなかったわけではないが……。

ヒルダ「言葉とは、人が対象を認識する上で重要なファクターです。言葉による概念化は世界への意味付け、それは世界が違っても変わりません。同じ世界内での地域ごとの差異はもちろんありますが、リィゲルの場合は世界そのものを移動したので、言語という概念がそのままこの世界のものと変換されたんです」

リィゲル「なるほど、違和感の正体はそれだったのか」

ヒルダ「はい、ですがそれもじきになれますよ」

ペンを筆さしに置き、三枚の羊皮紙を受付に提出する。

受付嬢「――――――確かに承りました。それでは、確認をさせ

ていただきます。リィーゲルト・フォン・ハインリッヒ様、ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア様。それと、レイア様、で間違いありませんね」

ヒルダの家名は戦乙女と言う事もありヴァルキュリアにしたが、レイアは『我々に家名はない』と、そのまま記入した。受付の女性は一瞬いぶかしむそぶりを見せたが、別段追求することもなかった。

リィゲル「ああ、よろしく頼む」

受付嬢「それではこれに手を当てて下さい」

そう言って女性は透明の半球状の水晶のようなものを取り出す。

リィゲル「これは？」

受付嬢「初めてご覧になりますか？　これは魔晶石といって、おもに魔術の触媒に用いられるものなのですが、その特徴の一つとして特定の人物の情報を記憶することができるんです。ですからこうして契約や登録の際に使用することがあるんです」

リィゲル「そう言う事なら」

つまるところ、契約不履行や犯罪者の特定に役立つということだろう。なかなかよくできたシステムである。

特にやましいことなどないので三人とも魔晶石に手を当てる。するとそれは淡い光を発し、やがてまたもとの透明な水晶へと戻った。

受付嬢「登録が完了いたしました。こちらがハンター登録証と身

分証明証となります。初回のようですので、今回は無料での提供となりますが、紛失された場合、再発行には料金が発生いたしますのでご注意ください」

「覚えておこう」

受付嬢「では、改めてよろしくお願いします。ようこそハンターズギルドへ。ハンターランクと依頼についての説明をお聞きしますか？」

「ああ、聞かせてくれ」

受付嬢「はい、まずはハンターズランクについてですが、これはハンターズギルド内でのある種の階級となっていて、SS，S，AA，A，B，C，D，Eの全8種あります。あなた方は登録したばかりなのでランクはEとなっておりますが、依頼を一定以上達成していくごとに昇格となります。ランクは受けることのできる依頼の難易度に影響するのでご留意ください」

リィゲル「影響と言うと？」

受付嬢「はい、正確には請け負うことのできる依頼の制限になるのですが、まずは依頼の難易度に説明させていただきます。全ての依頼にはそれぞれこちらが判定した難易度が割り当てられ、初めてハンターののもとに依頼として紹介されます。その難易度と言うのが――――。そうですね、こちらをご覧ください」

受付の引き出しから一枚の羊皮紙が引っ張り出され、カウンターに置かれた。

リィゲル「これは、依頼書か？」

受付嬢「はい。この依頼内容の下に★が描かれていますね？　この★の数が多ければ多いほど、難易度が高いということになります。下は一個から上は２４個までです。あなた方のランクはＥですから、最高で★が４個までの依頼が受注可能となっています。依頼の内容については様々で、一番多いのはモンスター等の討伐依頼ですね。次いで商隊や重要人物の護衛、荷物の運搬、素材の採取、雑務などがあります。それぞれの依頼書には依頼主の名前、依頼内容、報酬、契約料、期間、成功条件、失敗条件、そして今説明した難易度が記載されていますので、受注なさる際は十分ご確認ください。特に注意していただきたいのが契約料です。これはハンターが仕事を破棄または失敗した際の違約金として、または特殊な依頼の場合の支給品の経費としてあらかじめ徴収いたしますが、依頼を達成されましたら報酬とともにお支払いいたします。それと、討伐依頼についてですが、討伐対象を倒した証拠としてその身体の一部を持参していただきます。もし、何も証拠部位がない場合は依頼失敗となりますのでくれぐれも留め置きください」

ふぅ、と一拍おいて女性は他に何かお尋ねしたいことはありますか？と尋ねる。

リィゲル「いいや、ない。説明ありがとう。今日は登録だけしにきただけだから、依頼の方はまた後日にするよ」

受付嬢「わかりました。いつでもお越しください」

女性に一礼し、私たちはハンターズギルドを後にした。とりあえず、今日の目的は遂げた。しかし日はまだ高く、ジャンヌが帰ってくるにはまだ時間があったので、何かしておくことはないかと思案

する。

リィゲル「ヒルダ、何か思いつかないか？」

ヒルダ「そうですね……。特にないです」

リィゲル「そうか、レイアは？」

レイア「用か……。ないこともない」

リィゲル「と言うと？」

レイア「以前主が言っていたことを思い出してな。その腰に差している剣についてだ」

リィゲル「宵闇がどうかしたのか？」

レイア「ああ、確かおぬしはこう言ったはずだ。『この刀はそうそう抜かない』と。だがこの先いつ荒事に巻き込まれるかも分からないというのにそんなことは言っておられんだろう。ハンターの依頼をこなす上でもそうだ。だから、何か代わりの武器を買ったらどうかと思ってな。さすがに徒手空拳で構わないなどとは考えておるまいな？」

なんということだろう。完全に失念していた。我ながら情けない。しかし――――。

リィゲル「――――しかし、武器を買おうにも先立つものがない」

そう私たちにはお金がない。無一文。下手すればジャンヌのたか

りである。もし仮にジャンヌから借り受けたこの財布の中身を使うにしても、武器を買えるほどの額はないのだった。

が、レイアはニヒルな笑みを浮かべている。

リィゲル「何か考えがあるようだが」

レイア「ああ、当然だ。私とて考えもなしに提案する馬鹿ではないからな」

ヒルダ「それは危険を伴うようなものですか？」

と、ヒルダ。彼女の言葉はまさに私も懸念していたことだった。短時間にそれなりの額を用意するには、借金以外はどうしても非合法になるのだ。

レイア「見くびってくれるでない。リィゲルの意に反するようなことはしない」

リィゲル「ならいいんだ。じゃあ聞かせてくれないか？　その方法を」

非合法でないのなら文句はない。なので私はレイアにその策について尋ねた。が――――。

レイア「ふふふ、そう急(せ)くな。じきにわかる」

と、はぐらかされてしまった。

レイア「確か地図によるとハンターズギルドの二軒隣が素材屋だ

ったな。行くぞ」

にやにやしながら素材屋へと向かうレイア。私は彼女を信じているが、心配せざるを得ないこの心境をぜひとも理解していただきたいものである。

孤高の店主「……いらっしゃい……」

表通りという商人なら羨むような場所に建つその店は、こじんまりとしたどちらかと言うと活気に乏しかった。品物も雑然と並んでいるだけで、まったく見た目など気にしていない様子である。一人カウンターに肘をつきながら、ふてぶてしく応対したのが恐らくこの店の主だろう。壮年のあごひげを蓄えたこの男は、まるでこちらを吟味するかのように眺めていた。普通の客ならそそくさと帰ってしまうような、言っては失礼だがいかつい顔である。

しかしレイアはそんなこともお構いなしにずんずんとカウンターに接近する。まあ、雰囲気は殺伐としているものの、特に悪意などは感じられなかったので私とヒルダもそれにならう。

レイア「おぬしが店主か？」

孤高の店主「……いかにもそうだが、何か用か？」

レイアと店主のやり取りが始まった。私とヒルダはレイアの手の内を全く知らないので、一抹の不安もあるが、ここは黙って見守る

ことにする。

レイア「とある素材を買い取ってもらいたいのだが、いいだろうか？」

孤高の店主「……確かにここは素材屋で素材の買い取りもやってるが、うちは他と違ってそこらへんに転がっているようなもんは扱ってない。それを承知で売りに来たんならいいが、ろくでもないものだったら叩き出すぞ……」

レイア「そうかまえるな。まずはこれを見てからだ」

そう言ってレイアは外套の中から一つの革袋を取り出した。そして中身をカウンターに出し――――。

（――――これはレイアの鱗！？）

そう、美麗な桜色をした、紛れもないレイアの鱗だった。しかも一枚だけでなく9枚もある。

私とヒルダは思わず驚いたが、一番驚いていたのは鱗を見た途端に目付きを変えた店主だった。

孤高の店主「……こいつは驚いた。こんな色の火竜種の鱗は見たことがない。一体どこでこんなもんを……。麗しい花のような桃色。火竜種の鱗とは思えないほどの軽量と硬度。それに、どれをとっても均整が取れていて、傷一つない」

まるで店主は魅入られたようにレイアの鱗を鑑定した。そして、惜しむことなく賛美の麗句を並べる。その言葉は決して大げさなも

のではなかった。

孤高の店主「……よもやこんな代物を拝む日が来るとは思ってもみなかった。まさに眼福だ。さきほどの非礼を詫びさせてくれ。すまなかった。俺は見ての通り客を選ぶ。だからあんたたちを試したんだ」

レイア「気になどしていない。その気概は称賛に値するからな。それより、買い取ってくれるか？」

孤高の店主「ああ、もちろんそのつもりだ。こんなものを見せつけられたんじゃ買わずにはいられないだろが。いくらだ？」

レイア「おぬしが付けてくれ。言い値で構わない」

孤高の店主「今度はあんたが俺を試してるんだな。よし、一枚につき銀判貨二枚でどうだ」

（銀判貨一枚！？）

私は再びその値段に驚いた。ジャンヌから聞くところによれば、この世界に普及している硬貨は閃貨（鉄でできた硬貨）、青銅貨、銅貨、銅判貨、銀貨、銀判貨、金貨、金判貨、白金貨、白金判貨の十種類で、閃貨を一とするなら順番に百、千、一万、五万、十万、百万、五百万、一千万、五千万となっていて、平均的な家庭の月収額が銀貨四枚。つまり閃貨二十万枚分である。そして店主が鱗一枚につき提示した額が銀判貨二枚。一家庭を九カ月間まかなうだけの大金なのである。

レイア「合計で金貨1枚と銀判貨8枚か、高すぎず低すぎずと言

ったところだな。なかなかどうして、見る目があるじゃないか」

孤高の店主「当り前だ。俺はこれでもこの道四十年だ。と言ってもまだまだ未熟だが、目利きぐらいはできる。で、いいのか？」

レイア「ああ、その値で構わない。金はすぐ用意出来るか？」

孤高の店主「ちょっと待ってろ。今金庫から取ってくる」

カウンターのいすから急いで立ち上がり、店の奥へと入って行くのを確認すると、私はすぐさまレイアを問い詰めた。

リィゲル「あれは、貴女の身体の一部だろう！　それをやすやすと売ってしまっていいのか？」

ヒルダ「そうです。こんな方法は取るべきではありません

レイア「勘違いするでない。私は主の意に反するようなことはしないと言ったぞ」

リィゲル「私は友に身体の一部を売らせるような人間ではない。ましてやこれからの運命を共にすると誓った戦友に――――」

レイア「話は最後まで聞かぬか。何もむやみに売ったわけではない。私たち火竜族は、まあ、他の甲殻を鱗を持つ種族は皆そうなのだが、定期的に鱗が生え変わる。だから、この鱗は全て生え変わるために剥がれたものなのだ。今までなら捨ておいていたが、これからは何か役に立つこともあろうかと取っておいたのだ。改めて言うが、私はおぬしの守護者になることを誓ったのだ。その私がおぬし

の嫌がるようなことをするとでも思ったのか？」

リィゲル「――――っ！」

そう、レイアは私との戦いののち、守護の契約を結んだ気高き火竜である。私はこともあろうか命を預ける戦友に疑いの思いをいだいたのだ。私はレイアを信じきれなかったことをいたく恥、言葉を失った。

レイア「謝らないでくれ。私も意地が悪かった。おぬしが勘違いしてしまうのは最初から分かっていたのにな。初めから説明しておくべきだった。だから、謝らないでくれ。私はおぬしの誠実さを垣間見ることができたのだ。かえってこっちが恥ずかしいくらいだ」

そう告げて、らしくもなく苦笑いして見せるレイア。私も謝るなと言われ、何とも言われず苦笑いを浮かべた。

ヒルダ「私も謝ります。レイアにはレイアなりに、思うところがあったのに疑ってしまって」

レイア「いや、おぬしも謝ることはない。それより、店主が出てくるようだぞ」

リィゲル「そうだな、この話しはもうここまでにしよう」

そうして話を打ち切ったと同時に店主が店の奥からカウンターに戻ってきた。

孤高の店主「取り込み中だったか？」

レイア「いや、ちょうど終わったところだ」

孤高の店主「そうか、ならいい。金貨1枚と銀判貨8枚だ。いいものを仕入れさせてもらったよ。感謝する」

レイア「こちらもいきなりですまなかったな。これだけの大金を。これからしばらくは経営が大変だろう」

孤高の店主「なに、どうせこの店はほとんど俺の趣味のような店だからな何か入用になったらいつでも言ってくれ。そこのにいちゃんたちもな」

リィゲル&ヒルダ「「私たちのことか（ですか）？」」

孤高の店主「ああ、あんたら、そうとうな腕の持ち主なんだろう。身体つきを見りゃひと目でわかるよ。本物か、偽物かくらいはな。物の良し悪しを見極める。それが俺たち商人（あきんど）だ」

リィゲル&ヒルダ「そこまで言われては返す言葉もないが、身に余る言葉だな」

ヒルダ「私も、同じです。まだまだ精進が足りません」

孤高の店主「ふっ、随分と謙遜するんだな。冒険者ならしっかり胸を張りな。でねーとなめられっぱなしだぞ。だが、己を理解することができると言うのはいいことだ。あんたらなら道を違（たが）えることはないだろう。っと、歳をとると説教臭くなるな。あんたら、用が他にあるんだろ？　だったらこんなところでもたついてないでさっさと行きな。商売のじゃまだからよ」

不敵な笑みを浮かべ、我々を見送る店主。こんないい笑顔ができる人間は今までそうそういなかった。彼は紛れもなく人生の先達であった。

若い店員「いらっしゃいませっ！ようこそ『ソロン・ブレイズ』へ！」

素材屋を後にした私たちは、その足で大通りの向かいに構える武器屋へと入って行った。レイアは武器など必要ないと言って外で待っている。こちらは先ほどの素材屋とは打って変わって、垢ぬけた明るさと爽やかな笑顔を携えた若い店員たちが必死に働いていた。店もかなり大きく、周辺の店舗とは一線を画していた。武器・防具はピンからキリまでそろっており、種類ごと値段ごとに見比べられるようになっていて、これぞという商品がよく映えるように配置されていた。掃除も行き届いている。

若い店員「どのような品をお探しですか？」

早速呼び込みをしていた一人の青年が近寄ってきた。なかなかの好青年である。

リィゲル「まだ決まったわけではないから、考えているところさ」

だがこちらも今日初めて武器屋に来ようと思い立ったわけで、まったくこれと言って欲しいものが決まっていなかったのである。これからは恐らく一対一だけでなく多対一の戦闘が起こりうるのでそ

れに対応できるように――――。

若い店員「分かりました。ではどういう用途、どのようなコンセプトでお探しですか？」

――――これは意外である。アルバイトの店員とばかり思っていたが、多少は武器に関して通ずるものがあるようだ。少々無粋かもしれないが、試してみてもいいだろうか？

リィゲル「そうだな、今はこれしかないから、と言ってもこの刀は業物なんだが。とにかく予備の武器、もしくはこれの代わりになるようなものが欲しい」

若い店員「やはりそれはカタナでしたか。自分も見るのは初めてなんです。確かそれは叩き斬るよりも撫で切ることを主眼に置いた、切って良し、突いて良しのある種完成された武器でしたね。ですが、おもに一対一向けのため、多対一ではもてあましてしまう恐れがあるらしいとか」

リィゲル「これは驚いた。存外に詳しいな」

若い店員「はい。今はまだここの見習いですけど、でもいずれは独立して自分の店を構えるのが自分の夢なんです。だから、日々冒険者の方々からも勉強させてもらってるんです」

なるほど、どおりで精通しているはずである。まさか刀についてここまで理解しているとは思わなかった。しかし、なんと前途有望な芽であろうか。

リィゲル「そうっだったのか。それじゃあ、君が店を出すのが楽

しみにするよ」

若い店員「はい！　ありがとうございます！　では、商品の紹介をいたしますので、こちらにお越しください」

リィゲル「ああ、よろしく頼むよ。あと、ヒルダにも見繕ってくれないか？」

若い店員「ええと、そちらのご婦人がヒルダ様、ですか？」

リィゲル「ああそうか、まだお互いの名前も知らなかったな。私はリィーゲルト・フォンハインリッヒ。リィゲルって呼んでくれて構わない。それとこっちの甲冑を着ているのがブリュンヒルデ・ヴァルキュリア」

ヒルダ「よろしくお願いしますね（＾＾」

ポッ

フリッツ「は、はい。よろしくお願いします。ぼ、僕の名前は、フリッツ・ウィンストンといいます。で、ではこちらへ」

一瞬で顔を赤くし、口調がぐだぐだになるフリッツ。まあ、ヒルダの微笑みは女神のそれなので仕方があるまい。私とて、ぐっとくるものがあったりなかったり……。

リィゲル「ヒルダは何にするか決めてるのか？」

まあとりあえずは場の空気を普通に戻すことにする。

ヒルダ「ええ、決まってますよ。向こう《ヴァルハラ》では弓と細剣（レイピア）を使ってましたから、その二つにします」

リィゲル「何だ、もう決まってたのか。だったら早いところ決めないといけないな」

フリッツ「付かぬことを伺いますが、リィゲルさんは長柄の使用経験はありますか？」

長柄か……。確か父からある程度手ほどきを受けた気がする。

リィゲル「ないこともないよ」

フリッツ「でしたら、先週入荷したいいものがあるのですが、いかがでしょう？」

リィゲル「そうだな……、じゃあ見せてくれるかな？」

フリッツ「かしこまりました。少々お待ち下さい」

やがてフリッツがいたく重そうにしながら持ってきたのは、２ｍほどの槍だった。しかし、槍状の頭部には斧のような形をした広い刃が付いており、その反対側には小さな鉤状の突起が付いていた。

リィゲル「――――これは、ハルバートかな？」

ハルバートとは、私がいた世界の１５世紀ごろ、スイスで登場した多用途な武器である。その特殊な形状から、切る、突く、引っかける、鉤爪で叩くといった四つの使い分けが可能となっている。

フリッツ「やはりご存知でしたね。さすがです。これはレーヴェンノヴァ帝国の鍛冶匠“ゲオルグ・ディートリヒ”が手掛けた作品の一つなんですよ」

フリッツは誇らしげに解説しつつ、ハルバートを私に手渡す。

リィゲル「ん？意外と軽い」

と言っても体力が守護の契約によって格段に上がっているので、普通の人にとっては非常に重かったりする。

フリッツ「……」

案の定、口をポカンと開けて呆然とするフリッツ。まあ、確かにあれだけ重たそうに持っていたものを片手でやすやすと持たれたとあっては驚くしかないだろう。

フリッツ「……リィゲルさん。あなたの何処にそんな力があるんですか？」

リィゲル「なに、単に力が多少あるって程度だよ」

フリッツ「それにしても――――。いえ、それより、随分と手慣れた持ち方ですね？」

リィゲル「そう見えるか？」

フリッツ「ええ、リィゲルさんには遠く及ばないですが、実は僕、槍術を習ってるんです。それで、何処となく師範代の先生と構えが似ているなと思って」

リィゲル「よく見ているね。鋭い観察眼だ」

フリッツ「そう言ってもらえると嬉しいですよ。ありがとうございます。ところで、いかがでしょうか？そのハルバートは」

ふむ、と再び私は自分の手におさまっているハルバートに視線を落とした。穂先から石突まで全て金属でできたこの槍であるが、私はふと下から順に叩いていった。

コンコン、コンコン、コンコン、コンコン――――。

穂先まで叩き終えた私はそこで息を一つ付く。ああ、なんということだろうか。

リィゲル「これは、凄いな。確かに業物だ。音のバランスがいい。それにこの刃と槍状部には硬軟2種類の鋼が用いられている。まるで刀だ」

フリッツ「気に入られたようですね。リィゲルさんなら安心してお売りできますよ」

リィゲル「いくらかな？」

フリッツ「はい、ええと、金貨1枚になります」

リィゲル&ヒルダ「「……」」

軍資金の半分以上を使ってしまうのは我ながらどうかと思う。

（買わないのですか？リィゲル……）

（あれだけの業物を、みすみす手放すのは非常に惜しい。だが、さすがに金貨1枚は大出費だろう）

（私は、買った方がいいと思います）

（何故だ？）

（何となく、ですが、あの槍がリィゲルを選んだ気がするのです）

（槍が、私を？）

（はい、そうです）

（あいつが私をか……。そう言われればそんな気がしないでもないな）

（あの槍も、もしくは運命に引き寄せられて来たのではないでしょうか？）

（運命、ね。そうだな、確かに今日まで無駄な出会いはなかった。ここは一つ、大博打といこうか）

フリッツ「あの、リィゲルさん。何を話していらっしゃるんですか？」

リィゲル「いや、なんでもない。買わせてもらうよ」

フリッツ「ほんとですか？　あ、ありがとうございます！」

リィゲル「こちらこそ、このハルバートと引き合わせてもらって感謝してるよ。それじゃあ今度はヒルダの装備を選ぼうか」

フリッツ「はい！かしこまりました！ではこちらにどうぞ！」

リィゲル「行こうか、ヒルダ」

ヒルダ「はい、そうですね。私も早く選ばないと、外ではレイアも待っていますしね」

リィゲル「さて、掘り出し物があるといいんだがな」

そうしてフリッツに連れられて移動してきたのが細剣の販売スペース、しかし隣には都合よく弓の販売スペースもあった。

フリッツ「弓だけでは心もとないと、護身用に細剣を買われる冒険者が意外と多かったので、こうして販売スペースを隣り合わせにしたらしいです」

とフリッツ談。

ヒルダ「改めて思いますが、本当に品物がそろってるんですね」

フリッツ「は、はい。貧乏冒険者から王宮騎士までいらっしゃいませっていうのが、うちの店長の掲げるコンセプトなんです。で、ですから、きっとヒルダさんも気に入って下さる品物があるはずです」

ヒルダ「ふふっ、そう緊張しないでください。それで、あなたの

見立てではどれくらいかしら」

フリッツ「しょ、少々お待ちを。ただいま見繕ってまいりますのでっ」

慌てて店内を駆けずり回るフリッツを見守りつつ、思わず苦笑する私とヒルダ。そして、何本もの細剣と弓を両手に抱えた純粋な青年にまたもや苦笑しつつ、ヒルダの得物選びが始まるのだった。

フリッツ「――――これなんてどうでしょう？――――」

リィゲル「――――でもこっちのヒルトが――――」

ヒルダ「――――すると、この幅だと――――」

フリッツ「――――この際ここの長さは――――」

ヒルダ「――――ガードがこの一本では――――」

「――――――」

「――――」

――――――。

――――。

……小一時間は経っただろうか。選定は意外にも長引き、ようやく弓と細剣を決めたころにはもう日が沈みかけていた。最終的にヒルダが選んだのは長さ７０？くらいの鋼製のスウェプト・ヒルトのついた形は一般的なレイピアと、強化弓とも呼ばれるコンポジット・

ボウの二つ。なるべく上等のものを買ったので、計銀判貨7枚と銀貨が1枚がさらになくなり――――。

レイア「――――で、あっという間に銀貨が1枚残っただけか。実にあっけないものだな」

と、若干呆れた目でこちらを見てくるレイア。随分と待たされた挙句、折角作った軍資金がほぼなくなったのだから当然の態度だろう。

そしてジャンヌの貸家へと帰宅途中に、レイアの機嫌を直すために残りの銀貨1枚も味見と称するレイアの屋台での暴食に次ぐ暴食で、見事胃袋に収まってしまってたりする。

あと、ジャンヌが用意すると言っていた夕食は予想に反して大変美味かった。

第六話　「衝動買い」（後書き）

ああ、出す予定なかったのに新キャラ二人出てきたし。おかげで出てくる予定のやつ一人消えたしｗ　ま、これもなにかの運命なのでしょう。そういえば新しい武器についてですが参考資料として　「新紀元社　市川定春先生　著　武器辞典」の内容を一部引用させていただきました。

さて、こんな駄文を読んで下さる皆様方には感謝のしようもありません。前書きにも書いたとおり、不定期更新なのでやきもきされる方もいらっしゃるかと思いますが、そこは末永くお付き合いくださいませ＾＾　ご意見・ご感想待っております。誤字・脱字の通報にもご協力くださいｗ　それでは、次回乞うご期待＞＜

人物プロフィールなど（前書き）

時間稼ぎと笑ってくれて結構！！
第七話は難産ですｗ　もう少し待って下さい；；
と、いうわけでプロフィールどうぞ＾＾

人物プロフィールなど

○リィーゲルト・フォン・ハインリッヒ
（von Heinrich，Reagelt）
・出身地……ドイツ第三帝国　シュトゥットガルト
・年齢……25歳
・身長……177？
・装備品……「宵闇」：刃渡り79？、反り浅め、刃文「乱刃」、鎬造、刀身は淡い黒
作者は不明だが、業物
「ハルバート」：柄は鋼、刃は鎬造、とある巨匠の作
「ブラックバトルディフェンスナイフ」：特殊な形状をした頑丈なナイフ
「???」：ネタばれの危険性があるため、現在は非公開

○ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア
（Brunhild Valkyrja）
・出身地……アスガルド　ヴァルハラ宮殿
・年齢……不明（外見上の推定年齢21歳）
・身長……168？
・装備品……「レイピア」：刃渡り70？、スウェプトヒルト付き、鞘は牛革
「強化弓（コンポジット・ボウ）」：62？級（引くのに必要な力）

○ジャンヌ・アントホープ

（Ｊｅａｎｎｅ　Ａｎｔｈｏｐｅ）
・出身地……ネタばれのためノーコメント
・年齢……２１〜２４歳？（本人が覚えていない）
・身長……１７４？
・装備品……「ヘヴィー・カトラス」：刃渡り６８？　重量４？　ナックルガード付き
「コンバット・マチェット」：刃渡り５２？　ナックルガード付き

○レイア（桜火竜）
（Ｌａｙａｒ）
・出身地……覚えてないそうです
・年齢……２０７歳だそうです
・身長……１６５？
・装備品……「徒手空拳」：泣く子も黙る瞬間最大パンチ力６３４．８？（自己ベスト）

○フリッツ・ウィンストン
（Ｗｉｎｓｔｏｎ，Ｆｒｉｔｚ）
・出身地……ノイシュバンシュタイン王国　城塞都市ソロン
・年齢……１６歳
・身長……１７１？

人物プロフィールなど（後書き）

２０１１年一月１８日　１：５０にて改

ヒルダの弓のステータス　３２?級⇒６２?級

第七話　「灯火」（前書き）

☆祝☆　ＰＶ１３，０００突破　＆　ユニークアクセス２，０００突破！！！！

やっとこさ第七話がでけた。おら、疲れただ。
ここまで難産になるとは思ってなかったっぺよぉ~~

というわけで、読者の皆さま、大変お待たせいたしました＞＜
できたてほやほやの第七話です。この回は魔法を習得するだけにとどまりますが、次回はいよいよ久しぶりの戦闘となります^^
内容はちょっと過激化も／（~。~）／

それでは、前置きはここまでにして、えぇ～第七話、ご賞味あれｗ

第七話　「灯火」

＞i164450|1953＜

レイヤ「――――魔法とはつまるところ、世界を騙すことでもあり、また、世界の創造でもある」

翌日、城塞都市ソロンより南西2?、乗合馬車に便乗してきた私たちは、さらにそこから西一体に広がる密林地帯へと足を踏み入れていた。

何を隠そう、初クエストである。

と言っても今は、川沿いに討伐対象である小型肉食鳥竜（確かランポスとか言っていた）を探して移動しつつ、レイアに魔法の手ほどきを受けているところである。

レイア「――――恐らくだが、おぬしは『気』というものを操れるな？」

確かめるようにこちらを向いてきたので、軽く首肯して答える。

リィゲル「ああ、使えるよ」

レイア「ならばよい。『気』と『魔』とは実は似て非なるものなのだ。世界と言う概念の持つ力――、すなわち『魔』とはいかに己の中に世界を引き込むか。そして、魔法の行使とは引き込んだ世界に己のイメージを重ね、認めさせ、最終的に現象そのものを現実世界に顕現させることを言う。例えば――――」

そう言って右手をかざしてみせるレイア。その掌の上には赤い炎が陽炎のように揺れていた。

リィゲル「これが、魔法か」

ヒルダ「私たち神族――――いえ、元神族の使う魔法とは原理が違うのですね」

レイアの手のひらの上にある炎を観察しつつ、ヒルダが呟く。

リィゲル「そうなのか？」

ジャンヌ「魔法なんてどれもみんな同じじゃないのかい？」

これはごく素朴な疑問である。まず魔法自体未知の領域なため、一つ一つの情報が新鮮で、大学の講義を受けている感覚になっていた。

ヒルダ「ええ、そうですよ。と言っても、あくまで私はリィゲルとともにこの世界に降り立った時から元神族なので、あまり大したものではありませんが、基本原理が潜在的に身体に染みついていて使えるんです。この世界では自らに世界を引き込み、それを媒体として魔法を行使すると言ってましたけど、私たちの場合、世界に直接干渉出来るんです」

レイア「その通りだ。だからほんの少しの魔法の行使だけで、大きな効果を得ることができる。先日ソロンの外で野宿した時にヒルダが展開した結界は、現役の神族には敵わないが並大抵の者には破れないようになっていた。いまさらだが説明が後回しになっていたな」

ジャンヌ「ほんと、第七話で今さらだな。作者の肝心な部分で説明省く癖がたたったな」

読者の皆さま、申し訳ありません＞＜

リィゲル「だから、神族の世界への直接的接触が危険なのか」

ヒルダ「はい。世界への異常な干渉は崩壊につながります。そしてなにより、私の真の目的はエインフェリアである貴方とともに歩み、支え、何をなすかを見届けることにありますから」

リィゲル「確かに、そうだったね」

レイア「我個人としては神族の魔法に関してはなみなみならぬ関心があるのだが、まあ今はいいだろう。それよりも、先ほどの続きだ」

おっと、気付いたら話が随分と横道に逸れてしまっていた。

閑話休題。

レイア「さっき見せたぐらいの比較的小規模な現象なら、少し魔法をかじったことのある者でも、頭の中で思い浮かべるだけで簡単

に行使できる。だが、より大きな現象を起こそうとするならば、何かしらの手順が必要になる」

リィゲル「呪文のようなものを詠唱したりするんだね？」

レイア「それも手順の一つだ。他にも陣を描いたり、動作を交えたりなどがある。手っ取り早いのは詠唱だが、これは個人個人が勝手に言葉を紡ぐものだから、個人個人の語彙が鍵となる。うまく自分の想像通りの言葉を見つけるしかない」

リィゲル「自分の想像に合う言葉、か」

レイア「まあ、今はそこまで考えずともよい。必要となるのはまだ先になるだろう。さあ、何はともあれ実践してみないことには前には進めない。リィゲル、早速だが、試してみよ」

リィゲル「ああ、分かった」

私は軽く頷くと、肺の中の息をゆっくりと吐き出し、目を閉じた。

「『気』を練る、これすなわち己を知るなり」

私は体中に意識を集中し、『気』の鍛錬を始める。皮膚、筋肉、臓器、骨、血――――『私』をなしているこれらにくまなく意識を当て続ける。そして三人称視点から『私』を俯瞰するように意識する。

「『一』は『全』、『全』は『一』」

『私』をなしているもの全て、どれを取り払っても『私』は存在

しえない。逆もまた真なり。『私』を成しているもの全て、どれをとってもそれらは『私』である。

「『全』は『一』」、『一』は『全』」

『世界』をなしているありとあらゆるもの。『私』もその中の内の一つの要素である。俯瞰的な意識をさらに上空へと持ち上げる。『世界』をなしているもの全て、どれを取り払っても『世界』は存在しえない。逆もまた真なり。『世界』をなしているもの全て、どれをとってもそれらは『世界』である。

『私』は『世界』の一要素であり、『世界』もまた、『私』の一要素である。

『一』と『全』。相反するこの二つは互いにそのものであるのだ。

『一』を知り、『全』を知る。『全』を知り、『一』を知る。

『世界』そのものに同化し、同調すると同時に、『世界』を己の一部として取り込み、吸収する。

これが『気』を練る、と言う事である。

リィゲル「……」

十分な『気』を以て、ようやくここからが本番である。

火、炎、マッチ、ライター、ランプ……――――――――。

レイアが先程私たちにして見せたような火を自分なりの想像で世

界に重ねていく。
おぼろげながらも、少しずつ、少しずつ確かな脳内イメージを構築していく。
　火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火……………………
…………………………………………………………………………………………――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――。
　――――――――――――――――。
　――――――――――――。
　――――――――。
　――――シュボォッ……。
レイア「上出来だ。我があるじよ」
そっと目を開いた私は自分の手のひらの上で揺れる小さな小さな『火』を見た。
儚げで、淡い光。
優しく、暖かい光。

ヒルダ「――――綺麗……」

気が付くとヒルダが私の手のひらを見つめ、嘆息していた。

ジャンヌ「――――ああ、優しい炎だよ」

ジャンヌも思わずそう呟いていた。

レイア「――――それが、魔法だ。我があるじよ」

これが、魔法。そう、これが魔法なのだ。

レイアがして見せた時とはまた違った感動が全身を駆け巡る。

が、しかし、同時に私は恐怖してしまった。

リィゲル「――――なんと、なんと純粋な力だろうか」

と。

レイア「善も悪もない。美も醜もない。欲も野心も慈愛も慈悲もない。そう、魔法とは純粋な力。ただ力であり続けるもの。それが世界の本質でもある」

リィゲル「これほど純粋な力を、この湧きあがる衝動を抑えなければならないのですね、レイア」

私は全身を這う衝動を全力で抑え込み、レイアに尋ねる。

ヒルダ&ジャンヌ「「リィゲル……」」

レイア「そうだ。それが出来なければおぬしは世界に呑みこまれ、存在さえも呑みこまれる」

そして、と続けるレイア。

レイア「――――そして、我があるじよ。その手のひらの炎を見よ」

リィゲル「炎を――――」

レイア「そう。その手のひらに灯る小さな炎を決して忘れてはいけない。世界という純粋な力を抑える枷（かせ）と言うものはその炎のようにいともたやすく消えてしまう。だから決して忘れてはいけない。心に灯った小さな明かりを決して絶やしてはいけない。それが心にある限り、おぬしはおぬしとしてあり続けることができるのだからな」

リィゲル「分かった。ありがとう、肝に銘じておくよ」

レイア「感謝などには及ばない。あとはリィゲル、おぬし次第なのだから」

リィゲル「そうだね、まったくもってその通りだ。でも、それにしても――――」

そう、それにしても――――。

リィゲル「――――それにしても、魔法とは、かくも美しいものだな……」

レイア「……御意に、我があるじよ……」

自分に課せられた使命が一体何なのか？

やはり今の私にはまだ分からない。

だがしかし、それ以前に私はまだまだ未熟だ。

この頼りない炎のように。

だが、いくらたやすく消えてしまうような弱い炎であったとしても、私はそれを決して絶やさない。

未だ見えぬ未来への希望を絶やすわけにはいかない。

彼女たちと歩むためにも、絶やしてはならない。

そう、このすぐそばを流れる川のように。

第七話　「灯火」（後書き）

ど、どうでしたか？
自分的には設定懲りすぎちゃったかもとか反省してたりしてなかったり……。
でも、ようやくらしくなってきたっていうか、ようやくリィゲルくんのチートが開花し始めるというかw
あ、そうだ。今回初めてランポスとか特定のモンスターの名前が出てきたけど、モンスターハンターから使うのはモンスターの名前とか見た目ぐらいで、ドンドルマとかジャンボ村とかは一切関係ありません。じつはワールドマップを書きつつあったりしちゃうwwwというわけで二元ぎりぎりを低空飛行しているわたしのＦＦであります^^
あっ、ＦＦってファンタジア・フロンティアの略ねw
でも紛らわしい><
ま、いっか。
作者の近況報告といたしましては、なんと私、去年の１２月２４日、マクロスＦのクリスマスライブ行って参りました！！
もーさいっこうに楽しくて思わず叫んじゃったり大変恥ずかしいこともしてしまいました><
でも、みんなしてたからいいよねw
さてさて作者はええ加減もう眠くて眠くて仕方がないのであとがきはこれくらいにしてマイベッドにダイブしたいと思いマス><
最後に、いつもこのような拙い文章をご愛読してありがとうございます。
いつの間にかお気に入り登録数も徐々に増えてきて、作者は嬉しすぎてコサックダンスを踊ってしまいました。実は本当に踊れちゃいます。
いよいよ新年、そして定期テストがあるのでまた更新が遅くなると

思われますがどうぞ、ご容赦してください><

というわけで、次回、乞うご期待！！

各種設定（逐次更新予定）（前書き）

とりあえず前言ってたワールドマップとか、その他いろいろ設定やらをここで披露しまっす＾＾

各種設定（逐次更新予定）

ワールドマップ

>i16420|1953<

?：レーヴェンノヴァ帝国
?：アルヴィダ連邦
?：ノイシュバンシュタイン王国
?：マリアタ群集国連合
?：シィルヴェニア大公国
?：アレクサンドリア共和国
?：ロイエンブルグ皇国
?：倭国
?：ロマーナ教皇国

ジャンヌの武器
左が「コンバット・マチェット」で、右が「ヘヴィー・カトラス」

>i16429|1953<

リィゲルの武器
サブ：「ブラックバトルディフェンスナイフ」

>i16460|1953<

第八話　「藍の狩人」（前書き）

二話続けて短かくなってしまいましたが、予定的にはちょうどいい感じです＾＾
いつも読んでくださっている皆様、元気ですか？　どうも、獅子竹　鋸ですw
第八話「藍の狩人」でありますが、これ、著作権引っかかってませんよね？
厳密に言えばかかってるけど、かかってませんよね？大事なことなので二回聞きました。
ま、いっかw
それでは、ご賞味あれ＾＾

第八話　「藍の狩人」

＞i１６４５０｜１９５３＜

川に沿って小型肉食鳥竜（ランポス）を探すことおよそ３０分、密林特有の蒸し暑さにもいい加減辟易とし始めたところであった。

ジャンヌ「――――えーと、ひぃ、ふぅ、みぃ、よぉ、いつ、むぅ、なな、やぁ……、１３匹か。群れの頭数としちゃ多い方だけど、多いだけだね」

川の中流付近、カーブしたところのかなり開けた河原で、ようやく私たちは彼らと遭遇した。

１３匹の小型肉食鳥竜（ランポス）はギャア　ギャアと鳴きつつ私たちを包囲するように展開し、こちらを窺うようなそぶりを見せている。私たちの実力を計りかねているのか、それとも単に獲物を吟味しているのかは分からないが、手を出してこない。

なるほど、前の世界で雑滅した小型肉食恐竜に似ている。違うところは青い鱗、黄色い嘴、赤いとさかぐらいだろうか。あえて言うなら色彩があでやかすぎるといったところだろう。まあ、恐竜すら見たことのない私にとっては多少好奇心がわく程度のものだった。

この世界に来て一番最初に見たものがレイアだったのだから仕方がないと言えば仕方がない。大抵のことにはもう驚かない気がする。

ヒルダ「初めてのクエストですから、油断しないようにしましょう」

と注意を喚起しつつ矢をつがえるヒルダに続き、私たちも遅まきながら武器を構える。

私たちの動きがきっかけになってか、あるいは痺れを切らしたかでまず4匹のランポスが突進してくる。するとーーーー、

ガャィインッ。

その内の1匹は走り出した瞬間に頭部に矢が刺さり絶命していた。

リィゲル「上手いな。額の真中じゃないか」

動く標的に対しものの見事に眉間を射抜くその技量に、自然と言葉が口からこぼれる。

ヒルダ「フフっ、それ程でもありません。ありがとうございます」

謙遜しながらも、ほめられた事に対し嬉しそうに微笑むヒルダ。

しかし、たかだか1匹殺られただけでは奴らは止まらなかった。

ギャ、ギャァアッ。

私の4メートル前方から、1匹が飛びかかってくる。その優れた

脚力にものを言わせた跳躍は、確かに一瞬で間合いを詰めることができる。が、ただそれだけのことだ。

リィゲル「フンッッッ！！」

身体を左に少しずらし、右下から左上へとハルバートを振り切る。

生々しい手ごたえと共に、胴体から切り離されたランポスの頭部がごとりと落ちる。

戦斧とは思えないその切れ味。日本刀と比べてみても遜色ない完成度に私は密かに感服する。

そして後ろを振り返り、残りの2匹の末路を見た。

1匹はジャンヌによって心臓と首を刺し貫かれ、もう1匹はレイアによって頭部を握り潰されていた。

ジャンヌの剣技にも舌を巻くものがあるが、何より竜族の化身であるレイアの身体能力には脱帽するより他がない。今更ながら、私はこのような強者と刃を交えたのだと少しばかり身震いする。

恐怖からではなく、戦人（いくさびと）であるが故の武者震いである。

レイア「ハッ、竜族とは言え所詮は末席。数いようがいまいが我らの敵足りえんな。脆すぎる」

ジャンヌ「だね。アタイもこの程度じゃ物足りないよ」

敵の脆弱さを憐れみ、嘲笑をたたえる2人。その挑発的な雰囲気を察したのか、残りの9匹は一斉に鳴き声を張りはげ、攻勢に打っ

て出た。

しかし、再びヒルダのコンポジット・ボウ《強化弓》が甲高い音で唸った。

放たれた矢は3本、けれども聞こえた発射音は1回こっきり。

そして3本の矢は、まるで吸い込まれていくかのごとく、3匹それぞれの眉間を捉えていた。

あと6匹――――。

当初の戦力の半分以下である。さしものランポスたちも、幾分か冷静さを取り戻し、自分たちがいかに不利な状況下にあるかを悟る。退くべきか退かざるべきか。逡巡の間、彼らは動きを止めてしまった。

まさにその立ち止ったその場所が、彼らにとっての死に場所となったのは言うまでもない。

私とレイアとジャンヌは、弾かれたように敵に肉薄した。私たちの急接近にとっさの迎撃を試みようとするランポスたち。しかし、間に合わない。いや、間に合わせはしない。

ジャンヌ「ドリャァァアッ！！！！」

リィゲル「フゥッッ！！！」

レイア「ッッッ！」

ジャンヌの剣閃が、私の斬撃が、レイアの拳が躍る。

生き物から肉塊へと変貌を遂げるランポスたち。

藍の狩人はより強い狩人に狩られたのだった。

目標数以上の討伐を終えた私たちは、ジャンヌに倣い、殺したランポスたちから損傷の少ない、またはない部位を探して剥ぎ取っていた。

命を奪うからには利用できるだけ利用する。

これは、モンスターを殺す際の心構えらしい。生き物を殺す。ならばむやみやたらにただ殺すのではなく、自分が生きるために代わりに死んでくれたモンスターに感謝の意を以て、その素材を使えということなのだそうだ。

この考えに、私は深い理解を示す。

それは食事をする際の習慣に起因する。

“いただきます”“ごちそうさまでした”

己の糧になってくれた命たちに。その料理を私の代わりにふるまってくれた人に。私の代わりにその命を殺して食材にしてくれた人

に……。

犠牲の上に生きる我々が本来持つべき心構え。私はそう思っている。思っているからこそ、先程のハンターたちのスタンスに共感したのである。

ジャンヌ「――――いいかい、こいつらは比較的腐るのが早いんだ。その上ここは密林。１つでも多く素材を取るんだよ」

閑話休題。

とにかく今は素材の採取に専念する。

リィゲル「ふぅ、やはり初めてやることはなかなかうまくいかないものだな」

だくだくと流れる顔の汗を、私は手の甲で拭う。

ここが河原でよかったと、まざまざと痛感させられる。

私は何とか剥ぎ取ったランポスの皮を、麻で出来た袋に押し込み――――。

イイィィィンッ。

――――森の中より飛来してきた矢を、手刀ではたき落した。

第九話　「冷笑の男」（前書き）

★祝★　ＰＶ２４，０００　ユニーク３，２００　達成＼（●＾ｏ＾●）ノシ

本当に、まじで嬉しいっすよ。みんな；；　こんなにたくさんの人に読んでもらえるなんて……吾輩、感動ぉぉぉぉぉぉぉ！！！！

何千何万もの作品の中で、あなた方の目にとまったのは、まさに奇跡としか言いようがありません。本当に、ありがとうございます（＾Ｏ＾）／

わたくしも、みなさんのご期待に添えるように、若輩者ながら、精進させていただきます＞＜

リィゲルとそして彼を支えるいろんなキャラクターと共に、この作品を、このファンタジア・フロンティア！という世界を完成へと近づけていきたいと思います＾＾

ということで、第九話、とくとご賞味あれｗｗ

第九話　「冷笑の男」

＞ｉ１６４５０―１９５３＜

カラカラン……――――――――――。

乾いた音を立てて足元に転がった短い矢。弓で撃つには適さないその矢は、紛れもなく、ボウガンのそれであった。

「リィゲルっ！」

未知の敵からの襲来に、ヒルダは右手に細剣（レイピア）、左手にコンポジット・ボウ《合成弓》を構えて私の背に付く。レイアとジャンヌも互いに背を預けて得物を構えた。

そして、私たちの防備が固まった途端、待っていたとばかりに四方八方から矢が襲ってきた。

迎撃開始。

私はハルバートを左右交互に素早く回転させ、一本、また一本と確実に矢をはたき落していった。中にはボウ・ガンだけでなく、長弓の長い矢も混じっているようだった。ある矢は半ばで折れ、ある矢は矢じりが取れた状態で足元に落ちていく。

一本たりとも私に届くことはない。いな、ヒルダには当てさせない。と言ってもヒルダの正面から襲い来る矢はどうしてもヒルダ自

信に防いでもらうより他はなかった。そして、レイアやジャンヌについても不安がよぎったが、全てが杞憂だった。

2本の長短の矢が、ヒルダの前に躍り出る。

やはり弓よりも威力を持ったボウ・ガンの矢が、先にヒルダに到達しようと迫る。

が――――。

「――――甘いっ……！」

ヒルダはそれを細剣を左肩から右へ向かって剣腹で叩きつけるように落とし、間をおかず飛来してきた長い矢を細剣を持った右手で掴み、膝立ちの姿勢でコンポジット・ボウを水平にして逆に弓を放ってきた何者かに射返した。ギャッ、という声が二つ聞こえた。

そう、ヒルダの放った矢は一人目を貫通し、その後ろの二人目にも命中していたのである。

二人の射手を潰したことによって出来た隙をヒルダは逃さない。

すぐさま腰の矢筒から矢を抜き取り、森の中に放っていく。

攻守の逆転。

レイア、ジャンヌは流れの変化を読み取り、リィゲルに加わってヒルダの援護に徹する。

ヒルダが矢を放つごとに断末魔が上がり、それに伴ってこちらに

飛んでくる矢が減っていく。

そして、最後の一本が、レイアの顎にとらえられ、バキンッという音を立てて崩れ去った。

これで、敵性勢力の遠距離攻撃力はそがれた。

現に、矢の応酬が止んだ途端静かになった。

私たち４人は、臨戦態勢のまま、見えざる敵の次なる行動を待つ。

緊張からか蒸し暑さからか、汗が体中を伝う。聞こえるのは不変の河のせせらぎと、密林に潜む動植物のささやきのみ。終わりのない我慢比べに、ハルバートのグリップが手汗で濡れる。そしてついに痺れを切らしたジャンヌが森へ向かって叫ぶ。

「――――いつまでそうやって隠れてるつもりだい？　この臆病者どもめっ！　用があるならさっさと出ておいでっ！！！」

その挑発は、そのまま虚空に消えていくと思いきや、男のしゃがれた嘲るような笑い声で返された。

「――――フフフ、フハハハハハッ。ハッハッハハハハ……――――――――」

「……誰だ！？……」

私たちが見つめる先、その森の入り口から出てきたのは、左腕のない一人の壮年の男だった。歳はおよそ５０代、狩りあげられた白髪、肌の色は白人、見える限りのおびただしい傷跡……。

この男は、紛れもなく手練れ《てだれ》だ！！

「――――全く、俺たちの仕事場に邪魔者が紛れこんだと思って試してみりゃ、とんだ獲物だな……。これほどの手合いは随分と久しい……。殺しがいのある奴らだ。何者（なにもん）だ、お前ら」

男は不敵な笑みを顔に張り付けたまま、こちらに近づいてくる。一見すると武装は背中に背負っている両手剣と腰に差したナイフだけだが、構えてすらいないと言うのに隙がなかった。

「――――名を聞きたければ先に名乗るのがならいだろう」

ぶしつけな態度が頭に来たのか、レイアがくってかかる。

その一瞬、男の口調と眼力が変わった。

「黙れこのメス竜が、竜風情が人間様の言葉しゃべってんじゃねぇよ」

「――――なんっ、だとっっっっ……！！」

「っっっっっ！！！！」

正体を見破られた驚きと、プライドを激しく傷つけられた憤りからレイアは押し殺したような怒気を放ったが、私たちは声にならない驚きをしていた。

「はっ、お前らのその顔はどうして分かったってところか……。だろうな。自分では完全に隠し切れているつもりなんだろうけどよ。

そのくっせぇ臭いは俺みてえな奴にはごまかせねぇんだよ、メス竜……」

男は若干口調を戻しつつ、一方的にさらに続けた。

「ふんっ、まあいい。お前らに免じて特別に名乗ってやるとしよう。元アルヴィダ連邦軍の猛将　スティリヴィリーニ・ポポーヴィッチだ」

「っ！　ポポーヴィッチ、だって……！？」

男の――――ポポーヴィッチという言葉を聞いた途端、ジャンヌは思い当たる節があるらしく驚愕している。私はこの男の情報を知るため、確認をとる。

「……知っているのか？」

ジャンヌ「……ああ。――――――――ここ数年、この国で活動している、盗賊・暗殺ギルドの元締め――殺戮の冷笑――ポポーヴィッチ将軍……だよ」

ぽつぽつと説明するジャンヌ。その表情から真意を汲み取ることはできなかったが、少なくとも、今のジャンヌの心は大いに乱れているに違いない。心なしか彼女の剣先が震えているようにも見えた。

ポポーヴィッチ「――――ハハハハ、……そうも呼ばれるな。だが今はそんなことはどうでもいい。死に逝く者が今更何を知ろうが何をしてようが、俺には一切関係ないからな。というわけだ、諸君――――」

そう言ってパチンッと指を鳴らしたポポーヴィッチ。すると森の中からぞろぞろと彼の部下とおぼしき者たちが、ぱっと見まわしただけでも２００人以上は出てきた。全員が全員例にもれず、各々武装している。長剣、短剣、曲刀、槍、短槍、手斧、戦斧、ダガー、槌などなど……。正直この人数を相手取るのは分が悪い。

彼らは少しずつ、けれども確実に私達との距離を縮めてきていた。

しかしながら、その包囲網はあと２ｍと言ったところで止まった。

「――――本来ならば俺はお前たちを始末して終わりだが、……ふむ、まだ殺してしまうのは惜しい。実に惜しい。……お前たちはまだ力を蓄えるのだろう？　こんなところで、観客も舞台もないこんな場所で平らげちまうのは実にもったいない。そうは思わないか？」

舐めるような視線が私たちを見まわす。本能的とも言える悪寒が全身を走るが、何とかこらえることが出来た。

「……一体どうするつもりだ」

「まあまあそう邪険にするな。実際、俺のここでの仕事はもう終わってる。それに、顔は見られたが、……それくらい不確定要素があった方が面白いだろう？　だから、今回は俺たちは何もせずにさっさと移動する。追ってくるなら別だがな」

「……」

「……ふっ、そうだよなぁ。今のお前らじゃ、俺たち全員をぶっ殺すことなんざできねぇよなぁ……」

「……くっ！……」

「……と、言うわけだ。あばよ。せいぜい次は俺たちに出くわさないように神様にでも祈っとくんだな……」

そう言って引き揚げていく彼らを、私はただ睨むことしかできない。あの男に勝てる自信がない。今の私には、斬れない……。

「――――リィゲル、おいリィゲル！いいのかい？あいつらを追わなくて！？」

「……リィゲル……」

ヒルダとジャンヌが私を見つめて指示を乞うてくる。しかし私は――――。

「……みな、武器を下げてくれ。ソロンに戻ろう……」

撤退を示した……。

「……分かりました」

しぶしぶと言った感じがありながら、ヒルダも思うところがあるのか私の言う事を聞いてくれた。それに対してジャンヌはやはり激昂する。

「んなっ！おいリィゲル、あんたそれでいいのかい！？あんな極悪人を見逃して！？あんたはそれでも――――」

「――――やめろ、ジャンヌ。一番悔しいのはリィゲルだ。敵う相手じゃないんだよ。今の段階ではな。それはおぬしも分かってはいるのだろう？ジャンヌ」

「っっっ！分かってるよ！確かにあの男はとてつもなく強い。だけど――――」

「――――おぬしがあのポポーヴィッチとかいう男について、そこまでこだわる理由はあえて聞かない。我とて、竜族としての誇りと尊厳を踏みにじられたのだ。出来るものなら、今すぐにでも彼奴（きやつ）の四肢を引きちぎってしまいたいくらいだ。だがな、今の我でも、あれに勝てる自信がないのだよ」

「……」

「……」

「……」

そう、あの男――――スティリヴィリーニ・ポポーヴィッチは分かる範囲だけでも、かなり強い。流石にレイアすら敵うかどうか分からないというのは予想外だったが、つまるところ、今の私たちでは太刀打ち出来ないのである。

あの化け物のような威圧感。本能的な恐怖を覚えざるを得なかった。

そして私たちは、悔しさに打ちひしがれながら、ソロンへの帰途へ着くのだった。

第九話　「冷笑の男」（後書き）

どうでしたでしょうか？

上には上がいる的な感じを出したかったのですが、ちょっと無理があったかな？とか思ってたりもしてますw

このポポーヴィッチですが、正直自分でもこいつのこと意味不明だったり……＞＜

まあ、なんとか書きあげた感が前面に出てきちゃった気がするなぁ。

ってなわけで、第九話「冷笑の男」でした＾＾

ご意見・ご感想・ご指摘、いつでもどしどしお送りください＞＜

なるべくパソコンはチェックしますので！

あと、リオレイアさん感想ありがとうございました＾＾この場を借りてもう一度お礼をばさせていただきますですw

ではみなさんそろそろ私は睡魔に首を狩られそうなので、マイベッドに緊急回避したいと思うんだw

さ～て次回も、サ～ビスサ～ビスゥッww

なんちって、次回も乞うご期待！！！

第十話　「傷跡～前篇～」（前書き）

おはようございます・こんにちは・こんばんは

獅子竹　鋸です＾＾

いつもご愛読ありがとうございます＾＾

お待たせいたしました。みなさまから頂いた感想などを参考にしつつ、推敲の毎日です。読者の一人からの提案で、台詞の前に名前を付けるのをやめることにしますw

他の話でも少しずつ消していくのでご報告を。

それから、ここで改めて明言しておきますが、レイアが死ぬのはリィゲルが死んだときのみです＞＜　それと、リィゲルに取り込まれたのは心臓と力の一部だけですので、そこんとこよろしくポw

と言うわけで前書きもほどほどに、第十話、ご賞味あれ！！

第十話　「傷跡〜前篇〜」

＞i１６４５０｜１９５３＜

ポポーヴィッチらに見逃され、屈辱を胸にソロンへと戻った私たちを待っていたのは、破壊と略奪の痕だった。何者かによって襲撃を受けたソロン内部の城下町は、主に大通りを中心に被害が広がっていた。襲撃した者たちは既にいなかったが、火の手はまだいたるところで上がっており、火消したちの怒声や一般市民たちの悲鳴が聞こえる。見れば城の一部からも煙が上がっていた。

そこらじゅうに転がる死体や瓦礫、鼻を突く腐敗臭と硝煙の臭い。かつての西部戦線が、脳裏に浮かぶ。

「――――ポポーヴィッチ、か……」

ほぼ間違いなく襲撃者のリーダーであろう男の名が、レイアの口からぽろりと洩れた。

私たちの前に突如として現れ、霧のように去っていたあの戦闘集団。今思い返せば、彼らの武器や防具は汚れていた気がする。

「――こんな、ひどいことを……。何故……？」

「……これが、ポポーヴィッチたち≪あいつら≫さ。目的なんて

ない。ただ目についたから、そこにあったから。目的のための手段じゃない。手段のために――殺戮と略奪のために襲う……。ただそれだけさ」

「ジャンヌ、貴女もしかして……」

「――――よくある話さ。まだ五歳になったばかりの女の子が、とある町に住んでた。だけどある日、その町は盗賊たちの襲撃を受けた。戦える大人の男たちは立ち向かったけど、歯が立たなくてみんな殺された。老人や病人も皆殺し。女たちはみんな慰み者にされた後やっぱり皆殺し。だけど、その女の子だけ、隠し部屋に隠れて、家族を、町のみんなを見殺しにして、生き残った……」

「「「……」」」

とうとうと語るジャンヌに私たちは、かけるべき言葉を失う。その出来事が、なす術のなかった少女にどんな傷を与えたかを理解できてしまったから。

「……また、アタイは生き残った。また、守れなかった……。あまつさえ、あいつらを実質見逃した……」

「ジャンヌ、でもあの時の私たちではとても――――」

「――――分かってるさ！アタイの実力が足りなかった事なんて！それでもねぇ、アタイはあいつらを――いや、ポポーヴィッチを殺すために生きてきたんだ！それなのに、それなのにアタイは一矢報いるどころか、何もできず、そして、見逃された！」

見かねたヒルダが何とか慰めようと言葉を絞り出したが、ついに

感情のたがが外れたジャンヌは顔を両手で覆い、しゃがみ込んでしまう。今まで見てきたジャンヌとはかけ離れたその姿は、幼き日に全てを失った少女のそれであった。

トラウマを抱え、抗い、強く生きようとすればするほど、挫折するのはたやすい。

「……一体、何のために力をつけてきたんだろうね。結局何も出来ないんじゃ、意味無いのにね」

「……とりあえず、貸家に戻ろう。一旦落ち着いて考えよう。これからどうするのか、何をするのか……」

「……分かった……」

ジャンヌの小さな頷きに、私とヒルダは腰の砕けた彼女に肩を貸し、歩き始めた。

「――――それにしても、妙だな。ここは城塞都市――――つまりそう簡単に軍勢を内部に侵入させるなど出来ないし、それに衛視や駐屯軍がいたはずだ。そうは思わぬか、あるじよ」

「……言われてみれば、確かにそうだ。私たちが遭遇した戦闘集団は二百ないし二百五十人。移動を考えるとそれ以上の人数はありえない。ましてやここは城塞都市。城門を突破できるわけがない……」

「……つまり、あらかじめ長期間にわたって内部に戦力を集結させていたということでしょうか？」

「……だろうね。いかにもあいつのやりそうなことだ」

「やはりそれしかないか。だが、そこまでしてこの街を襲うメリットがあるとは思えない。むしろリスクが高すぎる。襲うならもっと簡単で確実な村や町の方が狙い目だろうに」

考えれば考えるほど浮上してくる不可解な点に、どこか煙≪けむ≫に巻かれたような錯覚を覚える。

ポポーヴィッチたちが仮に長期的な計画を立ててソロンを攻撃したとして、成功しさえすれば確かに入りは多いが、帰ってリスクの方が圧倒的に高い。まず、人が多いことからどうしても一人二人は面がわれること、脱出する前に駐屯軍に包囲される可能性が高いことなどなど……。

すると、前方から私としては数少ない顔見知りの一人が駆けてきた。

「――っ！リィゲルさんにヒルダさんじゃないですか！お二人とも御無事だったんですね。よかった。それにお連れの方も……。って、ジャンヌ姉さんじゃないか！」

私の二番目の武器≪セカンドハンド≫であるハルバートを紹介してくれたフリッツ少年である。

「フリッツくんか、君の方こそ、無事だったんだね。君のいた店が途中で燃えていたからもしやと思ってしまったが、どうやらやつらに出くわさなかったみたいだね。それにしても、ジャンヌとは知り合いなのかい？」

「……知り合いどころか、隣近所のガキだよ」

「まあ、そんなところですね。ジャンヌ姉さんにはいつも世話になってるんですよ。ともかく、僕はたまたま休日で家にいたから助かったんです。気が付いたらかなりの被害が出てて、正直、何も出来ませんでした」

“何も出来なかった”

フリッツにとっては何気ない一言であったのだろうが、私たちにとっては糾弾そのものだった。

「……そうだったのか。まあ、命あってのもの種というからね。気落ちする必要はないよ」

自分たちをごまかすように、当たり障りのない言葉で返す。

「そう言ってもらえると助かります。少し、気が晴れました。ありがとうございます」

「いや、いいんだ。本当は私たちの言えたことじゃないんだからね」

「？どういう意味です？」

「……気にしないでくれるとこちらも助かる。それより、君はこれからどうするんだい？店はあんな状態だし、仕事を見つけないといけないんだろう？」

口を滑らせた私は、さりげなく話題を変える。

実際、フリッツが働いていた「ソロン・ブレイズ」は全焼だったので、私は彼が新しい仕事はどうするのかと心配だったのもあった。

「はあ、まだ考えていませんでした。そう言えば今僕は無職になっちゃったんですね」

私に気付かされた事実にため息をつくフリッツ。若干１６歳に、失業のショックは少々きついものがあるだろう。ましてや自分の好きな仕事だったのだ。落ち込まざるを得ないに違いない。

「……君はまだ若いから、すぐに見つかるさ」

「……多分、しばらくは街の修復を手伝うことになるでしょうから、職探しはそれからですね」

帰ってくる言葉も何処か暗い。

「そうか、ならいい。それじゃあ、また」

「はい。こちらこそ失礼します」

気になりながらも、互いに挨拶を交わしてフリッツと別れた私たちは、ジャンヌの貸家へと歩いた。

第十話　「傷跡～前篇～」（後書き）

いやぁ、なんと言うか、我ながらテンプレすぎるかなと。ジャンヌの過去。

で、前篇なんで後半もありまっす。誰がでるかな？

駄文ですが、末永くお付き合いくださいませ＾＾

ご意見・ご感想・ご指摘、いつでもどしどしお送りください＞＜

なるべくパソコンはチェックしますので！

それと、再び感想をいただいたリオレイアさんと、Ｂｏｏｋｗｏｒｍさんとカメ・Ａ・さんにこの場を借りてお礼を。

それではそろそろお別れの時間ですのｗ

次回も、乞うご期待！！

第十一話　「傷跡～後篇～」（前書き）

お待たせいたしました。作者の獅子竹　鋸です。

今回の回は、おふざけ一切なしの本気です。

それでは、第十一話　「傷跡～後篇～」をご覧ください。

第十一話　「傷跡～後篇～」

＞i１６４５０―１９５３＜

城塞都市ソロンは、テレネ山脈の山岳部から平原へと広がる扇状地に位置しており、テレネ川の本流と二つの分流――計３本の川を利用して築かれており、平民区および商業区となっている外縁部が二つ、その内側にある中流家庭および貴族街と、最奥部のデュアメル・フォン・ヴァンフリート伯爵の居城で構成されている。

各区域は分流と水路で分離されており、移動する際は区域間に渡された跳ね橋を使用している。本来ならば、有事の際は伯爵城のすぐ隣に駐屯している守備軍が跳ね橋を渡って駆け付けるのだが、ポポーヴィッチらは駐屯地から渡された跳ね橋を全てと、水門の一部を爆破。そのうえで駐屯地から最も離れた外縁部の商業区を奇襲したのである。生き残った衛視から聞いた話だが、商人の格好をした者や、農夫みたいな者たちが突然武器を手に襲ってきたそうだ。あらかじめ、恐らく１カ月くらい前から戦力を少しずつ侵入させていたのだろう。全くもって、手際が良過ぎる。

守備軍が商業区の警備軍の援軍に駆け付けた頃には時すでに遅し。大通りのと２ブロック奥の商店は軒並み壊滅ないし半壊。平民区の一部にも被害が及んでいる。幸い木造の家屋はほとんどないため、火災はほどなくして鎮火されたが、警備軍と一般人の死傷者が多く、守備軍と警備軍の生き残りはその事後処理と討伐軍の編成に追われているらしい。

「――――現状の把握としては、これくらいで十分だろう。後は、今後どうするかだな……」

腕を組み、壁にもたれかかりながらレイアが呟く。この部屋の雰囲気から語尾が小さくなったのはレイアらしくなかったが、それは私としても同じ心境なので何も言わなかった。特にジャンヌの落ち込み方がひどく、隣の寝室ベッドにもぐりこみ、毛布をひっかぶったまま一言も発していない。しばらくは、一人にさせておこうと思う。

「あるじよ、どうする？」

翡翠の双眸がこちらを向く。私は板張りの床を見つめたまま答える。

「……私は、この街がある程度復興するまで滞在しようと思う」

「追わないのか？」

試すように尋ねるのは、彼女なりの意思の現れである。

「ああ」

「私はリィゲルに賛成です。今の私たちでは、残念ながら敵う敵ではありませんからね……」

「――――そう、“今の私たち”ではな」

間違いなく、今の私たちでは勝てない。それは分かり切っている。悔しくて仕方がないのが本音だが、

しゃにむに立ち向かったところで犬死するのは目に見えている。

「だからしばらくは『自分』と戦って、いつ奴に出くわしてもいいようにしなければならない。今はまだ、屈辱に甘んじて精進するしかないと思う」

「同感だ。我も上位の竜族であることを誇示し、おごっていたきらいがあった。上には上がいることを、随分と忘れていたよ」

「私も、初めて自分自身の未熟さを痛感しました」

「そうだな、私たちはまだスタート地点にいるに過ぎない。物語はまだ始まって間もない。今の段階で強敵という者に遭遇したのは、不本意極まりないが僥倖と言えるのかもしれない」

「そうですね。ですが彼は『魂を冒涜せし者』――――、いつか必ず、報いを受けさせましょう」

「ああ、我も奴の頭をかみ砕いてやらねば気が済まん」

挫折をばねにかえる。それは非常に難しいことだが、一度こうと決めてしまえば挫折は自らの礎となる。

同じ挫折を抱えた者は、支えあう事が出来る。

だから、後は――――。

「――――君も、ドアの傍で歯噛みするだけなんてことはないだろう、ジャンヌ」

――――最も深刻な挫折（トラウマ）に直面しているであろうジャンヌだけである。

一瞬、ドアの向こうで息をのむ気配がして、諦めたよう声が返ってきた。

「……なんだ、気付いてたのかい。アンタも人が悪いね、リィゲル……」

ドア越しの声は弱弱しく、儚い。

「……辛いか？」

「……辛くないなんてのは嘘になる。アタイ自体、よくわかんないよ……。さっきまで、考えるのを放棄してたんだからね……。ふっ……、情けないだろ？こんななりしてさ……」

「……」

自虐的に感情を吐露するジャンヌ。あまりに痛々しく、あまりに切ない。

「……アタイは、あの町で、全てを失った。ちょっと怖かったパパも、貧乏性のママも、意地悪なお兄ちゃんも、狭っ苦しかった家も……。ぜぇーんぶ、なくなっちゃった……。残ったのは、アタイだけ。持ってたのはつぎはぎだらけの汚い服と、身体だけ……。町が襲われた次の日、どうやって嗅ぎつけてきたか分からないけど、奴隷商人がハイエナみたいにやってきて、アタイを連れていった……。檻に入れられて、最低限の食事を与えられるだけの毎日。たまにどっかの貴族か富豪がやってきては、いやらしい目で吟味し

ていくんだ……。確か、初めて買われたのは8歳の時だったかな……？買われたその日に、アタイはキレイじゃなくなった……。1週間に、4回ぐらいだったと思う。その変態にとって、アタイはただの玩具（おもちゃ）だった。愛とか、そんな高尚なもんなんて、これっぽっちもありゃしなかったさ……。買われてから半年……、そいつを殺して逃げるまで半年かかった。閉じ込められてた部屋で、食事用のナイフで必死に独学で殺す方法を身に付けてたんだよ。とにかく、アタイはそいつを殺して、金目の物を取って、逃げた……。行く当てなんてなかったけど、お金がなくなるまで逃げ続けた。そようやって、また何もなくなって、行き着いたのがここ、ソロンだったんだ……。ここの前の大家がお人好しのじいさんでさ、商業区の入り口で行き倒れてたアタイを拾って、住まわせてくれたんだ。……でも、生きてきた経緯が経緯だったから、殺伐とした、ガキだった……。なのにそのじいさん、ただ微笑むばっかでさ……。1か月は口利かなかったんだよ、アタイは……。それでも、じいさんはアタイを育ててくれたんだ。おかげで、今みたいに少しは人間らしくなった。……ハンターになったのは、じいさんに恩返しがしたかったのと、あの男への復讐のためだった……。必死で止められたけど、アタイは聞きやしなかったよ。『復讐なんてそんな哀しい生き方をするな』、って言われてね……。初めて大喧嘩したよ。そんでアタイはとうとうじいさんとこを飛び出して、ハンターになって、仕事をひたすらこなしていった。騙されそうになったり、たまたまパーティくんだ男に犯されそうになったりしたけど、必死に、生きた……。街にはその間帰らなかったんだ。たくさんお金をためて、じいさんを唸らせてやろうって……。5年と少し経って、アタイはやっと、ここに戻ってきた。ただひたすらお金をためるために過ごしたから、最低限の生活しか出来なかったけど、じいさんのためだったから全然苦じゃなかった。だから、結構な額が貯まってて、アタイは、ワクワクしてた。じいさん、どんな顔をするかな？とか、飛び上がって喜ぶだろうな、とかね……。だけど、悠々と帰ってき

たアタイを待ってたのは、じいさんの遺族の息子さんと、1枚の手紙だけだった……。アタイが、戻ってくる1か月前に、心臓を患ってポックリ死んだんだって……。アタイは、呆然としたよ。だって、そうだろ？……それから、自分自信を呪ったよ。呪って、泣いて、ひたすらじいさんの墓の前ですがりつくようにして謝ったんだ……。ゴメンなさい、ゴメンなさい、ゴメンなさい、ってね……。息子さんが、アタイを迎えに来るまで、1日中（いちんち）そうしてた。それからこの貸家に戻って、じいさんのことを聞いたよ。息子さんは最期の1週間に駆け付けたらしいんだけど、じいさん、口を開けば二言目にはアタイのことばっか話してたんだって……。そりゃあもう色々さ。恥ずかしくなるようなものもあったよ。だけど、一度も、アタイを責めるようなことは言わなかったって……。手紙にもね……、ただ一言、『勝手に逝って、すまん』としか、なかった……。また、泣いたよ。近所の人が心配して様子を見に来るほどね。泣いて泣いて泣いて、涙が枯れても後悔はおさまんなかった……。むしろ泣くごとに嗚咽が込み上げてきてさ、一晩中、墓の前でそうしてたように謝り続けたんだ。そしてしばらくは、部屋から出なかったし、喪失感から食事も喉を通らなかった。筋肉はどんどん落ちていって、食べても吐いたりおなかを壊したりして、さらにみるみる痩せていってさ。最後は倒れて医者んところに連れて行かれたよ。二日間、生死を彷徨ったんだって。意識が戻った途端、息子さんにこっぴどく怒られたよ、そりゃあもう本気で……。だけど、そのあとそっと抱きしめてくれたんだ。父親が子供にそうするようにね。温かかったのを、よく覚えてる……。そん時気付いたんだ。アタイにもまだ家族と言えるもんがあるんだってね。だからアタイは、退院した日から身体を鍛え直した。あの世に隠居しちまったじいさんにも恥ずかしくないように、っつってもまたハンターだけど、最後まで自分を通そうと思って、続けた。息子さん――――今でもここの大家だけど――――アタイは親父って呼ぶようになった。……まあ、そう呼べって言われたんだけどね。温かい場所なんだよ、

ここは……。けれどね、それでもやっぱりアタイは復讐を忘れなかった。それがもとでじいさんを悲しませたってわかってたけれども、それでもアタイは復讐を諦めることはなかった。今度は答えのないジレンマに苦しむようになったのさ。じいさんの想いとアタイの想い……。両方を天秤にかけることなんて、アタイにはできない。するわけにはいかない。あいつを殺すまでアタイは救われない。だけど、アタイはあいつを殺して本当に救われるのかなぁ……？ねぇ……、リィゲル……、教えてくれよ……。アタイは、アタイはどうするべきなの？何のために生きればいいの？ねぇ、教えてよ……。アタイはっ……、どうすればっ……」

「……っっ！！」

言葉にならない。

言葉が出てこない。

何を言うべきなのか？

何をしてあげるべきなのか？

ドアの向こうで、ただただ押し殺したように泣いているジャンヌを、どう慰めるべきなのか？

「……リィゲル……、入って」

泣きはらして、すっかり枯れた声が私の名を呼ぶ。

私は結局何も言えず、黙って寝室へと入った。

「……」

「……」

そこにいたのは、深紅の鎧を纏い、俊迅の双剣を携えた女戦士ではなかった。

そこにいたのは、いつもにやにや笑い、豪放磊落な言葉を放つ女剣士ではなかった。

――――そこにいたのは、目を紅く腫らし、髪を振り乱した、一人の“女”だった――――

「……ワタシを、抱いてくれる……？」

「……」

“女”は私のてのひらを取り、ベッドへと誘う。

抗う事を許されず、なすがままに引き込まれる私。

その夜私は、そうすることでしか、とある一人の“女”を慰めることが出来なかった。

まだ夜は、更けない…………――――――――――――――――――――――――。

第十一話　「傷跡～後篇～」（後書き）

実は私、この回を書きながら、思わず涙ぐんでしまいました。

自分で書いた物語に感情移入して泣くなんていうのは、初めての体験です。

今でさえ、手が震えております。

皆様はいかがでしたでしょうか？

次回も、読んでいただけると幸いです。

第一話　「まだ見ぬ新天地」（前書き）

★☆★４２，０００アクセス　＆　５，３００ユニークアクセス達成★☆★

どうもっ、獅子竹　鋸ですっ！お待たせしました！そしていつもご愛読ありがとうございます＾＾

ついにお気に入り登録数も６２人に増え、ようやく物語も進み始めましたｗ

多数の感想などもいただいており、吾輩、感動ぉぉぉ！！！

とまあ、面白くないぼけはおいといて　／（ｰ ｰ）／？ポイッ

いよいよ第二章スタートです＞＜

それではご賞味あれｗｗ

第一話　「まだ見ぬ新天地」

＞i１６４５０｜１９５３＜

ポポーヴィッチの一件から、早くも一か月が経とうとしている。

窓から差す強烈な日差しと、蒸し暑さに否応なく起こされるここの生活にもだいぶ慣れていた。ことに非常に高い気温に関しては、北アフリカ戦線に従軍していた経験が少なからず役に立ったのだろうと思われる。

むくりと身体を起こした私は、石壁に立て掛けていた宵闇とハルバートを手に取り、静かに部屋を出る。昨日のクエストの疲れからか、他の皆はまだ床に就いている。

一か月の間、私たちはとにかく自らの力量を上げることに邁進(まいしん)した。連日ハンターズギルドに向かい、ハンターランクから受けられるぎりぎりのクエストを片っ端から受けたり、めぼしいクエストがない時はひたすら素振りやら筋力トレーニング、特に私の場合は魔法の修練にも粉骨砕身した。

魔法に関して言えば、慣れるまでが少々骨折りだったと言える。もともと非現実の象徴であった魔法が、いきなり現実になってしまったことへの違和感等が原因だったのだろう。慣れてしまえば、受け入れてしまえば実にたやすく発動出来るようになった。未だに莫大な力の行使の欲求との葛藤があるが、一定以上の魔法を発動しな

い限りは、自制が効くレベルまで持ってこれた。また、クエストなどの実戦でも、何度か使ううちに段々と身体になじんでいき、武器による攻撃の合間にとっさに使用することも出来るようになっていた。昨日のクエストにおいては特にこの魔法が重宝した。

「大型甲殻種『ダイミョウザザミ』の討伐」

これがクエストの内容だったのだが、依頼書と現地において、情報の誤りがあった。一体と記載されていた標的のダイミョウザザミは、実は三体だったのである。当初、引き返すことも検討していたが、途中立ち寄った漁村で甚大な被害が確認されたため、三体全てを討伐することにしたのである。この時の私たちにとって、ダイミョウザザミは大した脅威ではなかったのだが、いかんせん、三体同時にと言うのは少々分が悪かった。その原因は主に、各自の武器によるところが大きい。何故なら、徒手空拳で戦うレイア以外、私もヒルダもジャンヌも戦闘スタイルが斬撃または刺突だからである。外骨格動物である甲殻種の持つ甲殻は総じて非常に硬い。ただでさえ大型モンスターであるダイミョウザザミの甲殻がそれ以上に堅牢であるのは言うまでもない。関節や節の隙間を攻撃するのが主な対処法であったが、数が数なだけに、なかなかままならないものがあった。

そこで陽の目を見たのが魔法である。

ほとんど咄嗟に近い思い付きだった。事前知識としてダイミョウザザミが水棲生物と知っていた私は、時たま耳に入ってくる雷鳴から、魔法で雷を当てればいいのではないかと思い、修練の成果を確認するのもあって試してみたのである。

時間帯は正午、頭上には今にもスコールを降らせんと滞空する黒

々とした雨雲。午前中の高気温によって熱せられた地面から発生した上昇気流に伴う積乱雲の形成。激しい昇降による荷電現象によって生じた静電気は、人間など簡単に焼き殺せるほどの威力を持っている。上手くいけばダイミョウザザミを足止め、あわよくば絶命させられるかもしれない。しかしもちろんリスクもあった。

そう、ヒルダたちもしくは自分に落とさない保証が何処にもないのである。それでも幸いだったのは、相手が三体とも巨体だったことだ。そうなればある程度の誘導の甘さは看過できる。だがしかしそうであってもやはり難しいのは難しい。五分五分の賭けに私は”ｂｅｔ”した。

『眼下に見下ろすは鎧袖　其に降り注ぐは轟音の刃　乱れ狂う雷神の剣≪トゥルエノ・トレンテ≫！！』

ヒカッ――――ズズズゥゥゥゥゥゥゥンンンン！！！！！

光と音の洪水が世界を包み込む。

鼻を刺す肉が焦げた臭いに目を開けた私たちが最初に見たのは、黒煙と事切れた二体のダイミョウザザミだった。

結果として、落雷を免れたのは一体だけで、それも間もなく討伐となった。しかし、丸焦げになったダイミョウザザミの死体の損傷は激しく、部位を剥ぎ取れなかっただけでなく、その日は比較的高威力の魔法詠唱によるフィード・バックに苛≪さいな≫まれることになってしまった。

討伐証拠と落雷を免れた一体から取れるだけ剥ぎ取った部位を手に帰還したのが昨日。

そして、今日に至る――――。

活気の戻ったソロンの大通りの喧騒を遠くに聞きながら、貸家の外壁伝いに階段を降り、裏口のちょっと開けた場所に出る。貸家と貸家の間にあるこのスペースは、日光が建物に遮られていて、日当たりより幾分か涼しい。

私は鞘に収まったままの宵闇を右手に、ハルバートを左手に持ち替え、“構え”を取った。

日本刀の神髄は以前にも述べたように、一対一、特に居合にある。がしかし、多対一においてはその真価は発揮されず、細かい小手先の技術は無用の長物となってしまう。対してハルバートは長いリーチと遠心力にモノを言わせた威力が売りであり、多対一でも一対一でも重宝される武器である。だが、それでもやはり一対一の戦闘では俊敏さが若干犠牲になってしまい、後手に回りがちになるのである。

そこで考案したのが、宵闇を近接、ハルバートを中距離と割り切ったこの“構え”である。

宵闇の間合いの外の敵に対してはハルバートで牽制もしくは迎撃、そして間合いに入ってきた場合は宵闇で応戦する。技一つ一つの威力が落ちてしまう等の欠点もあるが、そこは手数で対処しようと考えている。それともう一つ――――。

（――――この構えは、奴≪ポポーヴィッチ≫にしか使えない……）

――――見た者を魅了し、心を狂わせる咎人の剣“宵闇”――――

私がこの世界に来てからこのかた、宵闇を抜いたのはレイアと対峙した時のみ。ポポーヴィッチとの遭遇においてはまったく動けなかった。だからこそ、今のところではあるが、ポポーヴィッチ以外に宵闇を抜くつもりはない。

「――ハァァッッッ！ヤァッッ！ハッッッ！――――」

ハルバートを振り下ろし、左に身体を回転させて宵闇で横一線。手首を返して右下から斜めに切り上げ、ハルバートを前方に突きだす。引き戻しつつ、宵闇フェンシングのように連続で突き。兜割りの次にハルバート横薙ぎが間を埋める……。

こうやって何度も試し、吟味し、型を作る。かつてこのような戦い方をした戦士がいたと聞いた事はあったが、話に聞くだけで完全に我流である。と言っても、所々に私の体得している剣術と槍術を織り交ぜているので、全てがオリジナルという訳ではないのだが、それでもまだまだ完成には至りそうにない。

「――――ふぅ……。まだまだ、修練が必要のようだな」

「朝から精が出ますね、リィゲル」

滴る汗を布でぬぐい、一息付いているところで、背後から声がした。

「ああ、ヒルダか、おはよう」

「おはようございます、リィゲル」

「よく眠れたかい？だいぶ疲れていただろう？」

「はい、それはもうぐっすり。でも、疲れていたのはむしろ貴方のほうではないのですか？」

「違うと言えば嘘になるな。だが、そうも言ってられんさ」

「息抜きの一つや二つ、あっても罰は当たりませんよ」

「ふっ、かもしれないな。ここ一カ月はずっと詰めてたからな」

「そうですよ。もう少し自分の身体をいたわってあげて下さい」

「ご忠告、痛みいる」

「もうすぐ、朝食の用意が出来ますから、井戸で顔を洗ってから部屋に戻ってきて下さいね」

「なるほど、それで呼びに来たのか」

「ええ、レイアとジャンヌももう起きていますよ」

「分かった。すぐに行く」

「はい、では」

部屋に戻って行くヒルダを見送った後、すぐに私は身体を刺すように冷たい井戸水で顔を洗い、朝食へと向かった。

「おはようレイア、ジャンヌ。待たせたか？」

先んじてテーブルに座っていたレイアとジャンヌに挨拶をしつつ、少々待たせてしまったかと思い、反省気味に尋ねる。

「おはようリィゲル、今出来たとこだからそんなに待ってないよ」

「おはよう、我があるじよ。お主よりも後に起きたのは今日が初めてだな。かたじけない」

それなら良かったと、私も木椅子に腰を下ろす。そして、一瞬だけ、さりげなくジャンヌを窺った。

今ではもう――と言うよりあの夜以来、とある一人の“女”はすっかり居なくなってしまったかのように思えるが、私は時々、ジャンヌの中に彼女の影を見る。そう、まだ私はジャンヌの心を完全には救えていないのである。それでもジャンヌは何でもないように装っているが、私はそのそぶりに気付く度に悔しさに駆られていた。何より、自分の無力さに……。

「――？どうかしたのかい、リィゲル。難しい顔して」

ふと、ジャンヌに声をかけられ、自分の眉間に力が入っていたのに気付き、何事もなかったかのように微笑みながら返答する。

「いや、なんでもない。朝食前に鍛錬に力を入れすぎて、少し疲

れただけだよ」

「なんだ、そうだったのかい。それだったら早速食べようじゃないさ」

「そうですね、冷めてしまう前に食べましょう。それでは――――」

「「「「いただきます」」」」

――――時間はかかるかもしれないが、いつか必ずジャンヌの心に根付く闇を取りはらってみせる。ただ、今は、目の前のヒルダの作ってくれた朝食を、皆で囲んで、なるべく楽しく食べようと思った。

翌々日、十分に体力を回復した私たちは、また今までのようにハンターズギルドを訪れていた。

昼にもかかわらず、一階の酒場フロアが盛況なのは相変わらずで、今日も普段通りであった。ジョッキや料理をトレーに乗せてかいがいしく動き回るウェイトレス、頬を赤らめて既に出来上がった客、ジョッキを掲げて声高々と歌うハンター、酔い潰れてテーブルに突っ伏す中年の商人などなど……。ここではいつものお馴染の光景である。

だが、あの襲撃において、ここもまた戦場となっていた。

しかし、ここハンターズギルドの被害は比較的少なかった。もちろんポポーヴィッチらはここも潰してしまおうと攻撃対象にしていたのだが、その時たまたま居合わせたハンターたちが連携して攻防戦を繰り広げたのである。双方死傷者が出たが、ハンターズギルドは所々に補修を必要とする程度で済んだのである。

そのおかげで、ハンターズギルドは可及的速やかに街の復興や通常のクエスト、及び依頼を円滑にハンターたちに斡旋し、処理することができたのである。国や各領地では取り扱われない仕事、または治安維持に貢献しているハンターズギルドの機能停止を防いだ彼らの功績は大きく、称賛に値する。

だが、その彼らが街を守れなかったと後悔していたのは、また、別の話である。

私たちはテーブルの合間を抜け、通い慣れたクエスト受注カウンターに歩を進めた。カウンターに近付くにつれ、もはや顔馴染となった受付嬢の姿が目に入る。

「ようこそハンターズギルドへ、いつもご苦労様です。今日もいくつか新しい依頼が来てますよ」

「ありがとう、早速見せてくれないか？」

「こちらになります。受注されるクエストが決まり次第、また声をかけて下さい」

挨拶もそこそこに、依頼の綴られた四枚の羊皮紙を受け取る。自然と手の内にある依頼書にヒルダたち三人の視線が集まる。

「さて、今日はどんなのがあるんだろうな」

まず一枚目：「小型甲殻種『ヤオザミ』の討伐」

「……これは、歯ごたえがなさ過ぎるな」

「そうだね。ついこの間ダイミョウザザミを討伐したばっかだしね」

次に二枚目：「鳥竜種『ドスランポス』の討伐」

「つがいの討伐ですか」

「ああ、そのようだが……、これもいまいちだな。次を見せてくれ、あるじよ」

……三枚目：「大型鳥竜種『イャンクック』の討伐」

「こいつも、初めてでつがいを討伐したね。確か」

「そうだな……。まあ、一応候補か。最後の一枚によるな」

……四枚目：「マッケンゼン侯爵領までの護衛依頼」

「「「「「……」」」」」

四枚目にしてようやく現れたいまだ経験のない依頼に全員の目がとまる。

「……これは、初めてのタイプだな」

「護衛依頼ねぇ、アタイは一回だけ受けたことがあるけど、他領に移動するような長距離じゃなかったよ」

「何はともあれ、読んでみようではないか」

「ええ、そうですね。詳しく読んでみましょう」

～『マッケンゼン侯爵領までの護衛依頼』～

依頼人：宝石商「ジャン・ドヴァロア・ディ・ティエポロ」
依頼内容：道中の護衛
受注人数：五人まで
報酬：一人につき銀判貨2枚と銀貨4枚（道中の食事は保障）
移動経路：港町「テレネスハーフェン」⇒オットリーリエンフェルト公爵領　港町「シュヴェッペンベルグスハーフェン」⇒マッケンゼン侯爵領　港町「トルスドルフ」まで（途中海路を使用）
達成条件：依頼人が「トルスドルフ」の宿場「薔薇のつぼみ」に無事到着するまで　達成後は現地解散

「――――悪くないね」

一番に読み終わったジャンヌが一人ごちる。

「ああ、私もそう思う。それに、全く別の地方に行けるのが魅力的だと思う。食事や通行税は保障してくれるのは好条件だし、旅慣

れた商人と同行すれば長距離移動の経験を習得出来る。なにより、見聞を広める絶好の機会だ」

「報酬の方も、今のご時世からしたら妥当だな。途中海路なのが少々気に食わんが、まあ我慢出来ん事もない。我はあるじの決定に従う」

「依頼人の方がどのような方なのかが少し気になります。一度面会をしてからの方がいいですね。私も、リィゲルに任せます」

おのおの意見を出し合う私たち。はたから見れば井戸端会議のようなものだろう。私も依頼人に会ってから決めようと考えていたので、ヒルダに頷きをもってかえす。だが一つ、気になる事項が――――。

「――――この街を出て行くことになるが、それでもいいのか、ジャンヌ？」

あの日、ジャンヌの口から語られた話からは、この街への並々ならない愛着が窺える。ジャンヌが“人間”に戻ることのできたこの街――ソロンはジャンヌにとってかけがえのない“帰る場所”である。私本意の安易な考えで決定してよいはずがないのである。

が、すぐにそれが杞憂だと知る。

「……確かに、ここは、アタイにとって紛れもなく帰る場所さ。血は繋がってないけど、親父だっているし。ボロイ貸家だけど、家もある。離れたくないって思いはあるにはあるけど、それでもアタイはアンタに付いて行くって決めたんだ。最後まで、ね。だから、アタイは大丈夫だよ。こんなことでくよくよしてたんじゃ、あっち

にいるジジイにひっぱたかれちまう。リィゲルの思う通りで構わないよ」

「……分かった。それじゃあ、まず依頼人に面会してみよう。行く行かないはそれからだな」

「ええ」

「ああ」

「御意」

三人全員の可否を確かめ、私は依頼書を持って再びカウンターの前に立った。

「決まりましたか？」

「ああ、一応この護衛依頼にしようと思うんだが、その前に一つ確認したい事がある」

「何でしょう？」

「依頼人に一度面会をさせてもらえないだろうか？」

「面会、ですか？」

「ああ、私たちとしては、依頼人の人となりをよく把握しておきたいんだ。このクエストを受注するなら、長旅の相手になるわけだしね」

「なるほど」

「駄目だろうか？」

「いいえ、大丈夫ですよ。クエストの受注の際に、ハンターもしくは依頼人からの要請があった場合、一応面接という形になりますが、顔合わせが出来るシステムになってますから」

「それは良かった」

「そうなりますと、明日の昼ごろまたこちらに来ていただくことになりますが、よろしいですか？」

「ああ、宜しく頼む」

「承りました。それでは、また明日お越し下さい」

「ありがとう、それじゃあまた明日」

これでほぼこのクエストを受けることが決まった。後は明日の面会如何≪いかん≫である。私たちはその後、まだ見ぬ旅路に思いをはせながら、貸家へと帰ったのであった。

『――――見つかりましたか？』

『ええ、彼らなら大丈夫です』

『やっとですね』

『そうですね、なかなか他のハンターの方で慎重な人はいらっしゃいませんから』

『確かに』

『ですが、今のところ当ハンターズギルドと致しましては、彼ら以外に適任はいませんし、自信をもってお勧めさせて頂きますよ』

『そうですか。それは楽しみですね』

『必ずやご期待に添えましょう、ティエポロ殿』

『ええ、私もそう思っていますよ、ギルド長』

第一話　「まだ見ぬ新天地」（後書き）

はい、またなんか新しいキャラクター来ましたよｗ

と言っても、こいつは急遽考えた奴とかじゃなくて、ちゃんとプロットに沿った奴なんで、ご安心をｗ

そういえば、素材屋のおっちゃんはどうしてるんでしょう？あいつ大丈夫かなあｗｗｗ

いつかまた出てくるよ、多分。

というわけで第二章　第一話でした。いかがだったでしょう？

色々とまた書き足したりすると思います。多分　Ｍａｙｂｅ．．．．．．ｗ

ご意見・ご感想・お叱りどしどしご応募くださいｗ

挿絵とか、描いてくれたりしないかなあ　（ワクワク　ドキドキ

あ、そう言えばリィゲル君の魔法なんかも募集しちゃいます＾＾

元ネタ（分かりにくいやつら）

・リィゲルの新しい戦法：ソウルキャリバー？（ＰＳ３）のヒルダというキャラクターの戦い方ですｗ

・咎人の剣：ヴァルキリープロファイル　シリーズに登場する最強武器が元ネタですが、ゲームのような設定とはちがいますｗ

……今んとこ分かりにくいのってこのくらいかなぁ？他に気になったのがありましたら感想にてご質問ください＾＾

さて、もう朝の５時か……。光陰矢のごとし。時とは無情だな……。

な～んちゃっっっってぇぇいｗｗｗｗ

あ、実際５時ですよ。あはははは……。

はい、眠いです。そろそろあとがきもこの程度でしめさせていただきたく＞＜

私は今から“布団”《エターナル・サンクチュアリ》にｉｎします

それでは、次回も乞うご期待！！！

アデューｗ

第二話　「旅とは発つ前が最も――――」（前書き）

大っっっっっっっっっっっっっっっ変長らくお待たせしてしまいました＞（｜　｜）＜

急な引越しが決まった二月末。

「えっ？　自分の荷物ってこんなになにあったの！？」

と驚いてしまうくらい荷物がありました　笑

それから学校の編入試験だとか色々イロイロ　エトセトラ・・・・・。

ようやくこちらの生活にも慣れ、インターネットの契約が完了した今日、やっとこさ更新と相成りました　；；

この約二ヶ月間の間待ってくださった皆様方には深い陳謝と心よりの感謝を捧げちゃいますｗ

本当に、お待たせいたしました。第二章第二話です！

それでは、とくとご賞味あれっ！！

第二話　「旅とは発つ前が最も――――」

＞i１６４５０｜１９５３＜

「――初めまして。しがない宝石商をやっております、ジャン・ドヴァロア・ディ・ティエポロです。どうぞ良しなに」

「こちらこそ初めまして。ハンターズギルド所属の、リィーゲルト・フォン・ハインリッヒです。わざわざギルドまでご足労いただき、恐縮です」

ギルドが用意してくれた小奇麗な部屋で待っていたのは、眼鏡をかけ、笑みをちらつかせるらしくない男だった。服装こそ旅人や商人のそれではあるが、薄茶色の髪は癖が強いのかぼさぼさ。どちらかと言えば研究室にいる学者のような風体である。

私は入ってきたドアを閉め、椅子には座らず、彼の正面に向かうような位置に立った。すると彼は組んでいた足を入れ替え、コーヒーを片手に答えた。

「どうかお気遣いなく。本来なら私の方から面接の場を用意すべきでしたものを、失念しておりました」

失念という彼の言葉に、私は違和感を感じ、少し間を置いて返す。

「失念？それは違うでしょう。ミスター・ティエポロ、あなたは

わざと面接をせずにいた」

「どうしてそのように？」

ティエポロ氏の目が、商人の目に変わる。掴みは抑えられたようだ。

「依頼内容が好条件だからですよ。『一人につき銀判貨２枚と銀貨４枚（道中の食事と通行税は保障）』こんなに条件の良い仕事は滅多にない。それなのに依頼書には面接のことは一切書かれていなかった。わざと依頼書には記載せず、自分に面会を求めてきたハンター、あるいはギルドからの推薦のあったハンターにのみ仕事を頼むつもりだったのでは？」

おいしい仕事程、慎重な者はより慎重に選ぶ。こと、護衛依頼ならば依頼主との顔合わせは必須。面接をしないというのであれば、その依頼主は素人かそれとも単なるお人好しか、あるいは訳ありである。

商人の目が、人懐っこい目に変わった。

「はは、このくらいは簡単でしたね。いや失敬、見くびっていましたよ。どうぞ座って下さい」

「それでは失礼します。長距離の旅ですからね、俄然慎重にもなるでしょう」

「ええ、レーヴェンノヴァ帝国とはよく行ったり来たりしてるんですが、この国――ノイシュバンシュタイン王国内で長い距離を行くのは初めてですよ」

「とすると、普段とは違う別口の、それとも一攫千金の大仕事ですか？」

「おっと、鋭いなぁ。そうですねぇ、そこはご想像にお任せしますよ、と言ったら、肯定することになるしなぁ。一本取られましたね。ま、でも、私の直感によると君は信用の置ける人物らしいから別にいいんですけどね。結論を言うと、私はむしろ君たちを雇いたい。君たちのように誠実に仕事をこなしてくれる実力があって、あまり知られていない”新米≪ルーキー≫”をね」

「なるほど、プロを雇うとかえって悪目立ちしますからね。その点私たちは、”まだハンターになって一カ月しか経っていないちょっと腕の立つ新米”という事になっている」

「その通り。過去の経歴が全くの不明なのが気になるけど、君たちを雇う利点の方が大きいからこの際どうでもいい。それに、女性は大歓迎だ。特に、女神のような麗しい女性はね。華の無い旅ほど情趣に掛けるものはありませんよ」

「やはり、ギルドの方からの紹介ですか？よく調べられている」

「ええ、君たちのご活躍ぶりはギルド長から窺っております故、どうぞ、宜しくお願いしますよ」

「こちらこそ、宜しくお願いします。ミスター・ティエポロ」

「ジャン、で結構ですよ、フォン・ハインリッヒ殿」

「私のこともリィゲルと呼んで下さい。フォンの称号は形だけの

ものですから」

「おや、てっきり私は貴族の方だとばかり思っていましたが？」

「名前ばかりですよ。まあ、没落貴族とでも考えて頂ければびっくりくると思いますよ」

「なるほど、没落貴族ですか……。じゃ、そういう事にしておきましょう。では、出発や経路などについて詳しくお話し致します。あなたのパーティー以外には他言無用でお願いしますよ」

「当然です。安心して下さい」

「ではまず最初に――――――――――」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――

「――――――――――っていうのが、今回の依頼の全容だ。質問はあるかい？」

ジャンとの打ち合わせの内容を一通り説明し終えた私は、時間が経って冷めてしまったコーヒーを一口飲んだ。ちなみに、若干の腹の探り合いがあったことはあえて教えていない。最初は伝えるべきかと考えたのだが、ここで話して警戒してしまっては依頼をこなす

うえで支障をきたす恐れがあると憂慮したからである。

「出発は明日。テレネスハーフェンまではあいつの馬車で四日、後は船で一カ月。分かりやすくっていいねぇ」

「そうだな。道中これと言った難所も特にはない。さしあたっては、海路で海賊がどれほど取り締まられているかが留意すべき点だろう」

「海賊、か……。そうだね、出るとしたら海賊かマーピープルだろうさ」

「マーピープル？」

聞いたことのない単語に、私はオウム返しで尋ね返した。

「俗に言う半魚人ってやつさ。知能は低いけど、上半身は人間、下半身は魚。そのまんまだろ？」

「こちらの世界にはそのような種族もいるのか……」

「ああ、ついでに言えばアクアマリナーってのもいる。こいつらは見た目は人間だけど水かきが付いてたり、耳の後ろがえらになってたりしてるんだ。水辺に特化した人間って思ってくれりゃいいよ。知能はアタイらと同じぐらいだから」

「我ら竜の一族にも、眷族として竜人族と龍人≪りゅうど≫族というのがいる。ここ数十年はめっきり見なくなったがな。竜人族は、どちらかと言えばリザードマンと呼称される方が多い。表面は竜のように鱗で覆われているから見かけたらすぐ分かる。知能は、我ら

よりは低いが言語を解することぐらいはできる。龍人族は、私も会ったことは一度しかないが、なみなみならぬ知識と頭脳を持った誇り高い一族だ。外見は耳が鋭利にとがっているくらいで人の子と大して変わらん。まず見かけることはあるまいて……」

「まあとにかく、この世界には人間に酷似した種族がたくさん存在してるんだ。他の奴らの説明はまた追々な」

遠くを見るような眼になったレイアをわきに置き、とりあえず話を区切るジャンヌ。私もそれに便乗し、次に進む。

「分かった、心に留めおこう。説明ありがとう、また宜しく頼む。とにかく、明日は出発だから、今日中に準備を済ましてしまおう」

出発が明日と言うのは急なことだったが、幸い打ち合わせはすぐに終わり、ヒルダ達への説明もさらりと済んだので、昼もまだ中頃なのである。引っ越しをするわけではないいので、さほど旅支度に時間はかからない。

「そうですね。では私は荷作りをしますね」

「それならアタイも手伝うよ」

早速、ヒルダとジャンヌが名乗りを挙げた。ならば――――、

「分かった、支度は二人に任せる。私は少し、商業区に行って来る」

「何か用事があるんですか？」

「用事という程の事でもないさ」

首をかしげるヒルダに少し気恥ずかしさを覚えつつも、けむに巻くように返事を返す。すると、

「なら我も途中まで同行しよう」

とレイアが不意に申し出てきた。

「レイア？」

「右に同じく野暮用だ。別に構わないだろう、途中までなら」

「あ、ああ、構わない。それじゃあ行こうか」

「「いってらっしゃい」」

「「行ってくる（よ）」」

その時の私の笑みは、我ながら少しぎこちなかった気がする。

午後の生ぬるい日差しの照りつける、人ごみの絶えない煩雑とし

た商業区の一角。とある装飾品工房の前に、私とレイアの姿があった。

「――――で、あるじにも男としての甲斐性があったのは前から気付いていたとして、何をくれるのだろうな」

何とも形容しがたい敗北感を噛み締めながら、私はレイアにはかなわないなと諦めていた。

「前から、レイアたちには感謝の気持ちを示したいと思って度々ここに足を運んでいた。なるべく悟られないように行動してたんだが、いつから気付いてたんだ？」

「お主がどの工房にしようかと迷っているあたりだろうか……」

「一番最初っからじゃないか……」

「ヒルダとジャンヌにはまだ言ってないぞ」

「そこで言われていたら私は世界一間抜けな男になっていたよ」

「違いないな、ははははは」

笑いごとで男のメンツは吹き飛んでしまうのであるから恐ろしいものである。

「さて、久々に思う存分からかってやれたし、我はもう行く」

「完成品を見て行かないのか？」

「ここで見て欲しいのか？」

「ぜひとも後のお楽しみにしていて欲しい」

「我とて、そこまで無粋なことはせん。少しばかり寄り道して帰る。では、せいぜい楽しみにしているからな」

「ああ、また後で」

最後に不敵な笑顔を残していったレイアを見送ると、私は早速工房のドアをくぐった。

「いらっしゃい。やあなんだ、アンチャンかい。例のモンは出来てるよ。ちょっと待ってな」

「ありがとうございます。間に合ってよかった」

数週間前から顔なじみになっているここの店主は、自分で作った作品しか売らないという根っからの職人で歯に衣着せぬ物言いから勘違いされることもしばしばあるが、本人自体は非常に気さくな人柄であるため、この工房は知る人ぞ知る名工房らしい。

制作する数々の装飾品は全てワンオフ品で、同じデザインの物は二つと作らないというこだわり。そして、その緻密で繊細なデザインは職人としての腕の良さを自ずと物語っていた。

しばらくすると、小さな箱を三つほど抱えた店主が、ニヤニヤしながらカウンターに戻ってきた。

「三つともアンチャンの希望に沿うように作ったぜ。確認してく

んな」

「では、拝見……。これはっ……」

「どうだい？あまりの素晴らしさに感動するだろう」

「ええ、思っていた以上です！本当に素晴らしい！！貴方には感謝してもしきれませんよ」

「よせやい、照れるじゃねえか。おれぁ、あたりめーの仕事をやっただけだぜ。さ、後がつかえてるんだ。ちゃっちゃとゼニ置いていきな」

「お幾らでしょうか？」

「おれぁ素直に喜んでくれる客が好きでよぅ。アンチャンなら銀判貨６枚でいいぜ」

「そんなに安くていいんですか！？」

「おうよ。二言はねぇ」

「しかしそれでは――――」

「じゃかぁしい！つべこべ言わずに銀判貨６枚置いてきゃいいんだよ！」

「それならば、分かりました。では、６枚、受け取って下さい」

「毎度ありっ。またいつかこいよ。いつでも注文受けてやっから

な」

「ええ、いつか必ず来ますよ。それでは、ありがとうございました」

こうしてヒルダたち三人への密かな（一名例外）プレゼントを手に入れた私は、途中大型ナイフと小型ナイフを一本ずつ新調したのち、帰路に就いた。

――――――――その頃レイアは……、裏通りのとある武器屋にいた。

「はてさて、よくもまあこんなカビ臭い店があったものだな」

その武器屋は店と呼んでいいのかすら怪しい、ともすればあの素材屋より酷い店だった。もともと民家だった建物を利用しているためか店内は狭く、その上掃除が行き届いておらず、ほこりっぽかった。

「それにしても、置いてあるものがまるでたらめだな」

そう、この武器屋が寂れてしまっている原因が扱っている武器の珍妙さである。いくつか例をあげるならば、ショテル、ジャマダハル、刺叉≪さすまた≫、多発火箭≪タハツカセン≫、アチコ、手裏剣、チャクラム、アイアン・シールド・ピストル、アダガ、ウォーハンマー・ピストル、キャット・オブ・ナインテイル、鎖鎌、多節

鞭、鉄扇などなど……。
常人にはとてもじゃないが使いたがらない、何処に出しても恥ずかしくない変態武器の数々。
だが、
「……」
しかし、
「……いい店ではないか？」
レイアは変態趣味だった。
「なんと、なんと素晴らしいラインナップだろうか……。私はこのようなファンタスティックな店は未だかつてルックしたことがない」
キャラが崩壊するほど、ツボだった。
すると、店の奥から全身を黒いローブで覆った謎の人物が出て来た。
「……新たなる同志の息吹を感じる」
「もしや、お主がこの店の主か？」
「左様、私がこのスペシャルでエレガントな店のマスターだ――――」

この邂逅は、まさに奇跡としか言いようがなかった…………。

――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

「ただいま」

「お帰りなさい」

「お帰りー」

「ん、レイアはいないのか？」

「レイア、ですか……」

「ああ……、レイアなら向こうの部屋で、ごっつい籠手を見つめながらニヤニヤしてるよ…………」

「……すまない、思考が追いつかない」

「うん、アタイらも混乱してるから安心しな……」

「……とりあえず、呼んでこよう」

……約（厄）２０分後……

何とかレイアをこちらの世界に連れ帰った私は、その後すぐに三人をリビングに呼んだ。

何事かと期待交じりの視線を送ってくる三人（何度も言うが一人は例外）。私はその視線に答えつつ、切り出した。

「実は今日まで秘密にしていたことがあったんだが、君たち三人に渡したいものがあるんだ」

そう言って私は、三人の前にそれぞれ違うリボンのついた箱を差し出した。そして、次に開けて中身を見るように促した。

「……まぁっ！」

「……うわぁ……」

「……これは、見事だな……」

三つの箱の中に入っていたのは、三本の白銀の華だった。

ヒルダには鈴蘭をかたどった清純なるサファイアのイヤリングを。

レイアには桜をかたどった誇り高きピンクサファイアのブローチを。

ジャンヌには薔薇をかたどった情熱のルビーのネックレスを……。

それぞれの個性を象徴する三本の華が、今、三人の手のひらの上にあった。

「……リィゲル、今私とても嬉しいわ。ありがとう！」

「……想いの詰まったものとは、やはりいいものだな……。感謝するぞ、リィゲル」

「……こんな綺麗なもん貰ったのは生まれて初めてだよ。ありがとう、リィゲル……」

三者三様の感謝の言葉に、年甲斐もなく顔が熱くなっているのが自分でも分かった。

「喜んでもらえたようで、私も嬉しい。それは私からのみなへの感謝の気持ちと思って受け取って欲しい。自分で言うと厚かましいが、これからの旅路のお守りとなってくれるよう、切に願うよ」

「大切に使わせて頂きますね、リィゲル」

一番に耳につけてみせたヒルダが、胸の前で手を合わせて微笑む。私も自然と笑みがこぼれた。

恥ずかしい話しながら、女性への贈り物と言うのは生まれてこのかた２６年で初めてである。貰う事は何度かあったのだが、どれもみな断っていた。特別な感情も持たずに、むやみに物をやり取りす

るのは私自身嫌いだったからである。

そのように思っていたからこそなお、本当に贈り物をあげたいと願っていた相手に受け取ってもらうこと、また喜んでくれることがこれほどに嬉しいものだと知った。

我も続けとばかりに、レイアとジャンヌがブローチとネックレスをそれぞれ身に着けてみせた。

「どうだ、似合っているだろうか？」

「アタイはどうだい、リィゲル？」

「みんな、良く似合ってるよ」

褒め言葉も、ごく自然に出てきた。

「さて、さすがに明日出発だからアルコールは駄目だけど、出発前夜の宴でもしないか？」

「そうですね、せっかくですからちょっと贅沢してみましょうか」

「お、いいねぇ。どこの店にする？」

「じゃあ、大通りの――――」

――――その後、私たちは大通りのレストランでささやかなそれでいてちょっと贅沢なディナーを楽しみ、これからの旅の英気を養ったのである。

第二話　「旅とは発つ前が最も――――」（後書き）

さてさて、今回も読んでくださってありがとうございました＾＾

もうちょっとリィゲルとジャンのやり取りを深いものにしたかったんですが、正直、これが私の限界・・・・・・。改めて未熟だなあと反省する今日の獅子竹でありんすw

そろそろ、おまけを書こうかなって思ってちゃったりします。

新企画　「ナゼなにレイアたん！！（仮）」

みたいなのやります。絶対やります。でもいつやるかは不明です　笑

では、そろそろ獅子竹はベッドという恋人が恋しくなってきたので、安眠したいと思いますのコトヨ。

あ、レイアの謎の籠手はここでは何なのか言わないのでお楽しみに＾＾

それでは、次回乞う御期待！！

第二章　第三話　「いい日旅立ちのち雨」（前書き）

こんにちは、もしくはこんばんわ＾＾

☆ＰＶ６２，０００　☆ユニークアクセス８，０００　突破！！！！

もう感謝の涙で前が見えない　笑

毎度お馴染み　獅子竹　鋸　です＼（＇ｖ＇）／

で、第三話ですが、いつも以上に短くなってしまったｏｒｚ

それでは第三章　第三話、とくとご賞味あれ！！

第二章　第三話　「いい日旅立ちのち雨」

>i16450|1953<

――――チチチチ、チッチッ、チチチチチチ――――

「……ん、もう朝か……」

いつもより少し早い時間帯。私はまどろみの余韻に浸りつつ、窓枠にとまっている小鳥たちのさえずりに耳を傾けた。

窓の外には朝もやの白い世界が広がり、東からはぼんやりとした優しい光が昇る。

こうしてまた、南半球の朝が始まる。

朝もやが晴れるより前に身支度を整えた私たちは、この貸家の大家――ジャンヌの”親父さん”に挨拶をし、ジャンとの待ち合わせ場所である商業区の正門へと向かった。

ジャンヌも、親父さんも泣かなかった。

朝もやが晴れると、今度は強烈な日差しが無数に並ぶ白壁へと降りそそぐ。

熱がこもらないように建設された、この街特有の涼しい風が大通りを抜ける。

仕事の旅とはいえ、ふつふつと沸いてくる軽やかな気分に嘘はつけない。

浮ついていると言えなくもなかった。

まもなく正門に差し掛かると、二頭立ての一般的にはキャラバンの部類に入る中型馬車と、その傍らに眼鏡の商人を見つけた。

ふと轅（ながえ）の先に大人しくじっとしている栗毛色の二頭の馬に視線をずらす。その二頭はおそらくばん馬、あるいは重馬の一種で、体格が良く、サラブレットよりもふた周りほど筋肉が発達していた。その図体に似合わず毛並みは非常に滑らかで、手入れが良く行き届いている事がわかった。

御者台で読書に興じていたジャンは、挨拶のため馬車から降りる。

「おはようございます、リィゲルさん。時間通りですね」

「おはようございます。これからの旅路、よろしくお願いします。こちらの皆が、私のパーティです」

「ブリュンヒルデです。よろしくお願いします」
「レイアだ、道中の安全は我らが保障しよう」
「ジャンヌだよ、ヨロシク」
三人それぞれに簡単な自己紹介を済ませる。
「これはこれはご丁寧に。こちらこそ、よろしくお願いしますよ。いやぁ、それにしても皆さんお美しくいらっしゃる。此度の旅、実に楽しみですね」
「いえ、それほどでも……」
「世辞はいいよ」
「滅相もない皆さんほどの女性はそうそういませんよ。よろしければ、皆さんにぴったりの宝石を見繕いますよ」
「依頼したハンターにまで商売とは、見上げたものだ」
「あはははは、いやいや、これもばれてしまいましたか。リィゲルさんもですが、レイア殿もなかなか手ごわいですね」
「当然だ。しかし商人としては良い心構えだ。これでも褒めているつもりだが？」
「おや、これはまた一本取られましたね。油断のならない御仁ばかりだ。だげど、だからこそ貴方たちなら本当に道中は安心ですね」

「恐れ入ります」

「では、そろそろ出発しましょうか。どうぞ荷台に乗って下さい。荷物は空いたスペースにおいていただければ結構ですよ」

「それじゃあ、」

「「「行きましょうか（こうか）」」」

最初の街、ソロンでの最後の一日が、こうして終わった。

――――――――――――――――――――――――――

――

――――ザァァァァァァァァァァ……、ゴロゴロゴロ…………――

――――

正午をやや過ぎ、テレネ運河沿いをひた進む馬車に雨粒が当たっては弾け、当たっては弾けを繰り返し、時折轟く雷鳴が馬を驚かす。

荷台を覆うほろに塗りこまれた乾性油は、雨を完全に防いでいた。

のだが――――、

「みんな……」

「ええ」

「……」

「フン」

――――襲撃者の足音まで消すことはなかった。

「ジャン、速度を上げて下さい。追いつかれます」

「ブルファンゴかい？」

「ええ、どうやら群れにかち合ってしまったみたいですね」

「そいつは大変、早速仕事して貰いましょうかね」

「任せてください。馬車には一匹たりとも近付けさせませんよ」

――”ブルファンゴ”――数多く存在するモンスターの中でも比較的小さな部類に入るモンスターだが、それでも野生のイノシシよりも一回り大きく、上あごに生えた長い大きな角でもって突進してくるのが特徴である。

一匹一匹ならばさほど脅威ではないものの、群れの場合は油断できない。

特に今回は7匹もいた。

「ざっと見て7匹。後続がいない事を祈るよ」
「ヒルダとジャンヌは荷台に残ってくれ。私とレイアが出る」
「わかりました。気を付けてくださいね」
「任されたよ」
「よし。レイアっ、行くぞ！」
「ああ、ついにこれを使うときがきたようだ！」
そう言ってレイアは先日の謎の籠手を両手にはめた。しかし布が巻かれているため、その正体はまだ見えない。
「……昨日の籠手か。いったいそれは何なんだ？」
「ふふふ、あせる出ないぞ、主よ。これぞ我がために作られた得物と言っても過言ではないのだ」
「まあ、レイアがそう思うのなら否定はしないが……。戦えるのか？」
「誰に向かって問うている？」
「ならいい。それじゃあ、行こうか」
「もとより承知！」
言い切るやいなや、荷台から後ろに向かって勢い良く飛び出した

私とレイアは、馬車に追いすがるブルファンゴの群れの前に立ちはだかった。

突然馬車から現れた二人の人間に警戒し、7メートル手前で一旦止まるブルファンゴたち。だが――――、

「これの初めての獲物にはあまりに物足りぬが、まあいい。貴様ら、この刃のさびになる事を悦ぶがいい！！」

――――レイアはその腕にまとった布を剥ぎ取って駆け出していた。

レイアの手に装備されていた籠手とは、いたってわかりやすいものだった。

肘から手の甲までを守るガントレットの、手首の付け根より少し後ろに、刃渡り４０センチ弱の鉤爪が４本付いているだけなのである。

「……ひとつ……」

鬼気迫るレイアに対応しきれず、通り抜けざまに右手の鉤爪が下から柔らかい腹を切り裂かれ、激しい血しぶきと共に門どおり打って死亡。

「……ふたつ……」

突進の構えをしようとするが間に合わず、今度は左手の鉤爪が一匹目と同じく腹部を切り裂かれ絶命。

「……みっつ……」

突進をかけるがレイアはふっと飛び上がり、空中で振り返りつつ左右から十字斬り。

「……よっつ……」

着地のタイミングにあわせた突進だったが、レイアはしゃがんだ態勢で両腕を前に突き出し、勢いあまったブルファンゴは自ら8本の鉤爪に頭から刺し貫かれて生命活動を完全に停止した。

そして――――、

「五匹目からは、私の仕事だ！」

怒りに我を忘れた五匹目のブルファンゴがレイアに突進するも、フルスイングのハルバートによって、胴体を分断された。

――――残り、二匹――――

「ハアアアアアアアアアッッッッ！」

頭上より、遠心力を乗せた振り下しが六匹目の脳天に直撃し、頭蓋はもとより頭部を縦に割られた。

「「ヤァァァァァァッッッッッッッ！！」」

深くしゃがんだ状態からのハルバートによる突き。

高く跳びあがってからの落下エネルギーの全てをつぎ込んだ鉤爪

の突き。

最後の生贄は、計９本の刃に貫かれ、倒れ伏した。

所要時間、１８秒の殺陣だった。

「……ふっ、あっけないものだな」

「私たちならば、この程度は造作もないが、レイア、突出しすぎだよ」

しかし、連携が取れているかどうかは、いまいち怪しい所である。

「あ、リィゲル、レイア。二人とも怪我はありませんか？」

馬車は私たちが戦ったところからおよそ５００メートル行った場所に停まっていて、私とレイアが近くまで来ると、ヒルダが若干心配そうな顔をして、水をはじく布を頭からかぶって近付いてきた。

「ああ、怪我はないよ。大丈夫だ」

「当たり前だろう。あんな小童（こわっぱ）ども相手に怪我などする方がどう

かしている」

「どちらかと言えば恍惚とした表情で飛び出していったレイアの方が心配だったのですが……」ヒソヒソ

「……まあ、確かにな」ヒソヒソ

「む、なんだ二人して。我の顔に何か付いているのか？」

「「いや（いえ）、何でもない（ありません）」」

「そうか、ならよい」

「それより、早く荷台に入ろう。びしょぬれままでは風邪を引いてしまう」

「それもそうだな」

そうして二人はすごすごと荷台に入っていった。

と言っても馬車の中で服が乾かせるはずもなく、スコールがやむまで冷たく濡れそぼった服を着続けた二人であった。

「「ヘックショイッッ！」」

第二章　第三話　「いい日旅立ちのち雨」（後書き）

……相変わらず戦闘描写がヘタすぐる　ｏｒｚ

もうちょっと巧く書きたいなあ；；

はい、と言うわけでリィゲル君たちのお見送り部隊であるブルファンゴ君たちはあっさりと返り討ちにあっちゃいましたねｗ

あっさりしすぎて面白くない気がしてきた　（。ε。）／～

ご意見・ご感想・お叱りどしどしご応募くださいｗ

挿絵とか、描いてくれたりしないかなあ　（ワクワク　ドキドキ

それでは、この辺で締めくくりたいと思いま～す＾＾

次回も乞うご期待！！！！

お詫びと訂正

すいません、間違って完結設定にして、最新話を投稿してしまいました＞＜

お騒がせしました事を心よりお詫び申し上げます。

「ファンタジア・フロンティア！」はこれからも続きますので、なにとぞこれからもお付き合いいただければ幸いです。

繰り返しますが、先ほどの完結という設定はこちらの操作ミスで、「ファンタジア・フロンティア！」はこれからも連載していくので、誤解のないようお願いします。

本当に申し訳ありませんでした＞（＿＿）＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2274o/

ファンタジア・フロンティア！

2011年5月3日12時22分発行